

# 明日に咲く花

Yuiko Mizuhara



「ユールベル、データの集計は進んでる？」

「はい、まもなく終わります」

「じゃあ、終わったらジョシュに送ってね」

「はい……」

「よろしくー」

ユールベルは実習生として魔導科学技術研究所に来ていた。あと半年ほどでアカデミーを卒業し、その後、ここで勤務することになっているのだ。

社会に出てやっていける自信など、彼女にはなかった。

だが、そうしなければならないとサイファに諭された。それが社会のシステムなのだという。ユールベルも18歳になり、成人となった。いつまでも子供のままでいてはいけないのだ。

両親から受けている金銭的援助も、アカデミー卒業後に打ち切ることに決定された。つまり、自分が働かなければ、生きていくこともできないのである。

サイファは困ったときは手を差し伸べてくれる。だが、決して甘やかしてはくれない。

そのことについて不満があるわけではない。自分のためであることはわかっている。ただ、漠然とした不安が自分を苦しめていた。

しかしまだ三日目だ。こんなところで挫折するわけにはいかない――。

「集計……終わりました」

「ああはいどうも」

ジョシュはモニタから目を離すことなく、投げやりに答える。

ユールベルは彼が苦手だった。

自分も愛想はない。だから、そのことについてはとやかく言うつもりはない。だが、彼の場合は、単に愛想がないというだけではなく、棘というか、あからさまな敵意のようなものを感じるのだ。それは自分にだけ向けられているように思う。最初に会ったときからそうだったので、原因すらもわからない。

「いつまでもそんなところに突っ立ってるなよ」

嫌悪感を含んだ声でそう言われ、ユールベルはハッとして急いで席に戻った。うつむいて小さく溜息をつく。

「ジョシュは人間嫌いなんだ。気にすることはないよ」

突然、耳元で囁かれ、全身がぞわりと粟立つ。

同じフロアで仕事をしているレイモンドだ。

ジョシュよりも幾分年上の30歳くらいだろうか。彼は何かとユールベルを気に掛けてくれる。優しいのかもしれない。だが、そのコミュニケーションの取り方が、ユールベルには馴染めなかった。距離が近すぎるのだ。くっつかんばかりに顔を近づけてきたり、腕や肩に触れてきたり、

親しくもないのに無遠慮に私的な空間に踏み込んでくることに不快感を覚えるのである。

そんなユールベルの心情をわかっているのかいないのか、レイモンドはさらに肩に手をのせて続ける。

「今度ゆっくり相談にのろう」

「……いりません」

「遠慮することはない。そうだ、今夜一緒に食事でもしながら話を聞くとしよう。いい店を知っているから予約をしておくよ。仕事が終わるころに迎えに行くから」

ユールベルの拒絶などお構いなしに、レイモンドは勝手に話を進めると、白い歯を見せて片手を上げ、自席へと戻っていった。

——どうしよう……。

ユールベルは口をきゅっと結んでうつむいた。断りたいのに上手く断れない。自分の言い方が悪かったのだろうか。どう言えばわかってもらえるのだろうか——そんなことを考えていると、不意に頭上から声が降り注ぐ。

「次の仕事」

ジョシュはぶっきらぼうにそう言うと、数枚の書類をユールベルの机に投げ置いた。

いつもであればそれだけですぐに立ち去るのだが、今回はいまだそこにとどまったままである。ユールベルは不思議に思って顔を上げた。

「あいつはやめておけ」

ジョシュは不機嫌な顔のまま、ぼそりとそんなことを言う。

それが何を指してのことか、ユールベルにはすぐにわかった。しかし素直に聞く気にはなれなかった。今までほとんど拒絶に近い態度をとっておきながら、突然、それも仕事以外のことで干渉してきたことに、何か怒りのようなものが沸々と湧き上がってきた。

「あなたには関係ない」

うつむいて眉根を寄せながら反発する。

ジョシュは何も言い返さず、表情も変えず、静かに自席へと戻っていった。

自業自得——。

ユールベルは心の中で溜息をついた。

行きたくはなかったが上手く断ることができず、またジョシュに対する意地もあり、仕事が終わったあと、レイモンドに誘われるまま食事に出かけることになった。

彼が予約していたのは、研究所からほど近いところにある、優雅な雰囲気のレストランだった。出される料理も手が込んでいて上品なものばかりだったが、ユールベルはほとんど上の空で、きちんと味わうことができなかった。こういう店は初めてということもあり、どうにも馴染むことができず、居心地の悪さを感じていたのだ。

しかし、理由はそれだけではない。

レイモンドは相談にのると言っておきながら食事誘ってきた。だが、いざ来てみると、そういう話題はまったくなく、ひたすら自分の話ばかりしていた。その内容は、自己顕示欲を満たすためだけ

のもの——平たく言えば自慢話である。ときどきユールベルに話を振ってきたが、それも仕事とはまったく関係のない、ラグランジェ家に関する話題のみである。別に相談したかったわけではないが、彼の意図がわからないことに少し気味悪さを感じていた。

二時間ほどして外に出ると、あたりはすっかり闇に包まれていた。遠くの空に小さな星がいくつか瞬いているのが見える。

「遅くなってしまったな。家まで送るよ」

「ひとりで帰ります」

「男に恥をかかさないでくれ」

レイモンドは白い歯を見せて言う。彼の言っていることは理解できなかったが、面倒なのでもう何も言い返さなかった。相手の言うことも聞かず、一方的に事を進める彼には、何を言っても無駄だと思ったのだ。

ユールベルが歩き始めると、レイモンドもその隣に並んで歩調を合わせる。

「今日は楽しかったな」

「……………」

ユールベルは沈黙というささやかな抵抗を試みた。

それでも彼は気にする様子もなく、細い肩に手をまわして力を込める。意にそわず、ユールベルは彼に寄りかかることになった。離れようとしたが、彼の腕がそれを許さない。

「僕たちは相性がいいようだ」

「そんなこと……ないと思います……」

無視を続けようと思ったが、堪えきれずについ反論してしまう。

しかし、それすらも彼は軽く受け流した。

「ユールベル、僕は決心したよ」

そう言うと、ユールベルの両肩を掴んで自分と向かい合わせる。

「結婚しよう」

「……えっ?!」

ユールベルはさすがに驚き、素っ頓狂な声を上げた。

「君と出会った瞬間に運命を感じた。そして君とこの素晴らしい夜を過ごして確信した。僕の伴侶となる人は君しかいない。愛しているんだ。もう片時も離れたくない」

どこかで聞いたようなセリフを並べ立てて迫り来る彼に、ユールベルは困惑しながら後ずさった。しかし、一歩下がっただけで、足が固いものに阻まれる。塀だった。その存在を認識すると同時に、彼女の体はそこに押し付けられた。彼の手は両肩を掴んだまま離さない。

「ユールベル……」

「い、嫌っ!」

近づいてくる顔を両手で押しのけ、蹴躓きながら必死に逃れる。そして、何歩か離れたところで振り返ると、潤んだ右目でキッと睨みつけた。

「……お断り……します……!」

噛みしめるようにそう言うと、背を向けて全速力で走って逃げた。

「まだ出来てないのか？」

ぼんやりしていたユールベルは、頭上から降り注ぐその声で我にかえった。慌てて机の上に散らばる書類に視線を落とす。頼まれていた作業はまだ半分も終わっていなかった。

「あ……もうすぐ、です……」

「ぼうっとするくらいなら帰れ」

ジョシュは刺々しい言葉を投げつけた。そして、仏頂面で冷たく一瞥すると、背を向けて自席へと戻っていった。

ユールベルはきのうのことを引きずっていた。

出会ってまだ三日である。なのに、どうして結婚とまで言い出すのかわからなかった。そして、そのことに何か言いようのない恐怖を感じていた。

——行かなければ良かった。

ジョシュの忠告を聞かなかったことを後悔する。しかし、レイモンドのしつこさを考えると、きのうは逃げられたとしても、いつかは付き合わされることになるだろう。嫌な思いをしたものの、はっきり断れたことは良かったのだと、めずらしく前向きに考えることにした。

「それ貸して。私がやるわ」

今度は女性の声だった。振り返ると、ジョシュの先輩であるアンナがウィンクをして手を差し出している。ユールベルが呆然としているのを見ると、自分で机の上の書類を拾い始めた。

「気にしないで。誰にだって調子が出ないときはあるわ。その代わり、それを資料室に返してきてくれないかな。雑用で悪いんだけど」

アンナはにっこりとして、隣の棚の上に投げ出されていた書籍三冊を指差した。随分と前から放置されていたらしく、薄く埃さえかぶっている。すぐに返さなければならぬものとはとても思えない。おそらく、アンナがユールベルに気を遣って簡単な仕事をくれたのだろう。

ユールベルは素直にこくりと頷いて、その書籍を抱えて立ち上がった。

資料室は地下にあった。小さめの会議室程度の広さで、そこにスチール製の書棚が数列並んでいる。地下であるため窓はなく、空気は湿っていて、あたりは少しかび臭い。本を保管するのに良い状態とはとても思えなかった。

本に貼られた分類シールを頼りに、一冊ずつ書棚に戻していく。

二冊目を戻したそのとき、入口の扉がギィと嫌な軋み音を立てて開いた。ユールベルは書棚の隙間から、息を潜めて窺う。

「やあ、ユールベル」

それはレイモンドだった。書棚越しにユールベルと目が合うと、軽く片手を上げて笑顔を見せる。しかし、ユールベルにはそれがとても恐ろしく感じられた。持っていた本を床に落とし、

逃げるように奥へと後ずさる。

「何をしに来たの……？」

「ちょっと婚約者の様子を窺いに来たのさ」

レイモンドはしれっとそんなことを言いながら間を詰める。

「そのことは……断ったはず……」

ユールベルの背中にひやりとした固いものが当たる。壁だった。これ以上、後ろには下がれない。前からはレイモンドが迫ってくる。ユールベルは横に飛び出そうとした。だが、その寸前に両の手首を掴まれ、体を壁に押し付けられる。抗おうとしても、体格と力に圧倒的な差があり、まるで杭を打ち付けられたかのようにびくともしない。

レイモンドは口の端を吊り上げた。

「白馬の王子様計画はお気に召さなかったようだね。苦労して君に合わせたのに傷ついたよ。お嬢さまは我が侂だから仕方ないのかな」

ユールベルにはどこが白馬の王子様なのかさっぱりわからなかった。だいたいそんなことを頼んだ覚えはないし、白馬の王子様が好きだなどと言った覚えもない。勝手なことを言うにもほどがあると思う。

「だが、もうまどろっこしいことはやめだ。ここからは俺のやり方でやらせてもらう」

レイモンドは鋭い視線を向けてそう宣言すると、すぐさまそれを実行に移した。ユールベルを押さえつけたまま、乱暴に貪るように口を奪っていく。

どうして私がこんな目に——。

悔しくて目に涙が浮かんだ。逃れようとするものの、非力な彼女の抵抗はすべて押さえ込まれてしまう。どうすることもできない。何もかも諦めたように、ユールベルの体から力が抜けた。

「は……あっ……」

しばらく後に、ようやく口を解放され、苦しそうに息をした。その端から流れ落ちたどちらのものともわからない唾液を拭おうとする。

そのとき、ようやく気がついた。

いつのまにか彼女の両の手首は紐のようなもので縛られていた。ただの紐ではない。魔導で作られたもののようだ。そして、それは隣のダクトに括りつけられており、ユールベルの動きを封じていた。

「何を……?!」

「既成事実を作るのさ」

「きせ……い……？」

「子供を作る」

絶句する、とはまさにこのことを言うのだろう。彼の言葉を耳にした瞬間、思考のすべてが停止し、頭が真っ白になった。言葉など何ひとつ出てこない。

レイモンドは呆然としているユールベルを床に押し倒すと、その上に馬乗りになった。ブラウスのボタンを鼻歌を歌いながら外していく。

「や……やめて……っ」

「怖がることはない。夫婦ならみんなやっていることさ」

下着がずらされて白い胸もとが露わになる。その心もとない感覚と、彼に見られている恐怖で、ユールベルは小さくふるりと身震いした。逃げるようにそこから視線をそらし、きつく眉根を寄せる。

「私たちは……夫婦じゃない……」

「近いうちにそうなるんだよ」

「やっ……」

見た目よりもごつく感じる手が、太股を這い上がるようにして短いプリーツスカートの中へ侵入する。同時に、ざらついた生ぬるい舌が生き物のように胸の上を蠢き出す。言いようのない嫌悪感に、全身がぞっと粟立った。

「……………っ……」

体中に与えられる望まない刺激に、ユールベルは歯を食いしばって耐えた。目をきつく瞑り、必死に声を漏らさないようにする。しかし、彼の執拗な攻めに、次第に限界へと近づいていった。

「も……やめ……てっ……」

「声を抑えるのはつらいだろう？ 我慢しなくてもいい。どうせ上に聞こえはしないんだ」

レイモンドは耳元で囁くように厭らしくそう言うと、戯れとばかりに耳朶を舐め上げた。

しかし、それきり何もなかった。彼がそこにいることは確かだ。足元にまたがっているような感触はある。にもかかわらず、声が聞こえなければ、手が這うこともない。

ユールベルはぼんやりと薄目を開けた。

パシャッ——。

その音と同時に白い閃光が彼女を襲う。思わず目を瞑った彼女が、再びゆっくりと目を開くと、そこには立て膝のレイモンドが小型のカメラを右手で構えていた。

「これは、君が他の男に心変わりしたときの保険さ」

ユールベルの目から涙が溢れた。まなじりを伝って耳を濡らす。

「さて、そろそろ本番といくか」

「こんなところで何やってるんですか」

レイモンドのものではない、声。

ユールベルには誰だかすぐにわかった。

「ジョシュ、これから大切な作業があるんだ。邪魔をしないでくれるか？」

レイモンドはそう言って振り返ると、挑発的に口の端を吊り上げ、自分の中指をゆっくりと見せつけるように舐め上げた。

しかし、ジョシュは仏頂面を崩さなかった。

「そういうことは研究所の外でやってください」

「そんな規則はなかったはずけどな」

「規則に書くまでもない常識でしょう」

冷ややかにそう言う彼に、レイモンドは両の手のひらを上に向けて肩をすくめた。

「仕方ないな、よし、そこで見学することを許可しよう。君の後学のためにね」

「所長と警備を呼んできます」

ジョシュは無表情で踵を返した。

「待てよ。わかったよ、出て行けばいいんだろう」

レイモンドはしぶしぶ立ち上がった。自分のやっていることに問題があるという自覚はさすがにあったようだ。ジョシュの肩をポンと叩くと、追い越して扉のところで振り返る。

「ユールベル、続きはまた今度、邪魔の入らないところでな」

ユールベルは全力で首を横に振った。

しかし、レイモンドは気にせず笑顔を見せ、右手を上げて出て行った。乾いた足音はすぐに遠ざかり、聞こえなくなった。

ジョシュは面倒くさそうに大きく溜息をついた。仏頂面のまま右手で頭を押さえると、視線だけを無感情に落とす。

「やっ……」

その視線でユールベルは我にかえった。自分がどんな格好をしているかに気付き、羞恥と恐怖で涙がこぼれた。しかし、手首を拘束されているため、隠すことも叶わず、僅かに身をよじることしかできない。

そんなユールベルに、ジョシュは無言で足を進めると、横たわった身体の上にまたがって片膝をついた。先ほどまでレイモンドがいた、まさにその場所である。

「や、やめてっ……！ 嫌っ！」

「落ち着け！！」

その一喝に、ユールベルはビクリと動きを止めて息を呑んだ。

ジョシュは捲り上げられたスカートを元に戻し、肌蹴た胸もとを隠すようにブラウスのボタンをひとつだけ留めると、拘束された手首を指差して言う。

「これを外す。いいな？」

ユールベルは濡れた目を見張ったまま、こくりと小さく頷いた。

ジョシュは拘束された手首へ近づいていくと、両膝をつき、両手を向かい合わせて呪文を唱え始めた。手の間にほのかな光が発生する。彼女の手首を傷つけぬよう、手のひらにとどまったその光を、魔導の紐だけにそっと触れさせる。

しかし、紐には何の変化もなかった。

「あ……れ……？」

「……失敗……したの？」

「ちょっと待て、もう一度やるから、な？」

ジョシュはきまり悪そうに顔を紅潮させ、もう一度、焦りながら両手を向かい合わせて呪文を唱えようとする。だが、そのとき――。

「何をやってるんだ！！」

開け放たれたままになっていた入口に、一人の男性が姿を現した。ジョシュたちを目にするな



り驚愕の表情でそう叫ぶと、抱えていた書籍をバサリと床に落とし、即座に両手を振り上げて魔導の力を集める。

「ちょっ、待て！！」

ジョシュの訴えも聞かず、男性は白い光球を放った。ジョシュはすんでのところまで結界を張ってそれを消滅させる。本当にギリギリだった。あと一瞬でも遅れていたら体に直撃していただろう。顔を引きつらせながら、なおも必死に訴えかける。

「落ち着けサイラス！これにはわけが……」

「どんなわけがあったってこんなこと許されるわけないだろう！」

「違うの！この人は……ジョシュは私を助けてくれたのっ！！」

馬乗りになったジョシュの下から、ユールベルは必死に声を張り上げた。

「はい、外れたよ」

事情を聞いたサイラスは、ユールベルの手首を拘束していた魔導の紐を消滅させると、立ち上がって後ろのジョシュに振り向いた。先ほどとは別人のような穏和な表情を見せている。

「ちょっと特殊な細工がしてあったけど、それほど難しいものでもないよ。ジョシュもよく見ればわかったんじゃないかな。さすがに焦ってたんだね」

「そりゃ焦るでしょ、こんな状況じゃ」

ジョシュは溜息まじりにそう言うと、上半身を起こしたユールベルの脇にしゃがみ、その手首をとって一通り観察する。

「特に怪我はないようだな。他は……」

「大丈夫……です……」

ユールベルは自由になった手で、左目を覆う包帯を確かめたが、幸い外れてはいなかった。ほっとすると同時に、今さらのように自分の姿に対する恥ずかしさが込み上げてきた。彼の視線から逃れるようにうつむくと、ブラウスの前を掴んで体をよじる。

「入口を見張ってるから服を着ろ」

ジョシュは無愛想に言葉を落とし、背を向けて入口の方に向かった。

それは彼なりの配慮だったのだろう。

ユールベルにはそれがありがたく感じられた。どんな同情の言葉よりも、どんな思いやりあふれる態度よりも、今はただそっとしておいてほしかった。そして何より、一刻も早くこの無残な格好を何とかしたいと思った。

部屋の隅に座ったまま衣類を身に着けていく。

それだけで気持ちが少し落ち着いた。安心したせいか急に泣きたくなった。そして無性にラウルに縋りたくなった。しかし、それは自分がしないと決めたこと。その面影を振り払うように小さく頭を左右に振ると、涙をこらえて唇を噛んだ。

入口付近で二人はユールベルの方を見ないようにして立っていた。資料室の外からの音に耳をそばだてながら、声をひそめて会話をする。

「サイラス、おまえ何しに来たんだよ。アカデミーはいいのかよ」

「今日は助手の子に任せて、こっちの研究を進めようかと思って」

「教師引き受けたんだから、気が進まなくても真面目にやれよな」

ユールベルはそれを聞いて思い出した。このサイラスという男性は、アカデミーで何度か顔を見たことがあった。確か魔導全科一年の担任である。どうやらこの研究所の所員でもあるらしい。

「そんなことより、これからどうするつもり？」

「俺が知るかよ」

ジョシュはぶっきらぼうに答えると、前髪を掻き揚げながら疲れたように溜息をついた。

「とりあえず今日は帰らせて方がいいだろうな」

「そうだね、体調が悪くなったことにでもして」

サイラスも同意して頷く。しかし、ユールベルはそれを望まなかった。

「仕事、します……」

少しふらつきながら彼らの方に足を進めると、掠れた弱々しい声で主張する。

二人は面食らったように振り向いた。

「無理しなくていいんだよ」

サイラスは優しい口調で宥めたが、ユールベルは首を横に振った。

「逃げるのは悔しい……もの……」

「そんなことを言っている場合じゃないだろう」

今度はジョシュが呆れたように言ったが、それでも頑なに首を横に振った。

レイモンドが何を考えているのかはわからないが、このまま引き下がったのではまるで彼に屈服したかのようである。ますます彼が調子に乗ることになるだろうと思った。それに、自分のいないところでレイモンドが何を言い出すか、どんな行動をとるのかを考えると怖かった。顔は会わせたくないが、目の届くところにいた方がまだましである。

「……わかった」

「ジョシュ、ちょっと……」

眉をひそめるサイラスを無視して、ジョシュは真面目な顔でユールベルと向かい合った。

「まず、顔を洗ってこい。それから一緒に戻る。おまえは気分が悪くなって資料室でしばらく倒れていた。俺はそれを見つけて回復するまで付き合っていたことにする。いいな？」

ユールベルはこくりと頷き、顔を伏せたまま資料室を出ていった。

その後、ユールベルは仕事に戻った。

予想したとおり何度かレイモンドが声を掛けてきたが、ジョシュやサイラスが上手く追い払ってくれた。仕事に戻りたいという自分の我が侷のせいで、彼らには迷惑を掛けてしまったと申し訳なく思う。

「お疲れ、もういいから帰れよ」

就業時間が終わるとすぐに、ジョシュはユールベルにそう声を掛けた。相変わらず素っ気ない

口調ではあるが、もうそこに敵意を感じることはなかった。

「やあ、ユールベル。どこで続きをしようか」

レイモンドがとぼけた笑顔でやってきた。

ユールベルがびくりとして一步後ずさると、入れ替わりに、ジョシュが庇うように一步前に踏み出した。背の高いレイモンドを見上げると、感情を抑えた口調で言う。

「センパイ、仕事で訊きたいことがあるんでちょっといいですか」

「悪いが明日にしてくれ。これから大事な用事があるんでね」

「こっちも大事なことなんですよ」

ジョシュはそう言いながら、体の後ろでこっそりと左手を振り、ユールベルに早く行けと指示をする。ユールベルは小さく頷くと、逃げるように走って研究所を出て行った。

「まあいい、チャンスはいくらでもあるからな」

レイモンドは両手を腰に当て、おどけるように肩をすくめて見せた。

「ジョシュ、君はお姫さまを護る騎士にでもなったつもりかもしれないが、よく考えてみろ、誰の味方をするのが自分にとって得なのかを」

「そういう考え方しか出来ないんですか」

ジョシュは冷ややかに言い返した。

しかし、レイモンドは飄々とした態度を崩さなかった。まるでそんなジョシュの反応を楽しむかのように、どこか陽気ささえ感じさせる表情を見せながら言う。

「君は相変わらず堅物だな。そうだな……、よし、君がそれほどユールベルを気に入ったのなら、一度くらい抱かせてやってもいいぞ」

「……あんたやっぱサイテーだよ」

ジョシュは嫌悪感も隠さず、軽蔑するように吐き捨てる。

フッ、とレイモンドは不敵な薄笑いを浮かべ、横柄に腕を組んでジョシュを見下ろした。

「君はもう少し上手く立ち回ることを覚えた方がいい。もし私の側につくというのなら、私が所長になった暁には……」

「あんたに牛耳られた研究所なんか、こっちから願い下げだ」

ジョシュは低く唸るような声でレイモンドの言葉を遮ると、腹立たしげに背を向けて自席に戻った。乱暴に体重をかけられた椅子の背もたれが、ギッと耳障りな音を立てて軋んだ。

翌日、ユールベルは鉛のように重たい気持ちを引きずるようにして出勤した。

前日と同様にレイモンドはあれこれちょっかいを出してきたが、ジョシュが何とか上手くあしらってくれた。しかし、そのたびに彼の仕事の邪魔をしているようで、ユールベルは心苦しかった。

自分は辞めた方がいいのかもしれない。

そうすれば彼もこんなことに煩わされることはないはずだ。

しかし、今はそんなことを考えるよりも、少しでも仕事を進めなければならない。これ以上、

ジョシュの足手まといにならないように――。

昼休みになると、レイモンドは懲りもせずユールベルのところへやって来た。逃げようとしたユールベルを阻むように、笑顔で両腕を広げながら近づく。

「お昼は食堂だな。みんなに僕たちの仲睦まじいところを見せつけるとしよう」

まわりの人にも聞こえるようにわざと声を張っている。何人かの所員が興味深そうに二人を見ていた。中には誤解している人もいるかもしれない。

ユールベルは怖くなって、必死に首を横に振った。

そのとき、ジョシュが横からさっと割って入った。素早くユールベルの手を取ると、その手を引いて歩き始める。

「おい、待てよ。人の妻を掠め取るとはいい度胸だな」

「彼女と仕事の話がありますので」

ジョシュはもう何を言っても無駄だと思ったのだろう、妻という言葉で訂正することなく、無表情のまま素っ気なくあしらった。

レイモンドはフツと鼻先で小さく笑った。

「いつまで足搔けるかな」

ジョシュはそれを無視し、ユールベルとともに足早にフロアを後にした。

二人は食堂に入ると、昼食を買ってから窓際のテーブルについた。

ジョシュは無言でスパゲティをフォークに絡めている。その表情には濃い疲労の色が見て取れた。その原因が自分であることを、ユールベルは痛いほど理解している。膝の上のプリーツスカートがギュッと掴んで顔を上げる。

「あの……」

「あらー？ 女嫌いのジョシュ君がめずらしい」

ユールベルのか細い声は、アンナのよく通る声に掻き消された。アンナはプレートを手にして立ったまま、人なつこい丸顔でニコニコしながら二人を見下ろしていた。

「何か用ですか？」

ジョシュは少し苛立った声で尋ねる。それでもアンナの笑顔は崩れなかった。

「良かった良かった。二人が仲良くしてくれてお姉さん嬉しいぞう。ジョシュはとっつきにくいけど悪い子じゃないの。仏頂面も冷たい態度もぜーんぶ照れ隠しだと思ってればいいからね。まだまだお子様なのよ」

「殴りますよ……」

ジョシュは低い声で物騒なことを言ったが、アンナは完全に無視してユールベルにウインクした。ユールベルはどう反応すればいいかわからず、困惑しながら目を伏せる。

「あと……」

アンナは少し真面目な顔になると、腰を屈めてユールベルの耳元に口を寄せた。

「レイモンドに気に入られてるようだけど、あいつには気をつけた方がいいわ。ちょっとヤバい

から」

そう小さな声で囁いて、頭を指さしながら片眉をひそめて見せる。

「ま、ジョシュと一緒にいてくれれば安心だけどね。じゃあまたっ！！」

彼女は軽く手を振り早足で去っていくと、少し離れたところで待っていた同僚とともに奥の席についた。キャピキャピと楽しそうにはしゃぐ声が聞こえる。

「……あいつ、何て？」

「レイモンドはヤバいから気をつけなさいって」

「遅せえよ」

ジョシュは力なく笑いながら溜息まじりに言った。面倒くさそうに頬杖をつく、手に持っていたフォークを回し、再びスパゲティを絡め始める。

ユールベルは膝に手を置いたまま視線を落とした。

「ごめんなさい、女嫌いなのに……」

「からかってんだよ、そんなこと真に受けるな」

ジョシュは少し怒ったように語調を強めると、スパゲティを絡めたフォーク口に運んだ。そして、今度はサラダをつつきながら重い声で切り出す。

「おまえさ、ボディガードでも雇えよ。研究所の中なら俺が気をつけてやれるけど、外まではさすがに無理だ。あいつは本当にヤバい。このままだといつか……」

彼はそこで言葉を切ったが、何を言いたかったのかはユールベルにもわかった。あのときのことを思い出して表情がこわばる。そんな彼女に、続く彼の言葉がさらに追い打ちを掛けた。

「ラグランジェ家のお嬢さまなら、そのくらいしてもらえるだろう」

ラグランジェ家のお嬢さまなら――。

ユールベルは深くうつむき、膝に置いた手をギュッと握りしめた。

「……私……お嬢さまじゃない……」

彼に悪気がないのはわかっている。ユールベルの家庭の事情など知るはずもない。ラグランジェの名を聞けば、それなりの良い暮らしをしてきたと思われても仕方のないことだ。しかし、実際は薄暗い部屋で長年幽閉されて、ただ生かされていただけだった。人間としての扱いすらされていなかったのである。

「ボディガード、無理なのか？」

ジョシュは戸惑ったように眉をひそめて尋ねる。

「私、ここを辞めます……あなたにも迷惑を掛けてしまうし……」

サイファの紹介でここに来たので、簡単に辞めるわけにはいかないと思ったが、もはやそうするしかないと思った。ジョシュやサイラスに甘え続けるわけにはいかないし、このままではかえってサイファに迷惑を掛けることにもなりかねない。

「そうだな、それがいいかもしれない」

ジョシュも賛成した。しかし、暗い声で言葉を繋ぐ。

「ただ、あいつがそれで諦めるかはわからないが……」

確かにあれほどの執着を見せているレイモンドが簡単に諦めるとも思えない。だからといって

、他にとるべき方法など思いつかない。ユールベルはただうつむくことしかできなかった。

「やあ、ユールベル」

「おじさま」

書類を整理していたユールベルは、背後から名を呼ばれ、咄嗟に立ち上がって振り向いた。そこには、濃青色の制服を着たサイファが、人なつこい笑みを浮かべながら軽く右手を上げて立っていた。研究所にいるときは所長と一緒にすることが多いが、今日はひとりのようだ。

「仕事の調子はどうかな？ 困ったことや悩みごとがあったら相談にのるよ」

「……私……大丈夫です……」

ガン！ と唐突に激しい音がして、ユールベルはビクリと振り向いた。それは、ジョシュがスチール製の机を蹴り飛ばした音だった。仏頂面でモニタに向かったまま、苛立った様子で口を開く。

「何度も言ってますが、仕事の邪魔をしないでもらえますか。仕事とは関係のない話をするなら研究所の外でしてください。その役立たずは連れて行って構いませんから」

「ジョシュ！！」

離れていたところにいたアンナが飛んできて、ジョシュの頭を拳骨で横殴りにした。そして、サイファに向き直ると、腰から二つ折りになるくらいに頭を下げた。

「申しわけありませんっ！」

「いつも邪魔をしていたようで、こちらこそ申しわけなかったね」

サイファは笑顔のままで言う。それを見たアンナの顔から血の気が引いた。

「邪魔だなんてそんなこと全然ありません！」

サイファはにっこりとしてユールベルの肩を抱き寄せた。

「彼の言葉に甘えさせてもらって、ユールベルをちょっと借りたいんだけどいいかな？」

「はい！ どうぞいくらでも！！」

戸惑うユールベルに、ジョシュがちらりと目を向けた。その目を見てユールベルは理解した。これが彼なりの配慮だということを――。

ユールベルは、魔導省の塔にあるサイファの個室へと連れられてきた。サイファに促され、大きな執務机の前に置かれた椅子に座る。

「ここなら邪魔者はいないし、心置きなく話ができるだろう」

「おじさま、ジョシュは私のためにあんな言い方をしたの」

本題に入る前に、まず彼の態度について弁明しておきたかった。自分のためにいつまでも彼を悪者にしてはおけない。信じてもらえるだろうかと心配したが、サイファはとっくに見透かしていたようだ。

「そんなことだろうと思っていたよ。あの場では言いにくい話があったのかな」

「それは……」

ユールベルにはまだサイファに話す決心がついていなかった。しかし、辞めるにしても、サ

イファには理由を告げなければならない。握りこぶしを胸に当ててグッと押さえると、思いつめたように表情を引き締めて顔を上げる。

「私、研究所を辞めるつもりです」

「理由を聞かせてもらえるかな」

サイファは顔色一つ変えず、冷静に尋ねた。

ユールベルはレイモンドのことをサイファに話した。仕事中でもしつこく言い寄ってくること、結婚を前提に付き合ってくれと言われたこと、断ったにもかかわらず婚約者のつもりでいることなど、思いつく限りのことを堰を切ったように言う。ただし、資料室でのことだけは触れなかった。あれだけはサイファであっても知られたくなかった。しかし、それを除いたとしても、辞める理由には十分だろうと思った。

「レイモンド……レイモンド＝ニコルソンか……」

サイファは真剣な顔で聞いたあと、小さくそれだけ呟くと、すぐに方々に連絡を取り始めた。それはまさに怒涛の勢いだった。ユールベルが口を挟む隙もないくらいである。時折、何かの書類を持った人がやってきて、サイファにそれを渡していく。サイファはそれを見ながらさらにどこかに連絡、指示をする。その繰り返しだった。何をしているのか具体的にはわからなかったが、どうやらレイモンドについて調査しているらしいことだけはわかった。

それが一時間ほど続いたのち、サイファは丁寧に受話器を置くと、ユールベルに目を向けてにっこりと微笑む。

「ユールベル、君が辞めることはないよ」

「え……？」

「レイモンドをここへ呼んで話をつける」

「おじさまやめて！私……いいの、私が辞めるから！」

ユールベルは引きつった声で懇願した。

「そうはいかない。これは君だけの問題ではないからね」

サイファは鮮やかな青の瞳に鋭い光を宿して言った。冷たい笑みを浮かべるその表情には凄みがあり、ユールベルはゾクリと背筋が凍りつくように感じた。

そのとき、初めて彼のことを怖いと思った。

君だけの問題ではない——その言葉の意味はわからなかったが、尋ねることも反論することもできず、ただ椅子に座ったまま硬直するだけだった。

コンコン——。

扉が軽快にノックされた。

「入りたまえ」

サイファはいつもより厳粛な声で言った。

扉を開けて入ってきたのは、予想どおりレイモンドだった。ユールベルは思わず椅子から立ち上がり、警戒するように身構えながら一步下がった。

しかし、レイモンドはユールベルには目も向けず、サイファに向かって丁寧に挨拶をすると

、思いきり愛想のよい顔を見せて言う。

「ラグランジェ本家当主直々のお呼び出しとは光栄の極みです」

「なるほど、君にとって私はラグランジェ本家当主というわけか。君の勤める魔導省の副長官ではなく、ね」

サイファは意味ありげな笑みを、その形の良い唇に乗せる。

一瞬、レイモンドは怯んだ。口元を僅かに引きつらせる。しかし、すぐにそれをごまかすように笑うと、両の手のひらを上に向け、大袈裟に肩を竦めて言い訳する。

「魔導省副長官より、ラグランジェ本家当主のインパクトが強かったです。他意はありません」

「君はユールベルに随分と執拗につきまとっているようだね」

「いえ、私たちは結婚を前提として付き合っています」

サイファは少しの間も置かず本題へと移したが、今度は心構えができていたのか、動揺を見せることなく平然と即答した。

「ユールベルは断ったと言っていたが？」

「少し喧嘩をしてしまったので、今は機嫌が悪いです。いくら愛し合っていても、些細なことで喧嘩になってしまうことくらい、あなたにもありますよね？」

「さあ、私にはないな」

同意を求めたレイモンドに、サイファはつれない答えを返す。

その答えが事実かどうかは、ユールベルにもわからない。だが、レイモンドを動揺させるのに効果的だったことは間違いないようだ。予想外の返答にシナリオが狂ったのか、少しの間だったが言葉を詰まらせた。

「……とにかく、私はユールベルを愛していますし、ユールベルも私を愛してくれています」

「嫌っ……！」

レイモンドに肩を抱かれたユールベルは、抵抗して身をよじり、その腕から逃れようとした。だが、レイモンドは耳元に悪魔の囁きを落とす。

「写真」

その一言だけで、彼が何を言いたいのかわかった。

そう、彼の手には切り札があったのだ。

ユールベルは抵抗する手を止めた。彼の言いなりになどなりたくはなかったが、そうしなければあの写真をばらまかれてしまう。悔しくて目に涙が滲んだ。

「よろしければここで結婚の許可をいただけませんか？今すぐ結婚でなくても構いません。とりあえず確約だけいただければと。一生、彼女とともに生きていく覚悟は出来ています。彼女も同じ気持ちのはずです。そうだろう？ユールベル」

「……わた、し……私は……嫌っ！！」

ユールベルは耐えきれずにそう叫ぶと、レイモンドを突き飛ばした。彼の体は虚をつかれてよろめく。しかし、すぐに体勢を立て直すと、顔いっぱい笑顔を作って言う。

「結婚式は君の望みどおりにするよ。だからそろそろ機嫌を直してくれないかな」



「写真なんて好きにすればいい！ 一生あなたと生きていくより、そっちの方がよっぽどましだわ！！」

ユールベルは体の横でこぶしを握りしめ、体の奥から声を絞り出すように叫んだ。右目から涙が零れ落ち、頬を伝って床に落ちる。体は悔しさと恐怖でわなないていた。

「写真？」

サイファは表情を変えずに、少しだけ怪訝な声で聞き返した。

しかし、それに対する返事はなかった。レイモンドは苦虫を噛み潰したような顔をしている。ユールベルにとっては好機だったが、自分の口から説明する勇気はなかった。

「レイモンド、説明してくれ」

サイファは二人の様子を確認すると、レイモンドの方に説明を求めた。

それで観念したのだろうか。

レイモンドは両手を腰にあて、わざとらしく大仰に肩を竦めた。

「やれやれ……計画変更かな」

溜息まじりにそう言うと、ニヤリと厭らしく口の端を吊り上げ、ズボンのポケットから小型のカメラを取り出した。

「このカメラには、ユールベルの人には見せられない姿が収められています」

ユールベルは耳をふさいで、きつく目を瞑った。しかし、それでも声は漏れ聞こえてくる。あのかのことが脳裏によみがえり、体中にゾワリと悪寒が走った。

サイファは僅かに眉根を寄せて尋ねる。

「盗撮か？」

「まさか、そんな罪は犯しません。盗撮なんかよりもっとすごい画が撮れてますよ。なにせ私たちが愛し合っているときに撮ったものですから」

「ウソ！ あなたが無理やり……っ！！」

ユールベルは思わず反論したが、それだけ言うのが精一杯だった。再び目に涙を溜め、唇をきつく噛み締め、小刻みに体を震わせる。いったいどうしてこんなことになってしまったのだろう。考えてみてもわからない。悔しくて悲しくてやりきれなかった。

対照的にレイモンドはこの状況を楽しんでいるように見えた。

「どうします？ 可愛い姪御さんのあられもない姿を世間に晒しますか？」

「好きにすればいい。本人がそう言っているんだ」

サイファはさらりと無感情に言った。

一瞬、レイモンドは怯みかけたが、負けじと食い下がる。

「ラグランジェ家ご令嬢のこんな姿が世間に晒されては、大騒ぎどころではないでしょう。由緒ある家名に傷がつくことは避けられないはずです」

「ラグランジェ家はそれくらいでは揺らがない」

その言葉を体現するかのように、サイファは冷静沈着に、そして威厳をもって言った。声を荒げているわけでも、威圧的に振舞っているわけでもないが、その佇まいには相手を畏怖させるものがあつた。

「写真を見たら意見が変わりますよ。明日、現像してお持ちします」

レイモンドは脂汗を滲ませながらも、強気に口の端を上げて、手にしていたカメラを顔の横に掲げて見せた。その瞬間――。

バン！と短い爆発音がして、カメラが粉々に砕けた。

それはサイファの魔導によるものだった。

カメラもフィルムも原形を留めていない。その中心から薄煙が上がっている。レイモンドの指からは、魔導を受けたせいか、破片によるものか、赤い血が流れていた。頬にも斜めに赤い線が走っている。それ以外にもところどころ軽い裂傷を負っているようだ。レイモンドはカメラだった物体を床に落とし、傷ついた手を反対の手で押さえて歯を食いしばる。

「カメラ代は弁償する。治療費も払おう。ただし慰謝料は出さない」

サイファは毅然と言った。そして、机の上で両手を組み合わせると、レイモンドに呆れたような冷たい目を向けた。

「君が馬鹿だったおかげで手間が省けたよ」

「こ……こんなことをして……私が訴えればどうなるか……」

レイモンドは唸るようにそんな脅し文句を口にしたが、サイファは平然としたまま涼しい顔で問いかける。

「君の欲した力はその程度のものなのか？」

「くっ……」

ラグランジェ家に掛ければ、その程度の傷害事件を揉み消すことなど造作もない。そんなことはレイモンドにもわかっていたのだろう。圧倒的な敗北にもう言葉も出なかった。

「そうそう、研究所に君の戻る場所はないから」

サイファは急に軽い口調になって言う。

レイモンドは驚いて顔を上げ、呆然とした。

「解雇……ということですか」

「いや、内局に戻すことにした。それが君の望みだったんだらう？」

レイモンドはもともと魔導省の内局に勤めていた。だが、何かと問題を起こすことが多く、厄介払いのような形で研究所へ異動になったのだ。

しかし、今、サイファは内局に戻すという。

「……それは、取引ですか？」

少し考えてから、レイモンドは慎重に尋ねる。

「解釈は君に任せる」

サイファは静かにそう言うと、フッと小さな笑みを浮かべた。

「レイモンド、わかっているとは思いますが、念のためにあえて忠告しておく。今後、二度とラグランジェ家に手出しをしようなどと思うな。もし再び何らかの行動を起こした場合、私はありとあらゆる手段で君を追い詰める」

それは単なる忠告などではなく、抗いようのない最後通告である。サイファならば実際にそれを実行することが可能だ。そうなれば人生は終わったも同然である。レイモンドの顔は引きつり

、額から頬に汗が伝った。

「行け」

もう言い返す気力もなくなったのか、サイファに命じられるままに部屋を出て行った。その背中中は哀れなほどに憔悴しきっていた。

「おじさま……レイモンドの狙いはラグランジェ家だったの……？」

ユールベルはまだ濡れている瞳をサイファに向けて尋ねた。

「そうだよ。ユールベルと結婚してラグランジェ家の人間になり、その力を手に入れるつもりだったようだね」

サイファは優しい口調でゆっくりと答える。そして、机の上で両手を重ねると、少し表情を険しくして続ける。

「そういう人間が出てくるだろうことは予想していたが、これほど早く、これほど強引な方法で来るとは予想外だった。もっと気をつけておくべきだったと反省している。ユールベル、君には本当に申し訳ないことをした」

ユールベルの目から涙が溢れ、その場に膝から崩れ落ちた。顔を両手で覆って嗚咽する。

その背中に、そっとあたたかい手が置かれた。

ビクリとして顔を上げると、サイファが申し訳なさそうに微笑んでいた。ユールベルの隣に膝をついてしゃがみ、そっと自分の胸に抱き寄せた。

ユールベルはサイファにしがみついて泣きじゃくった。

泣き疲れて落ち着くまで、サイファはずっと無言で抱きしめてくれていた。その包まれるような優しい温もりに安堵して寄りかかる。

しかし、心の片隅では、それでもラウルを求めている。

「何だと……？」

ラウルはカルテを整理する手を止めて振り向くと、顔いっぱい疑念を広げ、思いきり眉をひそめて聞き返した。しかし、患者用の丸椅子に座るサイファは、対照的に満面の笑みを浮かべて答える。

「だから講師を頼みたいんだよ。ラグランジェ家の若者を集めて講座を開くんだ。題して『ラウルの恋愛コミュニケーション講座』」

「ふざけるな」

ラウルはこめかみに青筋を立てて一蹴した。

それでもサイファは少しも動じることなく、にっこりと笑顔を浮かべたままで言う。

「大真面目だよ。ラウルにも話したろう？ ラグランジェ家も一族の者以外との婚姻を認めることにしたと。通達したのはラグランジェ家の人間にだけだが、もう随分と世間に広まってしまったようでね。ラグランジェ家に入ってその力を得ようとする者が動き出しているんだ」

確かにそういう動きがあってもおかしくはない、とラウルは思う。ラグランジェの名には良くも悪くも強大な影響力がある。ある種の権力といってもいい。実力のない人間ほど手に入れたがるものだ。サイファも当然ながら想定はしていただろう。だが――。

「それでなぜ恋愛コミュニケーション講座なんだ」

ラウルは椅子を回してサイファに向き直ると、腕を組んで冷ややかに見下ろした。

サイファは両の手のひらを上に向けて答える。

「まあ平たく言えば、つまらない人間に騙されないようにってことだよ。もちろん最終的には私が調査・面談して、問題のある人間は却下するが、それでも騙された子の心には大きな傷が残る。不憫だろう？ だから、それ以前に自分自身で見抜くスキルを身につけさせたいと思ってさ。あと、しつこい相手の断り方や、いざというときの身の守り方もね」

「……話はわかった」

サイファの考えていることは意外とまともだった。おかしいのはタイトルだけである。そこまで教えてやる必要があるのかとも思うが、ラグランジェ家の置かれている今の状況を考えれば仕方がないのかもしれない。

しかし、それと講師を引き受けるかどうかは別の話である。

「だが私には無理だ。他を当たれ」

「ラウルほどの適任はいないさ。長い年月を生き、多くの人と関わってきた。人の本質を見抜く能力は誰よりもあるだろう？ 恋愛方面も得意なようだしね」

サイファはそう言うと、薄い唇に意味ありげな笑みを乗せ、挑戦的な視線を送る。

ラウルはピクリと眉を動かして睨み返した。

「おまえ、嫌味を言っているのか？ からかっているのか？」

「どこか間違っているか？」

サイファは真顔で言う。とぼけているのか本気で言っているのか判然としない。

「引き受けてくれれば謝礼は弾むぞ」

「あいにく金には困っていない」

「では、ラウルだけのために我が家でティーパーティを開こう。レイチェルの淹れた美味しいお茶を飲ませてやるよ。何ならプリンも作らせるぞ。好きなんだろう？」

「おまえ……」

人差し指を立てて笑顔で取引を持ちかけるサイファに、ラウルは眉間に皺を寄せながら呆れたような視線を送った。しかし、危うく応じそうになるほどに心を動かされてしまった自分も、度し難い人間という意味では似たようなものだ。それをごまかすように目を逸らすと、大きく声を張って突き放すように言う。

「とにかく断る。そんなものはそこらへんの結婚詐欺師にでもやらせればいいだろう」

「結婚詐欺師？」

サイファはきょとんとして聞き返した。それから、軽く握った右手を口元に当ててじっと考え込むと、小さく頷きながら言う。

「なるほど、その発想はなかったな。さすが先生だよ。そうだな……よし、ではさっそく結婚詐欺師の手配をしましょう」

「……………」

ラウルは面倒くさくて投げやりに思いつきで言っただけである。本気で考えていたわけではない。なのに、まさかそこに食いついてくるとは思いもしなかった。ましてや本当にそんな展開に持っていくなど想像すらしなかった。

いったい何を考えているのだろうか。

ラウルは眉をひそめて怪訝な眼差しを送るが、サイファはまるで意に介する様子もなく、すぐさま椅子から立ち上がって医務室を出て行こうとした。だが、扉に手を掛けたところで振り返って言う。

「そうそう、ユールベルだけはおまえに頼むよ。ラグランジェ家を狙っていた下衆な男に弄ばれてひどい目に遭ったらしい。だいぶ参っているみたいだから、様子を見てやってくれないか。おまえのたった一人の患者だろう？」

「精神科も心療内科も専門外だ」

ラウルは無愛想に答える。

「医師としてではなく個人としてでも何か出来ることはあるだろう。彼女が自分から心を開くのはおまえくらいだからな。とにかく頼んだぞ。講師よりは随分楽だろう」

サイファは一方的にそう言うと、引き戸をガラリと開けた。

ラウルは机に手をつけて勢いよく立ち上がる。

「待て、勝手なことばかり言うな」

「私は忙しいんだ。結婚詐欺師も探さなければならないしな」

サイファは僅かに振り返り、目を細めてラウルに視線を流すと、何か裏を含んだような妖艶なまでの笑みを浮かべた。外からの小さな風に、鮮やかな金の髪がさらりと揺れる。

彼が何を考えているのかわからない。

扉が静かに閉まった。

ラウルは何も言えないまま見送り、遠ざかる足音を聞きながら、顔をしかめて椅子に腰を下ろした。机に肘をついてうなだれた頭を支える。その視界の端には、薬棚にいくつも常備してある新品の包帯が映っていた。

コンコン――。

ユールベルはアカデミー三階の隅にある一室の、少々古びた扉をノックした。

「はい、どうぞ」

中から女性の声で返事があった。掛けられたプレートをもう一度確認したが、部屋は間違っていない。予想外のことに訝しく思い、戸惑ったが、このまま逃げるわけにもいかず、おそるおそるドアノブを回して扉を開いた。

「あら？ ユールベル、いらっしゃい！」

「あなた、どうしてここに……」

広くはない雑然とした部屋にいたのはアンジェリカだった。机に向かい赤ペンで何かを書きつけていたようだ。彼女の机にも、その奥の机にも、紙束が山のように積み上げられている。彼女は赤ペンにキャップをすると、顔を上げてニッコリと微笑んだ。

「私、先生の助手をしているのよ」

「そう……」

確かにアンジェリカはアカデミーで働いていると言っていた。だが、それがまさかここだとは考えもしなかった。ユールベルは何となく気まずいものを感じたが、アンジェリカの方にはまったくそんな様子は見られない。

「先生はすぐに戻ってくると思うから、その辺の椅子に座って待っていて」

「いえ、出直すわ」

ユールベルは一步下がって扉を閉めようとする。

「ユールベル？」

背後の少し離れたところから声がした。ユールベルはドアノブに手を掛けたまま、声の方に振り向く。そこにいたのはサイラスだった。彼は目を丸くしていたが、すぐにニッコリと穏和な笑みを浮かべ、ユールベルの方に歩を進めながら言う。

「本当に来てくれたんだ。嬉しいよ」

「あなたが来いって言ったから……」

ユールベルは目線をそらして言い訳のようなことを口にする。

きっかけは確かにそれだった。例の事件のあと、研究所で顔を会わせたときに「一度、遊びに来て」と言われたのだ。それは社交辞令だったのかもしれない。だが、少し彼に相談したいこともあり、別件でアカデミーに来たついでに立ち寄ってみたのである。

「それに、わざわざ来たわけじゃないわ」

「わかっているよ」

サイラスは包み込むようにそう言うと、戸口で立ち尽くすユールベルの背中に手を添えて部屋の中へと促した。ユールベルはその温かさに戸惑いながらも、素直にそれに従って足を進めた。

「じゃあ、私、もう帰りますね」

アンジェリカは机の上を片付けてそう言うと、鞆を肩に掛けて立ち上がった。

腰を下ろしたばかりのサイラスは、きょとんとして顔を上げる。

「え？ もう帰るのかい？」

「たまにはいいですよ？ 先生、さぼらないでちゃんと仕事してくださいね」

アンジェリカは悪戯っぽく忠告すると、くすっと小さく笑い、手を振りながら部屋を出て行った。それはおそらくユールベルたちに気を遣ってのことなのだろう。彼だけに話したいことがあったユールベルには、彼女のその行動は有り難かった。

「それほどさぼってないんだけどね」

サイラスは苦笑しながら誰にもなく呟いた。そして、机の上の書類を無造作に脇に寄せると、おもちゃ箱をひっくり返したかのような引き出しの中からマグカップを二つ取り出してそこに置く。

「コーヒー飲む？ インスタントだけど」

「はい……」

サイラスの隣に座るユールベルは、戸惑いながらもそう答えた。なぜ事務机の引き出しにマグカップをしまっているのか、それはきちんと洗ってあるのか、埃をかぶっていないのかなど、さまざまな疑問が喉まで出かかったが、それを尋ねるのも失礼な気がして、ぐっと言葉を飲み込んだ。

そんなユールベルの不安などお構いなしに、サイラスは机の上に置きっぱなしになっていたインスタントコーヒーの瓶を開け、そこから直接マグカップに入れると、やはり机の上に置いてあったポットの湯を注ぐ。

「はい、どうぞ」

「ありがとう……」

ユールベルは差し出されたマグカップを両手で受け取ると、中の黒い液体をじっと見つめてゆっくりと口に運んだ。それは、とてもコーヒーとは思えない味だった。コーヒー自体が酸化しているうえ、湯の温度が低すぎるのも一因なのだろう。しかし、目の前で美味しそうに飲んでいるサイラスに、不味いなどと言えるはずもなかった。

サイラスはマグカップを机に置き、にっこりと人なつこい笑顔を浮かべて尋ねる。

「もしかして僕に何か用があった？」

「別に……」

ユールベルはそう言い淀んで目を伏せた。凶星を指されて思わず否定するようなことを口走ってしまったが、こんなところでつまらない意地を張っては、勇気を出してここに来た意味がなくなってしまう——ぎゅっとマグカップを握りしめると、意を決して顔を上げる。

「私、先生に相談したいことがあるの」

落ち着いた口調ではあるものの、その中にはどこか思いつめたような声音が響いていた。少し驚いたような表情を見せるサイラスに、ユールベルは深い森の湖のような瞳でじっと訴えかけた。

。



「えっ？ ジョシュに避けられてる？」

ユールベルは白いワンピースの裾をぎゅっと掴み、固い顔でこくりと頷いた。しかし、それを聞いたサイラスは、腕を組みながら困惑したような表情で首を傾げる。

「うーん、それ、気のせいじゃないのかなあ」

「そんなことないわ！」

ユールベルは身を乗り出し、思わず強い語調で言い返した。その必死な態度にサイラスは面食らったようだったが、すぐに優しい表情になると、ユールベルを覗き込んで穏やかに問いかける。

「じゃあ、詳しく説明してくれる？」

ユールベルはこくりと頷き、どのように説明しようか思案すると、暫しの沈黙のあとに小さな口を開いた。

ユールベルが話した内容はこうである。

ジョシュには研究所に来た当初から嫌われているようだったが、例の事件のときには、ユールベルを助けて力になってくれた。これがきっかけで、彼との関係も良好なものになるのではないかと期待したが、その後まもなく彼の態度は再び硬化してしまった。ただ、以前のようにあからさまに嫌っているような態度ではなく、気遣いつつも関わり合いを避けている、そんなふうに感じる——と。

「最初にジョシュが冷たい態度をとっていた理由ならわかるよ」

「えっ……？」

思いもしなかったサイラスの言葉に、ユールベルは目を見開いて聞き返した。

「ジョシュはね、ラグランジェ家が嫌いなんだ。多分、理由はそれだけだと思うよ」

サイラスは柔らかく微笑んで言う。

「でもどうして？ ラグランジェ家が嫌いって……」

「さあ、どうしてかな。ジョシュは真面目だから、柔軟な対応をするサイファに反発しているというのはあるだろうね。それに、何かと優遇されているラグランジェ家の人間を見て、やりきれない思いを持っているのかも」

ユールベルは何も言えずにうつむいた。それを見て、サイラスは慌てて付け加える。

「ユールベルが責任を感じることはないんだよ」

「私、わかったわ……」

ユールベルは呟くように言った。

サイラスはきょとんと瞬きをして覗き込む。

「わかったって、何が？」

「私もおじさまの口添えで研究所に入ることになったもの。ジョシュの嫌いなラグランジェ家の人間そのものだわ。でも、あの事件のことで少し同情してしまって、どっちつかずの態度になっているのね」

ユールベルはうつむいたままで言う。それがもっとも辻褃の合う答えだと思った。今までモヤモヤしていたものがストーンと腑に落ちた気がした。

しかし、サイラスは納得していないようだった。

「うーん……本当は冷たい態度をとっていたことを後悔しているけれど、素直にそれを言いださないって可能性の方が高いと思うよ。ジョシュだってユールベルが研究所に入るだけの実力があることはわかってるはずだし、いつまでもそんな言いがかりみたいな理由で嫌ったりしないんじゃないかな」

確かにそれも考えられなくはないが、ユールベルはそこまで楽観的になれなかった。

「じゃあ、あの事件で迷惑をかけてしまったから、そのことで腹を立てているのかも。もうあんなことに巻き込まれないように、私との関わりを避けているのかも」

「そんなことないって」

サイラスは苦笑しながらそう言うと、小さく息をついて、落ち着いた静かな声で続ける。

「ジョシュってさ、あまり人付き合いが得意じゃないから、どういう態度をとればいいかわからなくて戸惑っているだけだと思う。嫌っているとかが避けているとか、そんなこと考えない方がいいよ」

「先生とは仲が良さそう……」

これまで二人が話しているのを見る限り、サイラスとは打ち解けているように見えた。少なくともユールベルに対する態度とは雲泥の差である。

サイラスは机に腕を置いて言う。

「そんなに仲良しってわけでもないけど、まあ普通に喋ったりはするね。でも最初からそうだったわけじゃないよ。最初は僕もかなり刺々しい態度をとられていたし」

「そう、なの？」

ユールベルが不思議そうに尋ねると、サイラスはにっこりと大きく微笑んだ。

「仲良くしたいんだったら、ユールベルの方からそう言ってみたら？」

「別にそういうわけじゃないわ」

ユールベルは思わずむきになって言い返した。

「怖がらなくても大丈夫だよ。ジョシュって態度はあんなだけ根はいい子だから。きちんと話し合って、ユールベルが自分の素直な気持ちを伝えれば、いい方に向かうんじゃないかな」

ニコニコしながらそう言うサイラスから、ユールベルは視線を外して目を伏せた。居たたまれなさから逃げるように、机の上のマグカップを手にとって口に運ぶ。ますますぬるくなっていたそれは、先ほどよりも随分と苦く感じられた。

数日後――。

研究所のそのフロアは、一部分のみ灯りがついていた。

もう深夜といってもいい時間である。ほとんどの所員はすでに帰っており、このフロアで残っているのはジョシュとサイラスだけだった。背中合わせで二人とも黙々と仕事をしている。静

かだった。紙をめくる音さえはっきりと聞こえるくらいである。

「ね、ジョシュ」

「ん……」

サイラスは沈黙を破って呼びかけたが、机に向かったままのジョシュから返ってきたのは、ほとんど声になっていないくらいの気のない返事だった。それでもサイラスは遠慮なく言葉を繋ぐ。

「どうしてユールベルのことを避けているの？」

ジョシュの動きが止まった。

「別に、そんなつもりは……」

「この前ユールベルから話を聞いたときは半信半疑だったけれど、さっき様子を見ていたら本当に避けてたよね。すごく素っ気ない返事しかしないし、目を合わせようとしもないし、態度も不自然でぎこちないし。あれはもう気のせいとかでごまかせないよ。彼女と何かあったの？」

ジョシュは背を向けたまま、無言でうつむいて唇を噛んだ。

答えそうにない彼を見て、サイラスは質問を変える。

「彼女のこと、嫌いなわけじゃないよね？」

「……ああ」

少しの間をおいて、ようやくジョシュは低い声で返事をした。

「だったらどうして？」

「先生には死んでも言わねえよ」

今度は不機嫌そうにぼそりと言う。それが彼の精一杯の意思表示だったのだろう。

「まあ、僕に言わなくてもいいけど、ユールベルのことはもっと考えてあげなよ。彼女は避けられている理由もわからなくて毎日不安で仕方ないんだから」

「……俺は、彼女と顔を合わせる資格もない人間なんだよ」

サイラスはちらりと振り返った。どこか寂しげなジョシュの背中を、横目でじっと見つめる。

「潔癖すぎると生きるのがつらいよ」

「そう、かもな」

ジョシュは感情を抑えた声でぽつりと言った。

サイラスは椅子の背もたれに体重を掛け、両手を上げて大きく伸びをする。

「自分はそれでいいかもしれないけど、相手にもつらい思いをさせてしまうんじゃ、本末転倒じゃないかな」

「わかってる……けど……」

ジョシュの言葉はそれきり途切れた。

しばらくして、再び紙をめくる音がフロアに響いた。

それから、一ヶ月半が過ぎた。

ユールベルの実習期間は今日で終わる。

もっとも、アカデミー卒業後——つまり数ヶ月後には、再びここで勤務することになっているので、取り立てて感傷的な気持ちにはならなかった。今日もいつものように与えられた仕事をこなしていただだけである。

ジョシュの態度は相変わらずだった。

何か言いたそうにしていることもあったが聞けなかった。ユールベルの方からも何も言い出せなかった。交わす言葉は仕事上での必要最低限のことだけである。二人の間にはぎこちない空気が流れ続けていた。

「じゃあまた。今度来るときは正式なウチの所員ね」

勤務時間が終わると、アンナは人なつこい笑顔でユールベルを見送る。ユールベルはフロアの戸口で小さく頭を下げた。言葉には出来なかったが、何かと良くしてくれた彼女には心から感謝していた。

フロアの中に視線を戻す。

ジョシュは自席に座ったままだった。モニタをじっと凝視しているようだ。仕事に没頭しているのだろう。彼には声を掛けそびれたので、最後に一礼だけでもしたいと思ったが、彼がこちらに目を向けることはなかった。諦めて扉を開け、静かにフロアを後にする。

研究所の建物を出ると、門のところで振り返ってその建物を仰ぎ見た。

これからここで上手くやっていけるのだろうか——実習に来るときに感じた不安は未だに消えていない。むしろ大きくなったくらいだ。目を細めて小さく溜息をつく、重い気持ちのまま踵を返して歩き出そうとした。

「ユールベル」

ドクン、と大きく心臓が跳ねる。

声だけでそれが誰であるかすぐにわかった。だが、今までずっと避けていた彼が、なぜここに来たのかわからない。ユールベルは息を止め、おそるおそる振り返る。

案の定、そこに立っていたのはジョシュだった。

困惑したような、怯えたような、どこか苦しそうな、何ともいえない複雑な顔をしている。ユールベルに声を掛けることを随分と迷ったのだろう。彼はごくりと唾を飲み込んでから、低く抑えた口調で切り出した。

「今まですまなかった。その、避けるような態度をとって……。おまえは何も悪くない。全部、俺の心の中の問題だ」

「ウソ……」

「嘘じゃない」

思わず口をついて出たユールベルの言葉を、ジョシュは即座に否定する。それでもユールベルは信じるができなかった。長い金の髪を揺らしながら首を横に振ると、眉をひそめてじっと睨むように彼を見つめた。

「私、知っているんだから。ラグランジェの名前を使って研究所に入った私を軽蔑しているんでしょう？ 嫌いなんじゃない？」

ジョシュは目を見開き、小さく息を呑んだ。

「おまえ、それをどこで……」

ユールベルは小さく息をつく、努めて冷静に言葉を紡ぐ。

「確かに私はあなたに嫌われても仕方のない人間だもの。ちゃんとわかっているわ。あなたのことを逆恨みなんてしない。だから、そんなウソをつかないで」

「ちょっと待て！ 違う、違うんだ！」

ジョシュは狼狽しながらも必死に主張する。

「確かに最初はそうだった。おまえの言うとおりに、ラグランジェ家の人間ってだけで楽しんで入ってきた嫌なやつだと頭にきてた。でもそれは最初だけで、おまえが頑張ってるのをずっと見てきたし、十分に実力があることもわかったし、今はもうそんなことはこれっぽっちも思っていない」

彼はユールベルを見つめてきっぱりと断言した。そのまっすぐな瞳からは嘘やごまかしは微塵も感じられなかった。

ぐらり、と頭の中が揺らいだ。

信じたいという思い、信じられないという思い、その相反する気持ちがせめぎ合い、心が引き裂かれそうになる。どうすればいいのかわからない。潤んだ瞳を隠すようにうつむくと、感情を昂ぶらせて声を震わせる。

「じゃ……じゃあいったい何なの？ どういうことなの？ 納得いくように説明して！ 嫌いでもないのに避けるだなんて意味がわからない……っ！」

「だから、それは……それ、は……俺が……」

ジョシュは顔をしかめて額を押さえた。顔中に苦悩を広げている。額には大粒の汗が噴き出し、ていた。

「俺が、何……？」

「だから、その……えっと……」

問い詰められるとますますしどろもどろになり、消え入るように声が小さくなっていく。声だけではなく彼自身も背中を丸めて小さくなっていった。

ユールベルは僅かに目を細めた。

彼が何を言おうとしているのかわからなかったが、嘘をつけるような人ではないのだということは十分すぎるほどに伝わってきた。自分と同じくらいに、いや、それ以上に不器用な人間なのだろう。

ユールベルはジョシュとの間を詰めると、目を閉じてそっと寄りかかった。

その体がビクリと震える。

「ユールベル……？」

「嫌いじゃないのなら、もう避けなくて……」

ジョシュの胸に額をつけたまま、ユールベルは小さな声で囁くように言う。

「……わかった」

ジョシュは静かにそう答えると、ゆっくりと右手を持ち上げ、少し迷った様子を見せながらも

、そっとユールベルの背中に置いた。その触れるか触れないかの力加減が、ユールベルにはとてもくすぐったく感じられた。

「これで一件落着、かな？」

不意に後方から明るい声が聞こえた。ユールベルとジョシュは同時にその方に振り向く。声の主を目にしたジョシュの眉間には、みるみるうちに深い皺が刻まれた。

「……センサー、ずっと見てたのかよ」

「見るつもりはなくてもこんなところじゃね」

サイラスは両の手のひらを上に向け、軽く肩をすくめてとぼけたように言った。

ここは研究所の入口の真正面である。確かに彼の言うとおりに、研究所に出入りする人間であれば嫌でも目についてしまうだろう。ジョシュは腕を組み、疲れたように溜息をついて話題を変える。

「それで、何しに来たんだよ」

「ユールベルのお見送りだよ」

サイラスは屈託なく答えると、ユールベルに視線を移して微笑んだ。

「よかったね、ジョシュと仲直りできて」

ユールベルは返答に迷い、助けを求めるようにジョシュの腕を掴んで見上げた。ジョシュは困惑したような表情で少し頬を染め、僅かに目を逸らせると、ぶっきらぼうにぼそりと呟く。

「別に喧嘩してたわけじゃない」

「あ、そうだったね。ジョシュが一人で勝手に迷走してたんだっただね」

「サイラス、おまえ……」

軽く笑ってからかうサイラスを、ジョシュは顔を赤らめたまま横目で睨んだ。

「じゃあな」

門の前で軽く右手を上げるジョシュとサイラスに、ユールベルは小さく頭を下げると、背を向けて微かな風に乗るようにゆっくりと歩き出した。

白いワンピースがふわりと風をはらむ。

研究所での実習期間には様々なことがあった。その多くがつらいことだったような気がする。しかし、それだけではない。助けてもらったことも、相談にのってもらったことも、優しくしてもらったこともあった。そして、どうにもならないと諦めていたジョシュとのわだかまりが消えたことが、何よりもユールベルの気持ちを軽くしていた。

多分、悪いことばかりではない――。

燃えるような朱い空を見上げ、胸一杯に息を吸い込むと、無意識にほんの少しだけ口もとを緩める。心の中にはまだ不安が色濃く残っていたが、それでも、これからやっていけるかもしれないというひとかけらの希望だけは見出せた気がしていた。

「今度の休日？」

食堂の窓際で昼食をとっていたジョシュは、フォークを持つ手を止め、向かいに座るサイラスに聞き返した。

「うん、何か予定ある？」

「別にない……けど……」

何となくサラダをつつきながら歯切れ悪く答える。今までサイラスにこんなことを尋ねられたことはなく、いったい何なんだろうと訝しく思う。そんな心情を察したように、サイラスはにっこりと微笑んで理由を述べる。

「ユールベルがね、お礼をしたって言ってるんだよ」

「お礼って、何の？」

「ほら、レイモンドの……」

「ああ……」

濁された言葉を察して、ジョシュは低い声で頷いた。彼女にとっては思い出したくもない出来事だろう。それをわざわざ気にして、律儀に礼などしなくてもいいのにとと思う。

「夕方頃に研究所の前で待ち合わせでいいかな」

「俺はいつでもいいよ」

笑顔で尋ねるサイラスに、ジョシュは感情を見せずに素っ気なく答える。

ユールベルはアカデミーにあるサイラスの部屋を何度か訪れているようだ。研究所は関係者以外は原則的に立ち入り禁止であり、今はサイラスを通してしか連絡が取れないことはわかっている。だが、彼女がサイラスのところに行く理由はそれだけではないだろう。

「時間はまた連絡するよ」

「わかった」

ジョシュはサラダに目を落としたまま頬杖をつき、短く返事をした。

「早すぎたな……」

ジョシュは腕時計を見ながら呟いた。待ち合わせの時間まではまだ30分以上ある。だが、遅れるよりはいいだろうと思い直し、扉に寄り掛かって腕を組んだ。

ユールベルに対する罪悪感はまだ消えたわけではない。それでも、彼女を避けることは彼女を傷つけるだけだとわかった。いや、それは単なる言い訳だろう。彼女との繋がりを断ち切りたくない自身が願っていることは自覚していた。

小さく息を吸い込んで、優しい色の青空を見上げる。

その穏やかな空とは対照的に、ジョシュの気持ちは落ち着かずそわそわしていた。ユールベルの実習終了の日以来、彼女とは一度も会っていない。約一ヶ月ぶりである。しかも、休日に待ち合わせをして会うことは初めてなのだ。さらに「お礼」の内容も気になっていた。彼女の考えていることはわかりづらいのでなおさらである。いったいどこへ行くつもりなのだろうか、そして

、何をしてくれるのだろうか――。

「ジョシュ、早いね」

「うわあっ！」

ぼんやり考えているところに、突然横から声を掛けられ、ジョシュは大きな声をあげて飛び退いた。そのあまりの驚きように、声を掛けたサイラスの方も目を丸くして驚く。

「ごめん、そんなにビックリするなんて思わなくて」

「……何しに来たんだよ、先生」

ジョシュは訝しげに横目でじとりと睨んだ。まさか自分をからかうためだけにわざわざ来たりはしないだろう。たまたま通りかかったか、それとも休日出勤か何かだろうと思う。

「何しにって、待ち合わせだから来たんだけど？」

「……………??」

二人の話は噛み合っていなかった。互いに不思議そうに顔を見合わせている。しかし、サイラスが何かをひらめいたらしく、急にパッと顔を明るくして言う。

「もしかして、ジョシュ、自分だけって思った？ 僕もジョシュと一緒に誘われてるんだよ。今日はここで3人で待ち合わせ。言わなかったっけ？」

「そっ……そんなこと聞いてないっ！」

ジョシュは顔を真っ赤にして言い返した。サイラスも一緒などとは一言も聞いていない。だが、ジョシュー一人だとも言われていない。考えてみれば、確かにサイラスもユールベルを助けたわけで、お礼を受けるのは当然のことである。

「ごめんね、変に期待を持たせちゃったみたいで」

サイラスは軽く笑いながら言う。揶揄しているわけではなさそうだが、ジョシュとしては凶星を指されて居たたまれない気持ちになり、さらに顔を赤くして目を泳がせた。

「別に……そういうわけじゃない……」

「喧嘩、しているの？」

「うわあっ！」

背後から声を掛けてきたのはユールベルだった。ジョシュは全身の毛が逆立つほど驚いた。バクバク脈打つ心臓を押さえながら、不思議そうにしているユールベルを狼狽えながら見つめる。

「別に喧嘩ってほどじゃないよ。ね、ジョシュ」

「あ、ああ……」

サイラスの助け船に感謝しながら、ジョシュは曖昧に頷いた。鼓動はまだ早鐘のように打っている。それが彼女に伝わらないよう祈りながら、暴れる心臓を静めようと深く呼吸をした。

「これからどこへ行くの？ そろそろ教えてくれないかな？」

サイラスは前を歩くユールベルに尋ねた。サイラスもジョシュも、まだ行き先すら知らされていない。サイラスは今日にいたるまで何度か尋ねたが、ユールベルは内緒だと言って教えてくれなかったらしい。だが今度はあっさりと答える。

「私の家よ」



ジョシュの眉がピクリと動いた。

彼女のフルネームはユールベル＝アンネ＝ラグランジェである。つまり――。

「ユールベルの家ってことはラグランジェ家……だよな」

「まあ、そういうことだよな」

サイラスも同じことを考えていたようで、声をひそめてジョシュに確認してきた。

「なんか緊張してきたなあ」

その言葉とは裏腹に、サイラスはどことなく嬉しそうだった。魔導の研究をしている彼が、その名家であるラグランジェ家に憧れの気持ちを持つことは不思議ではない。行ったからといって特に何かがあるわけではないだろうが、それでもミーハー心くらいは満たされるだろう。普通なら一生かかってもこんな機会はあるかどうかわからないのだ。

「ジョシュ、気に入らないからって暴れたりしないでね」

「……そこまで子供じゃない」

確かにラグランジェ家は嫌いだし、自分に大人げない部分があるのも事実だが、いくら何でも招待されておきながら理由もなく突っかかったりはしない、と心の中で反論する。

「ラグランジェ家ってわけじゃないわ」

二人の勝手な誤解に黙っていられなくなったのか、前を歩いていたユールベルが、顔だけちらりと振り向けて言った。そして、感情の見えない声で付言する。

「私、親とは一緒に住んでいないから」

それを聞いたジョシュの表情は途端に険しくなった。

親と一緒に住んでいないということは、おそらく一人暮らしなのだろう。

だとしたら――。

脳裏には資料室でのことが鮮明によみがえった。ジョシュが様子を見に行かなかっただけで、誰にも気づかれることなくあのままレイモンドに襲われていたかもしれない。そんなことがあったというのに――。

ジョシュはサイラスの腕を引っ張って歩みを遅らせ、ユールベルから少し距離をとると、今度は彼女に聞こえないよう声をひそめて耳打ちする。

「一人暮らしの家に男を入れるなんて軽率すぎないか？」

「でも僕たち一人ってわけじゃないし」

「男が二人もいたら余計に危険だろう」

「僕たちのことは信用してくれてるんだよ」

サイラスもひそひそと小声で答える。しかし、ジョシュは納得しなかった。サイラスの言うことは間違っていないと思うが、そういうことではなく、ジョシュとしては危機意識の話をしているのだ。

「簡単に男を信用すると痛い目を見るぞ」

顔をしかめて舌打ちをして、ジョシュは苦々しく言う。

しかし、サイラスはその隣でにこにここと微笑んでいた。

「……何だよ」

「ジョシュってばすっかり保護者だね」

「……危なっかしいんだよ、あいつは」

ジョシュはぶっきらぼうに答えると、前髪を掻き上げて顔を上げた。少し先を歩くユールベルの金髪が、緩やかなウェーブを描いて風に揺れている。そして、そこに結ばれた白い包帯も、同じように軽やかに、そしてどこか頼りなく揺れていた。

ユールベルが入っていったのは、まだ真新しいマンションだった。建物自体はそれほど大きくないが、落ち着いた上品な造りで、そこはかたなく高級感が漂っている。彼女はエントランスを通り抜け、階段を上ると、突き当たりの扉を重たそうに開いた。

「あれ？早かったね」

「迎えに行っただけだから」

中からユールベルに声を掛けたのは、上半身裸で首にタオルを掛けた男だった。鮮やかな金の髪からは水滴が滴っている。どうやら風呂上がりようだ。彼はユールベルの後ろにいたジョシュとサイラスにちらりと目を向ける。

「その人たち？」

「ええ」

確認するような短い質問に、ユールベルは中に入りながら肯定の答えを返した。それを聞いた彼は、タオルで前髪を掻き上げ、眩いばかりの笑顔で二人に向ける。

「いらっしゃい、今日はゆっくりしてって」

そんな歓迎の言葉を口にすると、スタスタと部屋の中へと入っていった。

「……えっと、誰？」

呆然として固まっていたサイラスは、ようやく口を開き、男の消えていった方を指さしながらユールベルに尋ねた。それはジョシュが聞きたかったことでもある。まさかとは思うが――。

「弟のアンソニーよ」

ユールベルの素っ気ない答えを聞いて、ジョシュの全身からどっと気が抜けた。そして、自分の先走った勝手な勘違いに、思わず苦笑いを浮かべた。

「お茶を入れてくるから待っていて」

ユールベルはそう言い残して台所へと消えていった。

居間のソファにはジョシュとサイラスが並んで座り、ローテーブルを挟んだ向かいにアンソニーが座っている。先ほどは薄暗がりによくわからなかったが、明るいところであらためて見みると、身長はジョシュと変わらないくらいだが、その顔にはまだ少し幼さが残っていた。しかし、鮮やかな青の瞳はそれとは不釣り合いに鋭い。ジョシュは何か心を見透かされているようで落ち着かなかった。

ふと、アンソニーは不敵な笑みを浮かべて言う。

「下心満載で来たのに、弟がいてガッカリってところ？」

「べっ、別にそんな……ここに来ることも知らなかったんだ！」

ジョシュは顔を真っ赤にして狼狽し、こぶしを握りしめながら反論した。言っていることに嘘はないのに、その必死さのせいで、かえって言い訳くさくなってしまった。困惑ぎみに奥歯を噛みしめてうつむく。そんなジョシュを見て、アンソニーはくすくすと笑い出した。

「わかりやすいね、おにいさん」

「……………」

「冴えなくて頼りない感じだけど、悪い人じゃないみたいだし、僕としてはあえて反対はしないよ。頑張ってみたらいいんじゃない？」

——このマセガキ……！

喉元まで出かかったその言葉を、ジョシュはぐっと飲み込んだ。この無性に反発したくなる感覚は、以前にも何度も味わった覚えがあった。それは、確か仕事するとき——。

「あっ、君、どこか見た感じだと思ったら、サイファさんに似ているんだ。顔もそうだけど、雰囲気も近いものがあるね」

「本当？ そうだったら嬉しいんだけど」

サイラスの言葉に、アンソニーはどこか誇らしげに顔をほころばせる。

そうか——。

ジョシュは納得した。人目を引くような端整で華やかな顔立ちに、余裕を見せつけるような態度、相手を軽くいなすような口調。どれも自分の苦手なああの男にそっくりである。だから無意識のうちに反発したくなるのだろう。

そのとき、台所からユールベルが戻ってきた。紅茶をのせたトレイをローテーブルに置くと、不機嫌にしていたジョシュを見上げて心配そうに尋ねる。

「アンソニーが何か失礼なこと言ったの？」

「いや、別にそういうわけじゃ……」

「普通に雑談してただけだよ。ね、おにいさん」

言葉に詰まったジョシュの代わりに、アンソニーが人なつこい笑顔で答えた。彼がどういうつもりかはわからないが、会話の内容を知られたくなかったジョシュにとっては、そのごまかしはありがたいことだった。

アンソニーはすっと立ち上がると、腰に手を当てて背筋を伸ばす。

「じゃあ、そろそろ僕は準備にかかるよ」

「ええ、お願い」

ユールベルは紅茶を配りながら言った。

「準備？」

サイラスが口に出したその言葉は、そのままジョシュの疑問でもあった。二人そろって不思議そうな視線を投げかけると、アンソニーは軽くさらりと答える。

「ご馳走を作るんだよ」

「おまえが？」

今度はジョシュが聞き返した。

「今日おにいさんたちを呼ぼうって言い出したのは、実は姉さんじゃなくて僕なんだよね。姉さ

んが襲われかけていたところを助けてくれたって聞いたから、そのお礼をしようと思ってさ」  
アンソニーは胸に手を当てて丁寧に答えながら、爽やかな笑顔を見せた。

「いやー、これはなかなか本格的だね」

出された料理を次々と口に運びながら、サイラスは感嘆の声を上げた。なぜか少し悔しい気持ちはあるが、ジョシュもそれには同意せざるをえなかった。正直、弟が作ると聞いたときは、食べられるものが出てくるのか心配したが、目の前に並んでいる料理は、ちょっとした高級レストランで出てきそうなこじられた盛り付けがなされている。そして、料理の正確な名前はわからないが、肉料理もスープもパンも、どれも文句なしに美味しい。

「喜んでもらえて良かった」

アンソニーはきれいな顔を無邪気にほころばせた。

その隣で黙々とナイフを動かしているユールベルを、ジョシュはちらりと盗み見る。

彼女についてはほとんど何も知らない。

これまで、仕事についての必要最低限のことしか話をしてこなかった。

気になることはたくさんある。目の包帯のこと、家族のこと、親元を離れている理由、これまでどんな生き方をしてきたのか——今日、ここへ来て初めてその一端に触れられた気がするが、そのことでなおさら知りたいと思う気持ちは大きくなった。だからといって、まだ親しくもない自分が、何の脈絡もなく尋ねることなどできない。

「ねえ、おにいさん。姉さんに見とれてないで、冷めないうちに食べてよ」

「……見とれてなんかない」

ジョシュは無愛想に答えると、視線を落として再び黙々と食べ始めた。ユールベルがどんな反応をしていたのか気になったが、何かに頭が固定されてしまったかのように、どうしても顔を向けることができなかった。

皆の食事が終わると、ユールベルはすぐに台所に向かった。コーヒーの豆を挽いているようだ。香ばしい芳醇な香りが、ジョシュたちのいる居間にも漂ってきている。

「姉さん、このところ毎日コーヒー淹れる練習をしてたんだ。不器用だから失敗ばかり続けてたけど、これだけは自分でやるって頑張ってたよ。あ、今はちゃんと美味しく淹れられるようになったから安心して」

アンソニーの話聞いて、サイラスはくすっと笑った。

「ユールベル、不器用なんだ」

「魔導は器用にこなすんだけど、少なくとも家事はからきし駄目だね。だから、家のことはだいたい僕がやってるんだ。姉さんと結婚すると大変だと思うよ？」

アンソニーは意味ありげな視線をジョシュに流しながら言う。

「……何で俺に言うんだよ」

完全にかかわられているとジョシュは思った。

それがわかっているのかいないのか、サイラスはさらに話を弾ませる。

「ジョシュはこう見えても結構マメなんだよ。自炊もしてるって」

「へえ、なら安心だね」

「あのなあ……！」

ジョシュは顔を紅潮させてローテーブルに手をついた。そのとき――。

「コーヒー……」

人数分のコーヒーを持ってきたユールベルが、ジョシュの背後でぽつりと呟く。

ジョシュの心臓は飛び跳ねた。

今日はこんなことばかりである。彼女がどこから話を聞いていたのか気になったが、尋ねては藪蛇になるかもしれないとあえて口をつぐんだ。なぜ自分だけアンソニーの標的にされているのかわからないが、これでは生きた心地がしない。

気持ちを落ち着けるために、彼女が持ってきたコーヒーを口に運ぶ。

期待していなかったわけではないが、その美味しさには少しばかり驚いた。随分と良い豆を使っているようだ。挽き立てというのものもあるだろう。もちろん、何より彼女の淹れ方が良かったに違いない。

ジョシュはちらりと彼女に目を向けた。彼女はなぜかサイラスの隣に座り、コーヒーに口をつける彼を、じっと不安そうに覗き込んでいる。

「先生、美味しい？」

「美味しいよ」

サイラスはにっこりとして答えた。なおもユールベルは食い下がる。

「先生がいつも飲んでいるのと比べてどっちが美味しい？」

「うーん、どっちもそれぞれ美味しいかな」

「そう……」

その会話を聞いて、ジョシュはピンと来た。おそらくユールベルもサイラスの不味いコーヒーを飲まされたのだろう。だからこれほど必死になって美味しいコーヒーを飲ませようとしていたのだ。

それにしても――。

ジョシュは呆れた眼差しをサイラスに送る。

普通はお世辞でもユールベルの方が美味しいと言うところだろう。というか、実際、ユールベルの方が比喩物にならないくらい美味しい。劣化したインスタントと比較すること自体が失礼である。もっとも、彼はその劣化したインスタントを本気で美味しいと思っているようだが――。彼に悪気がないことはわかっているし、そういうずれたところも憎めないのだが、このときばかりは本気で何とかならないものかと思った。

「姉さん、ちょっと」

ふとアンソニーはそう言うと、隣のユールベルに手を伸ばし、緩んでいたらしい後頭部の包帯を手際よく結び直した。その様子を眺めながら、サイラスは何気ない調子で尋ねる。

「そういえばずっと包帯しているね。ものもらいか何か？」

「……………」

ユールベルとアンソニーの動きが止まった。表情は僅かに強張っているように見える。その変化にはさすがのサイラスも気づいたようで、戸惑いを覗かせながら、控えめにおそるおそる尋ねる。

「えっと、もしかして聞いちゃいけなかった？」

「いいの、別に隠しているわけじゃないから」

ユールベルは小さな声でそう言うと、浅く呼吸をしてから続ける。

「右目、見えなくて……それに、目のまわりにひどい火傷の跡が残ってるの」

端的な説明だが、その内容は重い。目が見えないだけでも大変なことなのに、顔に火傷の後など、女の子にとってはどれほどつらいことかと、ジョシュは想像するだけでどうしようもなく気持ちが重くなった。掛ける言葉などとても見つからない。

しかし、サイラスは優しく表情を緩めて口を開く。

「ごめんね、つらいこと言わせちゃって」

「訊いてくれて良かった……」

ユールベルは下を向き、ぽつりとそんな言葉を落とした。

それが本心なのかどうか、ジョシュにはわからなかった。そんなことを訊けるわけもない。少しだけ、サイラスの無神経さがうらやましいと思った。

「じゃあ、そういうことでさ、気を取り直して楽しくやろうよ！」

アンソニーは明るくそう言うと、みんなに話を振って会話を盛り上げていく。会話の中心にいたのは常にアンソニーだった。ユールベルは訊かれたことにぽつりぽつりと答えるだけである。それでも、ジョシュにとっては、これまで研究所で交わしたどの会話よりも意味のあるものだった。

外がすっかり暗くなったころ、ジョシュとサイラスはそろそろ帰ることにした。

ユールベルとアンソニーは二人を玄関まで見送る。ユールベルは研究所まで送ると言ってくれたが、それは断った。道はわかっているし迷うことはないだろう。少し歩けば知った場所に出るのだ。

「じゃあまたね、ユールベル」

「今日はありがとう、来てくれて」

ユールベルは淡々と礼を述べる。

感情の見えない彼女を眺めながら、ジョシュは今日のことを思い返して少し不安になった。不快な思いをしなかっただろうか、自分たちを呼んだことを後悔していないだろうか、と――。

「姉さん」

アンソニーはユールベルの背後から声を掛けると、身を屈め、口もとを隠しながら彼女に何かを耳打ちする。その視線はちらりとジョシュに向けられた。あからさまに何らかの含みを持った意味ありげなものである。

——まさか！

ジョシュの頭にカッと血が上った。

「おまえ何を言った?!」

必死の勢いでアンソニーを追及するものの、彼はにこにこ微笑んだままで何も答えようとはしない。間違いない。アンソニーが言ったのは自分のことなのだ——。慌ててユールベルに振り向くと、みっともないくらいにあたふたと両手を動かしながら言う。

「ユールベル、いま聞いたこと、聞かなかったことにしてくれ！」

ユールベルは無表情でジョシュを見つめたまま、小さな声でぼそりと言う。

「あしたの献立の話なんだけど……」

「……え？」

ジョシュは動きを止めたまま、ヒクリと顔を引きつらせた。

夜の帷が降りた道を、二人は並んで歩く。静かだった。ここに来るときは、付近の住民らしき人々とよく擦れ違ったが、さすがに夜ともなるとチラホラとしか歩いていない。

サイラスは星空を仰いでにっこりと微笑んだ。

「お姉さん思いのいい弟さんだったね」

「どこが！」

さんざん彼にからかわれたジョシュは、思わず感情的にそう返したものの、姉思いという部分に関しては同意見だった。ユールベルも彼を頼りにしているようだ。そうでなければ、レイモンドに襲われかけたことなど話したりはしないだろう。

「あいつ、身近に頼れる人間がいたんだな。良かったよ」

「それが自分でなくて、本当は少し残念だったりする？」

サイラスの冗談めかしたような言葉が、ジョシュの胸にズクリと突き刺さる。

「バカ言うなよ」

少し歩調を早めながら、ジョシュは平静を装ってはぐらかすように答えた。

それが彼の精一杯だった。

「あまり変なことを言わないで」

ユールベルは玄関の鍵をかけながら、背後のアンソニーに少し怒ったようにそう言った。先ほどアンソニーが耳打ちしたことは献立の話などではなかった。咄嗟にユールベルがそう取り繕ったのである。

「姉さん、もしかして先生の方が好きだった？」

「あの人たちは、そういうのじゃない」

「僕はどっちでもいいと思っているよ」

ユールベルの話を聞いているのかいないのか、アンソニーは軽く笑いながら勝手なことを言う。どこまで本気で言っているのか、ユールベルにはわからなかった。ドアノブに掛けた手にギュッと力を込め、うつむいたまま小さな口を開く。

「アンソニー……私のこと、邪魔なの？」

その仄暗い声に、アンソニーはハッと息を呑んだ。

「ごめん、そんなつもりじゃなかった」

低く真面目な声でそう言うと、後ろからユールベルの細い身体を包み込むように抱きしめる。その動作は、まるで壊れ物を扱うかのような優しく慎重なものだった。

「ごめんなさい……」

ユールベルは涙まじりの掠れた声を落とした。そして、頼りない肩を震わせると、首が折れそうなほどに深くうつむいた。



「先生、まだテストの採点、山のように残ってますよ」

鞆を持って当たり前のように帰ろうとしていたサイラスは、アンジェリカに見咎められると、ギクリと足を止めて振り返り、きまり悪そうに笑いながら頭をかいた。

「ごめん、今日は研究所に行きたい気分なんだよね」

「じゃあ、気分を切り替えてください」

アンジェリカは冷ややかに言い放った。何かにつけて研究所に逃げ込もうとするサイラスに、彼女は次第に強気な態度を見せるようになっていた。助手としての使命感がそうさせているだろう。それでもサイラスにはあまり効果はなかった。笑顔のまま、のんびりとした口調で、のらりくらりと反論する。

「別に今日中にやらなくちゃいけないものでもないよ」

「でも、あしたはあしたで課題の採点がありますから」

「そうだね、じゃああしたは今日の分まで頑張るよ」

「もう……」

アンジェリカは口をとがらせて膨れ面を見せた。

たいてい彼女の方が折れることになる。ジークのように正面きって言い返してくる相手には強いが、サイラスのように微妙に論点をずらしてかわす相手には弱いのだ。もっとも今日の場合は、あまり切羽詰まった状況でないため、しつこく食い下がらなかったというのもあるだろう。

とりあえず彼女の優しさに感謝しつつ、サイラスはニコニコしながら手を振って、アカデミーの狭く散らかった自室をあとにした。

特に何かがあったわけでもなく、気分が乗らない日というのはある。

そういうとき、サイラスはなるべく無理をせず、可能であればそこから離れるようにしている。つまりは気分転換である。その方が効率よく進められると思うのだが、アンジェリカの賛同はなかなか得られなかった。気分転換自体は否定しないが、その気分転換が多すぎると言うのだ。確かにそれはもっともだと納得するものの、あまり反省はしておらず、怒られながらもこうやって逃避を繰り返しているのである。

日は傾きつつあるが、まだ空は青く、空気も暖かいままだった。

アカデミーを出たサイラスは、大きく深呼吸をして凝り固まった背筋を伸ばすと、研究所に向かって歩き出した。教師としての仕事や雑務が多いため、日が落ちてから研究所に向かうことが多く、明るいうちにこの道を歩けるのは、今日のように仕事を放り出してきたくらいである。残してきたアンジェリカには悪いことをしたと思いつつも、この開放感に幸せを感じていた。

「先生！」

背後から弾んだ声が聞こえて振り返ると、金髪の少年が人なつこい笑顔を浮かべて駆け寄って

きた。その後ろから、小柄な少女もついてきている。

「やあ、アンソニー」

サイラスは笑顔で応じた。少女の方に見覚えはなかったが、少年がユールベルの弟であることはすぐにわかった。サイラスは人の顔を覚えるのは得意な方ではないが、その人目を引く容姿のせいかな、一度会っただけにもかかわらず強く印象に残っていた。

「今から研究所へ行くの？」

「そう、君は学校帰り？」

「そんなところ。ちょっと遠回りして寄り道してたけど」

身長はサイラスと変わらないくらいだが、屈託なく答える表情は年相応に子供であり、サイラスは少しほっとしていた。ユールベルの家で見たときの彼はやけに大人びていて、時折、心と深く仄暗い何かをその瞳に覗かせることもあり、何となく気になっていたのだ。

アンソニーは隣の少女の肩を引き寄せて続ける。

「紹介するよ、こっちは僕の彼女のカナ＝ゲインズブル、そしてこちらが魔導科学技術研究所の研究員で、アカデミーの教師も兼務しているサイラス＝フェレッティ先生。姉さんがお世話になってるんだ」

「こんにちは」

「初めまして」

緩いウェーブを描いた茶髪をふわりと弾ませ、カナは膝を折って可愛らしく挨拶をした。見ているだけで幸せが伝わってくるかのような笑顔を見せている。マシュマロのように甘く柔らかい雰囲気の子だとサイラスは思った。

「あのさ……先生、ちょっと時間ある？」

「いいけど、どうしたの？」

躊躇いがちに尋ねてきたアンソニーを見て、サイラスは不思議そうに尋ね返す。しかし、彼はそれには答えず、隣のカナに申し訳なさそうな顔を見せながら、その顔の前で左手を立てて片眉をひそめた。

「ごめんカナ、今日は先に帰ってくれる？」

「えっ？ あ……うん、わかったわ」

突然のことに、彼女は一瞬だけ戸惑いの表情を浮かべたが、すぐにエメラルドの瞳をくりっとさせて素直に頷いた。アンソニーの腕からぴよんと飛び出すと、短いスカートをひらめかせながら振り返り、屈託のない笑顔を見せる。

「じゃあまたあしたね！先生もさようなら。今度はゆっくりお話したいな」

会ったばかりのサイラスにも気後れすることなく、彼女は人なつこく挨拶をした。サイラスもつられるように笑顔になって、丁寧に挨拶を返した。

サイラスとアンソニーは、カナがその先の角を曲がるまで、軽く手を振って見送った。

「可愛い子だね。同級生？」

「そうは見えないってよく言われるけどね」

アンソニーは肩を竦めた。確かに、サイラスも彼の年齢を知らなければ、二人が同級生とは思わなかっただろう。アンソニーは年齢のわりに背が高く大人びていて、カナは年齢のわりに小柄で幼い顔立ちをしているのだ。並んだ二人はまるで大人と子供のように見えた。

「それで、どうしたの？何か相談とか？」

「相談っていうか……えっと……もしかして、先生、本当はあまり時間ないの？」

急かしたつもりはなかったのだが、アンソニーはそう感じたようで、不安そうに小首を傾げてそんなことを尋ねてきた。大人びた外見とは不釣り合いな子供っぽい仕草に、サイラスは思わず笑みを漏らす。

「そんなことはないよ。じゃあ、歩きながらゆっくり話そうか」

アンソニーはほっと安堵の息をついて頷いた。

サイラスは特に当てもなく、無意識に研究所の方に足を進めた。通り慣れた道をのんびりと歩いていく。頬を掠める暖かい風が心地いい。

「先生って独身だよな？」

不意に隣のアンソニーが口を切った。思いもしなかった質問に、サイラスは目を見開いて驚いたが、すぐに穏やかな表情に戻って答える。

「そうだよ」

「どうして結婚しないの？」

「相手がいないと出来ないことだからね」

サイラスは少年時代からずっと勉強と研究に没頭してきた。それ以外の優先順位は低い。こと恋愛や結婚に関しては、ほとんど興味がなかったといっても過言ではない。彼にとっての幸せは魔導の研究だけだった。アカデミーの教師も本当は気が進まなかったのだが、次世代の研究者を育てるのも大切な仕事だとサイファに説得されて、4年だけの約束で仕方なく引き受けたのだった。

「僕はいずれカナと結婚したいと思ってるんだ」

空を見上げて息を吸い込み、アンソニーはぽつりと言った。その表情は、夢見るようなものではなく、どこか憂いを含んだものだった。何か障壁となることでもあるのだろうか、とサイラスは思ったが、それを尋ねていいものかどうかわからなかった。

「随分と気が早いんだね」

「いろいろ考えないといけないことが多くてさ」

当たり障りのない探りに、彼は軽く苦笑してごまかすように答えた。

反射的にサイラスは追及する。

「それって進路のこと？家のこと？」

「家のことはあまり関係ないよ。僕はラグランジェ家に執着していないしね。もっとも、家を出るには当主の許しがいるけど、サイファさんなら、僕が出ていくと言っても許してくれると思うし」

淡々と答える彼の端整な横顔は、とても子供とは思えないものだった。

「君もお姉さんみたいにアカデミーに行くの？」

「まだわからないけれど、できれば進学するよりも早く働きたい。アンジェリカが14で働いてるんだから、僕も働けるところがあるんじゃないかと思って。それでさ……サイファさんには相談するつもりだけど、先生も何かいい伝手があったら紹介してくれないかな」

アンソニーは真剣に言った。もしかしたらこのことを頼むために自分を誘ったのかもしれない、とサイラスは思う。しかし、アカデミー首席卒業のアンジェリカでさえ自分の助手程度の仕事しかしていないことを考えると、たいした学歴を持たない彼が働けるところはほとんどないような気がした。

「勉強するのも悪くないよ？」

サイラスがやんわりと言うと、彼はふっと小さく笑みを漏らした。

「でも、姉さんだけに働かせるのは申し訳ないからさ」

「君はまだ子供なんだから甘えていいんじゃないかな」

「姉さんが安心して頼れるようなしっかりした人だったら、僕だって遠慮なく甘えていたと思うけどね。実際は、むしろ僕の方が支えないといけなくらいだからさ」

その口調は普段と変わらないように聞こえたが、瞳には灰暗い陰が潜んでいるように見えた。誰にも甘えられないつらさ、姉を支えねばならない大変さ、というだけではない何かがあるように感じたが、深く立ち入ってはならない気がして、サイラスは「そっか」と軽い相槌だけを打って口を結んだ。

サイラスもアンソニーも無言のまま足を進めた。

アカデミーに近いこともあって、若者が多いその道は、適度に活気があり穏やかな喧噪が広がっていた。そんな中、二人の間の空気だけが重く淀んでいた。

不意にアンソニーは空を仰いだ。

「姉さんさ、子供の頃に両親から酷い仕打ちを受けていたんだ」

突然の告白に、サイラスはきょとんとした。しかし、納得のできない話ではなかった。彼らが両親と一緒に住んでいない理由、そして、彼女の持っている陰のある雰囲気は、そういう過去が原因だったのだと合点がいった。

「親元を離れているのはそのせいだったんだね」

「そう、今はサイファさんが僕たちの親代わり」

アンソニーは静かに答えると、斜め下に視線を落として続ける。

「そんな子供時代のせいかな、姉さんは今でもまだ不安定で脆くてさ、他人との接し方もよくわからないみたい。姉さん自身もこのままじゃいけないって頑張ってるんだけど、ときどき無理をして壊れそうになっていて……」

そこで言葉が途切れた。

彼はゆっくりと足を止めると、難しい顔でうつむいて息をついた。そして、ズボンのポケットに両手を突っ込み、自分の足元を見つめたままぼつりと言う。

「そんな姉さんを放っておけないんだよね」

横から吹いた風に、鮮やかな金の髪がさらさらとなびいた。

「強くなれて突き放すのは簡単だけど、人ってそんなにすぐに強くなれるものじゃないでしょう？ 多分、姉さん、今はまだ誰か縋れる人がそばにいないとダメなんだ。自分のことを無条件に愛してくれる人が……その実感をくれる人が……」

彼の表情は次第に険しく曇っていった。

しかし、急にパッと顔を上げると、おどけるように肩を竦めながら付言する。

「でも姉さんに近づいてくる男ってろくなのがいなくてさ」

確かに、とサイラスも苦笑する。過去のことは知らないが、研究所に来て早々、レイモンドに目をつけられ酷い目に遭わされていたことを思い出していた。ラグランジェの名のせいで、こういう輩が近づいてくることも多いのだろう。

「だから……今は、僕がその役目を負っているんだ」

静かに落とされた言葉。

その意味がよくわからず、サイラスは聞き返すように怪訝な表情を浮かべた。それを目にしたアンソニーは、自分が責められたと勘違いしたのか、自嘲の笑みをその薄い唇にのせる。

「姉さんに頼まれたわけじゃない。僕が姉さんを救いたって思ったから、僕の意味でそうしてるんだ。いけないことだってわかってる……でも、それで姉さんが少しでも救われるなら思っ……」

彼の言っていることが何となくわかってきた。体は大人と変わらなくても、心はまだ大人になりきれていない。そんな彼が、精一杯に悩み、苦しみ、出した答えだったのだろう。正しいこととはいえないが、彼を責める気にはなれなかった。

「だけど、いつまでもってわけにはいかない。ずっと今のままじゃいけないってことはわかってる。でも、姉さんを一人には出来ないし……見捨てられることをすごく怖れてるから……あっ、別に邪魔だと思ってるわけじゃないよ！」

アンソニーは慌てて弁明すると、小さく息をつき、再び表情を沈ませて目を伏せた。

「姉さんのことは好きだよ。だからいつかは姉さんも本当に幸せになってほしいし、僕も僕自身の幸せを手に入れたい。あまりカナも裏切りたくないし……って勝手だよ。図々しいよね。無茶苦茶だよ」

「何となくわかるよ」

サイラスは優しくそう言うと、額を押さえてうつむくアンソニーの頭にそっと手をのせた。その瞬間、何かプツリと途切れたように、鮮やかな青い瞳にじわりと涙が浮かんだ。

「ごめん、先生……僕も結構まいってたのかな」

きまり悪そうにはにかみながら、溢れそうになった涙を拭う。通り過ぎる人たちが、ちらちらと不思議そうにこちらの方を窺っていた。子供とはいえない外見で、なおかつ人目を引く容姿のアンソニーが、このような往来で涙を浮かべていては、注目を浴びるのも当然のことだろう。

「今日のことは誰にも言わないでくれる？ 姉さんにも、ジョシュにも」

「わかってるよ」

サイラスは落ち着いた声で答える。もともと頼まれなくても誰にも言うつもりはなかった。わざわざ口外する理由などない。ただ、深い意味はなかったのかもしれないが、アンソニーからジ

ヨシュの名前が出たことに少し驚いていた。

「それと、僕はいいけど、姉さんのことだけは……軽蔑しないでほしい……」

アンソニーは張り詰めた表情で言葉を絞り出す。秘めておかねばならないはずのことを、許可なく勝手に話してしまったことに責任を感じているのだろう。もしかすると後悔しているのかもしれない。だが、サイラスにはそのことで軽蔑するような気持ちは起こらなかった。安心させるようににっこりと微笑んで言う。

「ユールベルのことも、もちろん君のことも、軽蔑なんてしないよ」

「……先生みたいな人が、姉さんを支えてくれるといいんだけど」

アンソニーはほっとしたように、しかし少し悲しげに、小さく笑みを漏らして呟いた。

彼には子供でいられる場所が少なかったのかもしれない。本来ならば、まだ親の庇護を受けて甘えている年齢にもかかわらず、逆に姉を支える立場にまわっているのだ。歪みが生じても仕方のない境遇だったといえるだろう。

だが、それを知ったところで、サイラスにはどうすればいいのかわからなかった。

どうにかしたいという気持ちはないわけではないが、安易に手をつけていい問題でもないと思う。彼らの事情に踏み込むには相当の覚悟が必要だと感じた。今の自分に出来るせめてものことといえば――。

「ねえ、アンソニー、アイスクリームでも食べに行こうか」

「……アイスクリーム？」

「そう、アイスクリーム。嫌いなら別のものでもいいけど」

アンソニーは不思議そうな顔をしていたが、やがてふっと表情を緩めた。

「ありがとう、先生」

少しの間のと、静かにそう言う。いつもとあまり変わらない口調だったが、そこには精一杯の気持ちがこめられているように感じられた。サイラスは目を細めて柔らかく微笑むと、ほとんど背丈の変わらない彼の背中にぽんと手を置いた。

## 選択

---

ユールベルは図書室の返却カウンターに、古びた3冊の本を重ねて置いた。

卒論用に借りた本の返却期限が迫っていたので、今日はこのためだけにアカデミーへ来たのだ。他に用はない。せっかくなのでサイラスの部屋へ寄っていこうかと考えるが、この時間は、まだ担当している1年生のクラスで教壇に立っているはずである。アンジェリカはいるかもしれないが、彼女と二人きりになるのは気が進まない。授業が終わるまでここで時間を潰そうと、本棚から適当に一冊を選び、窓際の席について読み始めた。

授業時間中であるものの、図書室にはちらほらと人がいる。ユールベルと同じように卒業間際の4年生なのだろう。みな静かに黙々と本を読んでいた。ページを繰る音だけが、近くで、遠くで、遠慮がちに聞こえる。半開きになった窓からは、そっと、微かな風が滑り込んだ。

ガラガラガラ――。

扉を開く無遠慮な音が、静寂の空間に響き渡った。

意識的に見ようとしたわけではないが、音につられて、ユールベルは何気なく扉の方に目を向ける。その瞬間、ハッと息を呑んで立ち上がった。何故という疑問が脳裏を掠めるものの、それを考える余裕などない。気づかれないよう慌てて顔を逸らすと、読んでいた本を本棚に返し、うつむいて足早に図書室を去ろうとする。だが――。

「……っ！！」

すれ違い際、先ほど入ってきた男に上腕を掴まれた。

逃げようとしたのは彼と会いたくなかったからである。だが、彼の目的は自分であるはずがないと思っていただけに、この展開に驚かすにはいられなかった。

「何をするの?! 離してっ!!」

「おまえに話がある」

その男――ラウルは無表情でそう言うと、ユールベルの腕を掴んだまま、脇に抱えていた本を返却カウンターの上に置いた。そして、逃れようと足掻くユールベルを引きずるようにして図書室を出ていく。

去りゆく二人の背後では、小さなざわめきが起こっていた。

「私が図書室にいるって……どうしてわかったの……」

図書室からさほど離れていない廊下の壁に押しつけられ、ユールベルは怯みそうになりながらも、上目遣いでじっと睨み、訝るように声を低めて尋ねた。

「勘違いするな。用があって行った図書室に、たまたまおまえがいただけだ」

ラウルは無感情に見下ろして答える。

その冷たい言い方にムッとし、ユールベルは掴まれた腕に力をこめてそれを示す。

「だったら、これはどういうつもりなの」

「おまえが医務室に来ないからだ」

ラウルはポケットから紙切れを取り出し、それをユールベルの前に差し出した。メモ用紙を四つ折りにしたようなもので、この状態では、書いてある内容まではわからない。

「……何？」

「この王宮医師におまえのことを頼んでおいた。医務室の場所も書いてある。私と顔を合わせたくないのならここへ行け」

ユールベルは頭の中が真っ白になり、絶句した。

「面倒だろうが定期的に診せろ。医師としての最後の忠告だ」

力の入らないユールベルの手に、ラウルは無理やりその紙を握らせた。そしてもう用はないとばかりに、少しの未練も見せることなく、長い焦茶色の髪を揺らせて背を向けようとする。

とっさに、ユールベルは彼の手首を掴んで引き留めた。

白いワンピースがふわりと風をはらみ、緩くウェーブを描いた髪が揺れ、後頭部で結んだ包帯がひらりとなびく。そして、無言のままゆっくりとうつむき、縋るように、彼を掴む手に力をこめた。

「……私のことを……見捨てるの……？」

喉の奥から絞り出した声は小さく震えていた。

「おまえが私のところに来るといふのならそれでもいい。自分で選べ」

「……どうして……そんな突き放したことを言うの……っ！」

包帯をしていない方の目から雫がこぼれ、タイルに落下して弾けた。膝から体が崩れ落ちそうになり、両手でラウルの服を掴んでしがみついた。ラウルはそれでも無表情を崩さなかった。

「おまえはもう子供ではない。自分のことは自分で決めろ」

その言葉はユールベルの胸に深く突き刺さった。

「みんな……みんなそう言うの……18だから子供じゃない、自立しろ、全部自分で選べって……そんなの本当は厄介払いしたいだけなんじゃない？ やっと突き放せてほっとしているんじゃない？ 物わかりのいいふりして、おまえのためだなんて言って……そんなのずるいわ！ 卑怯よ！ 嫌いだ、来るなって言われた方がまだましだわ！！」

考えるよりも先に言葉が飛び出していた。何を言っているのか自分でもわからなくなっていた。頭の中はぐしゃぐしゃである。ただ、怖かった。我を忘れたように彼の胸を何度も叩き、溢れくるまま感情をぶつけて泣きわめく。

ラウルは微動だにせずそれを受けていた。しかし、やがて面倒くさそうに溜息をつくとき、ユールベルの細い手首を掴んで止め、その華奢な体を軽々と肩に担ぎ上げた。

「何する……のっ……！」

ユールベルは背中側に頭を落とされ、逆さになったまま、広い背中を叩いて必死に抗議する。しかし、ラウルはまったくの無反応で、まわりの視線も気にせず、暴れるユールベルを抱えて大股で歩いていった。

ラウルが医務室へ向かっていることは、ユールベルにもすぐにわかった。そのことで少し頭が冷えたようだ。無駄な足掻きをすることはやめ、小さくしゃくり上げながら大人しくなった。



ラウルは医務室の扉を開けて中に入ると、そこにユールベルを下ろし、ガラス扉のついた棚から新品の包帯と薬を取り出した。

「座れ」

自分も席に腰を下ろしながら、突っ立っているユールベルに冷たく言う。

何度もこの医務室で診察を受けているので、勝手にわからないわけではない。だが、今日はラウルの機嫌がいつも以上に悪く、またその原因が自分だという自覚があったので、冷静さを取り戻したユールベルは少しびくついてた。それでも、言われるままに患者用の丸椅子にそろりと腰を下ろす。

ラウルは無言でユールベルの頭を引き寄せ、包帯の結び目をほどいた。そのくたびれた包帯を巻き取ると、傷の具合と見えない目を診察し、消毒をして、薬を塗って、ガーゼを当て、新しい包帯を巻いていく。その手際はいつもどおり丁寧かつ素早いもので、どこにも荒っぽさはなかった。

最後に、ユールベルの頭を抱えるようにして、後頭部で包帯を結ぶ。

このとき、いつも、ユールベルは胸がきゅっと締めつけられる。そんなはずはないとわかっているのに、大事にされているのではないかという錯覚に陥りそうになり、そんな自分を浅ましくみっともなく思うのだ。

二人の体が離れた。

微かに感じていた温もりがなくなり、ユールベルは急に心許なくなった。手を伸ばしたい衝動に駆られたが、握りしめたこぶしを膝に留めてじっと耐える。

「これからは自分で選べ。ここへ来るか、他の医務室へ行くかを」

ユールベルの胸の内を知ってか知らずか、ラウルは包帯の残り薬を片付けながら、淡々と冷ややかに言葉を落としていく。

「いくら泣いても喚いても、おまえは私にとってただの患者でしかない。望むようなことはしてやれん。いいかげんに諦めろ」

「わかっているわ、そんなこと……諦めている……諦めているわ……」

ユールベルは眉根を寄せてうつむき、膝の上でワンピースの裾をギュッと握りしめた。白く柔らかな布に、無数の皺が放射状に走る。

理性ではもう完全に諦めていた。

だが、実際に会ってしまうと心が乱されてしまい、些細なことで気持ちが暴走して抑えきれなくなってしまう。そのことがわかっていたからこそ、医務室には行かず、ラウルを避けていたのだ。

「私に会うのは苦痛だろうと思い、他の選択肢を用意した。だが、患者としてのおまえが、医師としての私を選ぶのなら拒絶はしない。お膳立てはここまでだ。あとはおまえが自分で選択しろ」

「私には……選べない……」

ユールベルは声を震わせながら固く目をつむり、小さく首を横に振った。真新しい白い包帯と

ともに、腰近くまである長い髪が鈍重に揺れる。

「おまえはいつまで甘え続けるつもりだ」

いつものように感情のない声が響く。

今のユールベルにはそれがひととき冷たく感じられた。

「大人になれば誰もが自分で考え、悩み、自分の責任で物事を選択している。たとえ意に沿わない選択肢しかなくてもな。嫌だと駄々をこねるのは子供のやることだ。おまえは誰かに責任を押しつけ、ただ子供のように守られていたいのだろう」

「18だから急に大人になれなんて、そんなの無理よ！」

「ならば、いつになったら大人になれるというのだ」

ユールベルはきゅっと下唇を噛んだ。自分の訴えがただの言い訳だったことに気づいたが、それをすぐに認めるほど素直ではなかった。黒く渦巻く気持ちを抱えながら、攻撃の矛先を変える。

「あの人はいまだに守られてばかりいる」

「おまえはあいつのことを何も知らない」

具体的に名前は出さなかったが、ラウルには誰のことかわかったようで、即座に言い返してきた。ムツとしたユールベルに、片付ける手を止めてさらに語り出す。

「あいつは……つらいことがあっても自分の心に秘め、酷い仕打ちを受けても相手を責めることはなく、皆に心配かけないように笑顔を見せている。守られていることを当たり前と思わずに感謝を忘れない。そんなあいつだからこそ、私も、サイファも——」

「そんなの惚れた欲目ってだけでしょ？！」

たまらなくなっ、ユールベルは涙目で叫んだ。

「そう思いたければ思えばいい」

ラウルは怒りもせず落ち着いた口調でそう言うと、椅子をまわしてユールベルに振り向き、正面からまっすぐにその瞳を見据えた。

「少なくとも、おまえのようにまわりを恨んでばかりの人間を、守られていることに感謝もできない人間を、私は守りたいとは思わない」

無表情のまま、彼はきっぱりと言い放つ。

ユールベルは大きく目を見張った。

返す言葉が見つからなかった。

ラウルが自分のために手を尽くしてくれたことは知っている。それなのに、感謝の気持ちを伝えるどころか、さらに多くを求めて責め立てるばかりだった。自分の境遇に甘えて恨み言をぶつけるばかりだった。

こんな私では、愛想を尽かされるのも当然だわ——。

彼の最も大切な存在になりえないことが怖かったのかもしれない。他人を責めることで自分の心を守ろうとしていたのかもしれない。深くうつむき、目をつむる。悔しいというより、恥ずかしいという気持ちの方が大きかった。

変わりたいと思っているのに、変わらない。

強くなりたいと思っているのに、強くなれない。

結局いつも甘えて、逃げて、縋ってばかり。

でも、このままではいけない。このままでは――。

「今……は……、もう少しだけ、考える時間がほしい……」

ユールベルはうつむいたまま、掠れる声を絞り出した。

「わかった」

ラウルは静かにそう答えると、もう一度、四つ折りにした紙切れをユールベルに手渡した。図書室の前で渡されたものと同じものようだ。あのとき、我を忘れたユールベルがいつのまにか落としていたのだろう。ラウルが拾っていたことすら気づいていなかった。

ユールベルは硬い面持ちでそれを見つめると、ゆっくりと握りしめ、決意を固めるようにきゅっと口を結んで立ち上がった。

ユールベルは、両脇に紙束が積まれたスチール机の上で、俯せになって目を閉じていた。細く開いた窓から舞い込んだ風が、薄いカーテンをひらひらとはためかせ、緩いウェーブを描いた金の髪と白い包帯を小さく揺らす。いつ来ても乱雑で、狭くて、お世辞にもきれいとは言い難いこの部屋が、なぜかユールベルには落ち着ける場所になっていた。

私、逃げている――。

ラウルに言われたことの結論はまだ出ていない。それどころか真剣に向き合ってさえいない。あの日以来、毎日のようにここへ来て、何をするでもなく、ただぼんやりしたり、サイラスと話したり、ときにはアンジェリカと話したりしている。そんなユールベルを、サイラスはごく自然に受け入れてくれていた。不思議には思っているだろうが、頻繁にここに来るようになった理由も訊かないのである。

しかし、それももうすぐ終わる。

卒業式の日是目前に迫っていた。卒業してしまえば、気軽に訪れることもできなくなるだろう。それまではせめて許してほしい、ここに逃げ込むことを、結論を先延ばしにすることを――ユールベルは薄く目を開いた。

ガチャン――。

静かな部屋にドアノブのまわる音が響いて、扉が勢いよく開いた。サイラスたちが戻ってきたのだろうと思い、ユールベルは顔を上げたが、そこにいたのは思いもしない人物だった。

「あれ？ おまえ何でここにいるんだ？ アンジェリカは？」

魔導省の制服を着たジークが、ユールベルを指さしながら混乱したように尋ねた。

「先生とアンジェリカは図書室に行ったわ。すぐに戻ってくるって」

ユールベルは無感情で淡々と答える。

「そうか……」

ジークは僅かに声を沈ませると、微妙に渋い顔で、落ち着きなく首をひねったり頭を押さえたりした。ここで待つべきかどうか迷っているのだろう。そんな彼を、ユールベルはじっと見つめて口を開いた。

「ジークは成人して何か変わった？」

「……えっ？」

唐突な質問に、ジークはぱちくりと瞬きをした。しかしすぐに真面目に考え始める。

「そうだなあ……18になってもそんなに意識はしなかったな。大人になったって実感はあんまりなかったし、まわりからもそんなに大人扱いされなかったし。のらりくらり学生やってたってのもあるんだろうけど」

それは拍子抜けするような答えだったが、ユールベルにはとても羨ましく思えた。

ジークは斜め上に視線を向けて、さらに続ける。

「就職してからの方が変わったことは多かったな。自分の言動に責任を持たなきゃならないって

ことを実感を持って理解した、っていうか、理解させられたっていうか……結構大変だぜ、働くのも」

その言葉とは裏腹に、彼の声にはどこか楽しげに弾んでいた。

「そーいやおまえ、あの研究所に就職するんだってな」

「ええ……」

あの研究所、などという極めて曖昧な言い方だったが、おそらく王立魔導科学技術研究所のことだろうと思い、ユールベルは戸惑いながらも小さく頷いた。

「気をつけるよ。あそこにはラグランジェの関係者ってだけで嫌ってくるやつがいるんだ。おまえなんてもろにラグランジェ家の人間だし、おまけにサイファさんの口利きで入ったんだから、標的になることは間違いないぜ」

「ジョシュ……？」

ジークの言った人物像に当てはまるのは彼しかいなかった。少なくとも、ユールベルが知る中では彼だけである。

「あれ？ 知ってんのか？」

「研修に行っていたから……」

「ああ、そうか」

ジークは軽く納得すると苦笑した。

「ひどかったら？ あいつの態度」

「でも、ジョシュはいい人……私を助けてくれたもの……」

確かに、彼にはラグランジェの人間だからという理由で冷たい態度をとられたが、襲われかけていたときには見過ごすことなく助けてくれたのだ。しかし、事情を知らないジークは、怪訝な顔で腕を組みながら首をひねる。

「まあ、悪いやつではないと思うけどな……ひいっ！！」

突然、彼は引きつった悲鳴を上げて飛び上がった。

「おまえっ！ 背筋を指でなぞるのはやめろっ！！」

「だってジークが入口をふさいでいるんだもの」

顔を赤くして勢いよく振り返ったジークに、アンジェリカは楽しそうに笑いながら答えた。図書室から戻ってきたところなのだろう。その隣にはにこにこしているサイラスもいた。

「ったく……おまえ忘れてたんじゃねえだろうな」

「心配しなくてもちゃんと覚えているわよ」

アンジェリカはニコツとして答えると、隣のサイラスに振り向いて言う。

「それじゃ、私はこれで帰りますね。お疲れさまです」

「お疲れさま」

サイラスが片手を上げて応えると、彼女はサイラスに小さく手を振り、部屋の中のユールベルにも手を振って、幸せそうな顔でジークと並んでどこかへと去っていった。

「留守番させちゃってごめんね」

サイラスは部屋の中に入ると、一番奥の自席に座り、すっかり冷めた飲みかけのコーヒーを口に運んだ。それでも美味しそうに顔をほころばせると、ほっと一息ついて、無表情のユールベルに微笑みかける。

「君もジークと知り合いだったんだ」

「……あの二人はどこへ行ったの？」

「さあ、詳しくは聞いてないけど、何かお祝いとか言ってたよ」

「そう……」

ユールベルはそう言うと、再び机に俯せになった。他人の幸せを素直に喜べない今の自分は、多分、とてもひどい顔をしている。そんな顔をサイラスには見せたくなかった。

「ねえ、僕たちもどこかへ行こうか」

「……どこへ？」

サイラスの思いがけない誘いに驚きながら、それでも顔を上げることなく、ぽつりと小さく尋ね返した。彼は、ギシリと音を立てて椅子の背もたれにもたれかかると、腕を組んでのんびりと答える。

「そうだね、アイスクリームでも食べに行こうか」

ユールベルは少しだけ顔を上げ、ちらりとサイラスに横目を向けた。その視線がぶつかると、彼はにっこりと微笑み、机に肘をついて前屈みでユールベルを覗き込む。

「嫌い？」

「嫌いじゃ、ない……」

「じゃあ行こうよ、ね？」

まっすぐ向けられたその視線に、ユールベルは微かな戸惑いを感じたが、不思議と逃げたい気持ちは起こらなかった。机に頭を載せたままじっと彼を見つめ返すと、小さくこくりと頷いた。

「ここのアイスクリームが好きなんだけど、一人ではちょっと行きづらくてね。これからもときどき付き合ってくれると嬉しいな」

向かいに座るサイラスは、カップ入りのアイスクリームをスプーンですくいながら、これまで見たこともないくらいの晴れやかな笑顔でそんなことを言った。

ユールベルが連れてこられたのは、小さなアイスクリーム専門店だった。

店内を見まわしてみると、並んでいるのも、席に着いているのも、ほとんどが若い女性である。ちらほら男性客もいるが、みな女性と一緒に来ているようだ。確かにこれでは男性一人では行きづらだろう。

「先生がアイスクリームが好きだなんて知らなかった」

「まだまだ君の知らないことがたくさんあると思うよ」

サイラスはにっこりと笑って言った。

ユールベルは何と答えていいかわからず、無表情のままアイスクリームを口に運ぶ。それでも彼はにこにここと微笑んでユールベルを見ていた。

今日だけではない。

ユールベルがどれだけ無愛想な態度をとっても、いつも優しく見守るようにそこにいてくれる。だからだろう、彼のそばはとても居心地が良く、ついそこに逃げ込みたくなるのだ。他人の優しさを利用するのは、もうやめなければと思っていたのに――。

「先生、私、逃げているの……」

ユールベルはゆっくりうつむくと、スプーンを握る手に力をこめた。

突然のことにサイラスはきょとんとしたが、すぐに軽く笑いながら答える。

「僕もしょっちゅう逃げてるよ。つらいときは逃げるのもいいんじゃないかな。気分が乗らないときまで無理することはないよ」

彼の言葉を聞いていると、逃げるのも悪いことではないように思えてくる。しかし、彼の「逃げる」は、ユールベルのそれとは根本的に違うのだ。彼の場合は、気分転換のための一時的な逃避であり、その根底にあるのは前向きな気持ちである。それに引き替え自分は――。ユールベルはますます深くうつむき、独り言のように呟く。

「結局、本当に逃げたいものからは逃げられないのね……」

サイラスは不思議そうに瞬きをしてユールベルを覗き込む。

「本当に逃げたいものって？」

「私自身」

ユールベルはぼつりと言葉を落とした。

「弱くて、ずるくて、我が侂で、嫉妬深くて、欲深くて、僻んでばかりで、手に入らないものばかり欲しがって。そんなどうしようもない人間だから、自分でも大嫌いだし、他の誰からも好かれないの」

「僕はユールベルのことが好きだよ」

それはサイラスの優しさだったのだろう。いや、同情なのかもしれない。ユールベルは言いよのない虚しさを感じて、きつく眉根を寄せた。スプーンを持つ手にも無意識に力が入る。

「先生は私のことをよく知らないもの。私のことを知ればきっと嫌いになる」

「そうならない自信はあるけどね」

サイラスは楽しげにアイスクリームをすくいながら平然と言った。自信満々というよりも、それが当然であるかのような口調だった。

「どうして？」

「勘、かな？」

あまりにもいい加減な答えに、ユールベルは啞然とすると、呆れたように溜息をつく。

「研究者とは思えない答えね」

「研究者には勘も必要なんだよ」

サイラスは頭を指さしてそう答えた。いったいどこまで本気で言っているのか、ユールベルにはわからなかった。しかし、邪気のない彼の笑みを見ていると、黒く渦巻く気持ちが薄らいでいき、これ以上、反論する気もなくなっていった。

「変な人……」

「アイスクリーム、溶けちゃうよ」

サイラスは笑いながら言った。

ユールベルは溶けかかったアイスクリームをすくって黙々と口に運ぶ。それはとても冷たかったが、ほっとするような甘さがあり、口にするたびに気持ちが和らいでいくように感じた。

いつかは現実と向き合わなければならない。

だけど、あと少しだけ――。

そんな甘えた考えも、今だけは許されるような気がした。



「ユールベル、卒業おめでとう！」

ターニャは講堂から出てきたユールベルに駆け寄り、彼女が戸惑うのも構わずに思いきりぎゅっと抱きしめた。白いワンピースの裾がふわりと舞い、金の髪が揺れ、立ち上ったほのかな甘い匂いが鼻をくすぐる。

「卒業生代表の挨拶も良かったわよ」

「あれは俺が書いたようなものだ」

ユールベルの後ろからついてきていたレオナルドが、自慢げに胸を張って割り込んできた。普段と変わらない格好をしているユールベルとは対照的に、新調したと思われる、高級そうな仕立ての良いスーツを身に着けていた。

「それどういう意味よ」

「何を言ったらいいかわからない、ってユールベルが悩んでたから、ネタ出ししてやったんだ。まあ、文章に起こしたのはユールベルだけだな」

腰に手を当てて鼻高々のレオナルドに、ターニャは呆れた眼差しを送った。

「卒業できるかさえ危なかったのに、よくそんな余裕があったわね」

「卒業が決まってからの話だ！！」

レオナルドは卒業証書の入った筒を握りしめ、顔を真っ赤にして言い返した。

今日はアカデミーの卒業式である。

元ルームメイトで友人のユールベルを祝うために、ターニャはここへやってきたのだ。もっとも、当事者である卒業生と教師以外の立ち入りは許可されていないため、式は外からこっそり覗いていただけである。だが、取り立てて派手なことを行うわけでもないのだから、声を聞くだけでも十分なくらいだった。

長くはない厳粛な式が終わると、講堂のまわりは急に賑やかになった。外に出た卒業生たちのはしゃいだ声があちこちで上がる。ターニャたちの声も、その中のひとつだった。

「ユールベル、卒業おめでとう」

ふと、背後から落ち着いた声が聞こえ、3人は会話を中断して振り返る。

そこにいたのは、優しく微笑む温厚そうな男性だった。

ターニャには見覚えのない人物であり、誰だろうかと不思議に思う。ユールベルの父親にしては若すぎるし、そもそも全く似ていない。第一、このぼさぼさ髪の冴えない男が、ラグランジェ家の人間であるとも思えない。

「ありがとう」

考え込んでいるターニャをよそに、ユールベルは素直に淡々と応じた。

ターニャは、その男性のことが気になりつつも、さすがに本人の目の前で「誰？」などと訊くことは躊躇われた。だが、レオナルドの方は、そんな気遣いなど微塵も持ち合わせていないよ

うだ。

「おまえユールベルとどういう関係だ」

単刀直入に、しかもあからさまな敵意を込めて、睨みつけるような視線で問いただす。年上の人間に対して、かなり失礼な態度といえるだろう。

「やめてレオナルド、この人は……」

「僕はサイラス＝フェレッティ。アカデミーの魔導全科1年担任と、魔導科学技術研究所の研究員を兼務している。ユールベルとは研究所で知り合ったんだ」

困惑したユールベルを制止して、相手の男性は笑みを崩すことなく端的に説明をした。それでもレオナルドは納得しなかったらしく、さらに険しい顔になり食ってかかる。

「教師が生徒に手を出していいと思っているのか」

それはあまりにも飛躍した決めつけだった。サイラスは困ったように乾いた笑いを浮かべると、ユールベルに振り向いて肩を竦める。

「何か誤解しているみたいだね、君の……彼氏？」

「彼氏じゃなくて、親戚……」

ユールベルは無表情でぼそりと答えた。

それまで黙って聞いていたターニャは、その言葉を耳にして思わず嘔き出した。しかし、すぐに咳払いしてそれをごまかす。レオナルドは、その様子を横目で見ながら、ムッと眉をひそめて睨んだ。

サイラスは申し訳なさそうに微笑みながら、ユールベルに振り向いて口を開く。

「ごめんね、ユールベル。友達と一緒にのところに声を掛けちゃって。これからアイスクリームでもどうかなと思ったんだけど、それはまた今度にするよ」

「ええ……私の方こそ、ごめんなさい……」

ユールベルのその声には、どこか寂しそうな響きがあった。気のせいではないだろう。彼女の場合、表情にあまり動きはなくても、声には比較的素直に感情が表れるのだ——ターニャは確信してくすりと笑う。

「ユールベルは先生と行って。私からのお祝いは、また今度ってことで」

「おまえっ！何を言って……」

勢いよく突っかかってきたレオナルドの口を、ターニャは両手を伸ばして無理やりふさぎ、満面の笑みを浮かべて続ける。

「今日はレオナルドを祝ってあげることにするわ。だから、こっちは気にしないでね」

「えっ……あの……」

「それじゃーねっ！！」

戸惑うユールベルに一方的にそう告げると、大きく手を振り、レオナルドの腕を引きながら逃げるように門に向かって走っていった。講堂前に残されたユールベルとサイラスは、呆気にとられ、去りゆく二人をただ立ちつくしたまま見送っていた。

「おい、どういうつもりなんだよ」

アカデミーの門を出ると、レオナルドはむすっとした膨れ面を見せながら、前を歩くターニャにぶっさらぼうに尋ねた。ターニャは掴んでいた彼の手首を放すと、くるりと振り返り、その鼻先に人差し指を突きつけて言う。

「ユールベルが先生と過ごしたがってるって気づかなかったの？」

「あんな野暮ったい冴えないおっさんなんて、冗談じゃないぞ」

「大事なものは外見じゃなくて中身でしょ。いい人そうじゃない」

嫌悪感を露わにしたレオナルドに、ターニャは反論する。

「ユールベルにはああいう穏やかで優しい人が似合ってるのよ。すごく大切にしてくれそうな感じがするし。あの二人はきっと上手くいくわ。うん、間違いない！」

一人で盛り上がると、両手を組み合わせ、澄み渡った青空をうっとり仰ぐ。

「なに勝手に決めつけてるんだよ」

「決めつけじゃなくて、女の勘よ」

「女の勘……おまえがね……」

レオナルドは嘲笑まじりに口先で呟いた。

その言葉が聞こえていたものの、彼の失礼な態度には慣れていたため、ターニャは気にすることなく受け流した。それより、他にもっと気になっていることがあるのだ。横目を彼に向け、遠慮がちにそろりと切り出す。

「ねえ、余計なお世話かもしれないけど、いい加減ユールベルのこと諦めたら？」

「とっくに諦めてるさ。もう終わってるんだよ」

レオナルドの答えは、拍子抜けするくらいあっさりとしていた。先ほどまで見せていた態度とは裏腹の、まるで何の未練もなさそうな口調である。ターニャは怪訝に眉をひそめて問い詰める。

「じゃあ、何でそんなにムキになるのよ」

「終わったからって、情までなくなったわけじゃない。あいつが不幸になるのは見たくない。いつか幸せになれることを願っている……それだけのことだ」

そう語るレオナルドの眼差しは、ドキリとするくらいまっすぐで、真剣そのものだった。その言葉に嘘やごまかしはないだろう。別れた相手からこんなふうに思われるユールベルを、ターニャは少し羨ましく思う。

「だったら大人しく見守ることね。上手くいくものもいなくなっちゃう」

「だからあんなおっさんじゃ、あいつが幸せになれないって言ってるんだ」

レオナルドは相変わらず一方的に決めつけていた。先ほど羨ましいと思ったばかりなのに、ターニャはもうその気持ちを撤回したくなった。思いきり眉をしかめた不機嫌な顔を、グイッと背伸びして彼の鼻先に突きつける。

「そんなのわからないじゃない。ユールベルを信じて見守るの！ いい?!」

「……わかったよ」

ターニャの勢いに圧され、レオナルドは少し上体を引きながら、仕方なくといった感じでしぶしぶ返事をした。柔らかい金髪を掻き上げながら顔をそむけると、小さく溜息をつく。

「それで、どうやって祝ってくれるんだ？」

「えっ？」

ターニャは隣のレオナルドに振り向いて、問いかけるようにぱちくりと瞬きをした。彼は、空を見上げたままポケットに両手を突っ込み、静かな声で言う。

「さっき言っただろう、祝ってくれるって」

「ああ、そっか。じゃあゴハンでも奢ってあげるわ。何が食べたい？」

ターニャが人差し指を立てて明るく尋ねると、レオナルドは少しだけ振り向き、どこかむくれたような表情で、ターニャにじとりと視線を流した。

「貧乏人のおまえに、俺が奢られるのか？」

「あら、これでも立派に社会人やってるのよ？ 今はもうそんなに貧乏でもないんだから。妙なプライドなんか捨てて、今日くらいは素直にお姉さんに奢られなさいって」

ターニャは軽く笑いながらレオナルドの肩をぽんと叩いた。

その瞬間、彼の表情があからさまに翳った。

「そんなに年が違わないのに、年上ぶってお姉さんなんて言うな」

彼がなぜそんな表情でそんなことを言うのか、ターニャにはわからなかった。戸惑いを感じながらも、目を合わそうとしない彼の横顔を見つめ、小さく首を傾げて尋ねる。

「2年違えば十分でしょ？」

「3ヶ月しか違わない」

「えっ？」

彼の言った意味が理解できず、ターニャは聞き返した。

「俺は入学したとき19歳だった」

「あ、そうなんだ……でも、3ヶ月??」

彼がアカデミーに19歳で入学したとなると、生まれ年はターニャと一つしか変わらないことになる。そこまではいいが、3ヶ月という数字に関しては、やはりわからないままだった。しかし、続くレオナルドの言葉で、その疑問も解ける。

「おまえの生年月日はアカデミーの名簿で調べた」

「……は？」

「そんなことも知らないのか？ 図書室に行けば、卒業生の氏名と生年月日が書かれた名簿がある。アカデミーの関係者なら誰でも閲覧可能だ」

平然と答えるレオナルドの言葉を聞いているうちに、ターニャの目は大きく見開かれていった。両方のこぶしをギュッと握りしめて、眉根を寄せると、語気を強めて勢いよく責め立てる。

「そうじゃなくて！ だからって何でわざわざ人の生年月日をこっそり調べてるわけ？ 普通そんなことしないでしょ。何かちょっと怖いんだけど！！」

それでもレオナルドに動揺は見られなかった。少しばかり上気したターニャをじっと見下ろし、開き直ったかのようにふてぶてしく言い返す。

「好きな女のことを調べて何が悪い」

「ああ、まあそういう理由だったらわからなくもないけど……って、あれっ？」

ターニャはいったん納得しかけたが、何かがおかしいことに気づいて首を傾げた。ユールベルことを言っているのかと思ったが、彼女の生年月日ならば、わざわざアカデミーの名簿など見なくても知っているだろう。だとすれば、彼の言う好きな女というのは、ユールベル以外の誰かということになる。

「もしかして、もう他に好きな子いるの？」

ターニャは瞬きをして尋ねた。

何を言ってるんだといわんばかりの表情で、レオナルドは柔らかい金の髪を掻き上げながら、呆れたように小さく溜息をついた。それから顔を上げ、真剣な眼差しでターニャを見据えると、ゆっくりと薄い唇を開いて言う。

「おまえが好きだ。俺と付き合え」

「……へっ？」

呆然としたターニャの口からは、間の抜けた声しか出なかった。

「ターニャ、そろそろ切り上げない？」

「ごめん、私、もう少しやっていくから」

定時が過ぎてすっかり帰る気になっている同僚のアニーに、ターニャは申し訳なさそうに両手を合わせて詫びた。そして、さらに申し訳ない顔になり、上目遣いで、言いにくそうに二日連続のお願いを切り出す。

「それでさ……もしあいつが待ってたら、もう帰ったって言ってくれない？」

「またあ？ 私は別にいいけど……でも、嫌ならちゃんと断った方がいいよ？」

アニーは机の書類を片付けながら軽く忠告する。しかし、そんなことはもちろんターニャにもわかっていた。疲れたように薄く笑って溜息をつく。

「もう何度も断ったわよ。でも、あいつ全然あきらめてくれないんだもの」

「そんな情熱的に想われるなんて羨ましいよ。いっそ付き合っちゃえば？」

「バカ言わないでよ！」

悪戯っぽくからかうアニーの言葉に、ターニャはむきになって反論した。思いのほか大きかった声は、しんとしたフロアに響き渡り、まわりの注目を集めてしまう。ターニャは慌てて肩を竦めて小さくなり、ごまかし笑いを浮かべながら周囲にペコペコと頭を下げた。

アニーは首を伸ばしてターニャに顔を寄せると、声をひそめて話を続ける。

「どうしてよ？ 結構カッコイイし、一途っぽいし、何よりラグランジェ家のご子息なんですよ？ 言うことないじゃない。上手くいけば玉の輿だよ？ 何が不満なわけ？」

「……バカなのよ」

少し考えたあと、ターニャはぽつりと言葉を落とした。

「えっ？ でもアカデミー卒業したんでしょう？」

「成績の問題じゃなくて、人としてバカなのよ」

「ふうん、まあ、人の好みはそれぞれだけどね」

アニーは興味なさげにそう言うと、鞆を持って立ち上がり、「お先に」と挨拶をして帰っていった。遠ざかる彼女の足音を聞きながら、ターニャは書類に目を落としたが、胸がざわついてなかなか集中することができなかった。

突然の告白以来、レオナルドは毎日のようにターニャの前に姿を現した。

その度に、ターニャは毅然と断ってきた。少なくともターニャ自身はそのつもりだった。しかし、人の話を聞いているのかいないのか、それとも断り方が悪いのか、レオナルドは性懲りもなく告白を繰り返し、付き合えと偉そうに迫るのだ。

彼のことが嫌いなわけではない。

だが、あくまで友人の一人である。恋愛対象として見たことはなかったし、見るつもりもなかった。それ以前に、彼とは付き合うわけにはいかない理由がある――。

数時間が過ぎ、フロアに残っている人もだいぶ少なくなってきた。

ターニャはきりのいいところまで仕事を片付けると、大きく腕を上げて背筋を伸ばした。あくびを噛み殺しながら、帰り支度をして立ち上がり、残っている人たちに挨拶をして研究所をあとにする。

外はもうすっかり暗くなっていた。

濃紺の空に数多の星がきらきらと瞬いている。夜遅くまで仕事をした帰り道、新鮮な空気を吸い込みながら星空を眺めると、体も心も少しだけリフレッシュできる。ターニャはこのひとときが好きだった。

だが、今日は、それを楽しむ余裕はなさそうである。

もうすぐ深夜といってもいい時間のせいか、だいぶ冷え込んでおり、ブラウスに薄手のジャケットという格好では寒さが身に沁みるのだ。ここまで遅くなるとは思わず、コートを持ってこなかったのだが、ターニャはその判断を後悔していた。

小さく身震いして足早に帰路につこうとした、そのとき――。

「随分と卑怯な手を使ってくれたな」

「レオナルド……っ！」

木の陰からぬっと姿を現したレオナルドに驚き、ターニャは息を呑んで後ずさった。すぐさま彼はその間を詰めると、少し怒ったような顔で、逃げるように視線を逸らしたターニャをじっと見下ろす。

「二度も同じ手が通用すると思ったのか」

「……………そうよ」

ターニャはぽつりと言葉を落とすと、キッと強い眼差しで顔を上げる。

「私はこういう愚かで卑怯で馬鹿な人間なの。あなたの思っているような人間じゃないの。落胆した？ 軽蔑した？ 嫌いになればいいじゃない。早く愛想つかしなさいよ！」

感情のまま早口で捲し立てたが、レオナルドはまともに取り合うことなく、呆れたように小さく溜息をついた。

「おまえ、本当に意地っ張りだな」

「あなたこそどこまでしつこいのよ！」

「おまえが素直にならないからだ」

「素直に嫌だって言ってるでしょう？」

いつもと同じ言い合いの繰り返し。どうしてわかってくれないのだろうと苛立ちが募る。それはレオナルドも同じなのかもしれない。一瞬、苦々しく顔をしかめたが、それでもすぐに平静を装うと、じっとターニャを見つめて落ち着いた口調で続ける。

「おまえのことだ。どうせユールベルのことを気にしているんだろう。だけどユールベルとはとっくに終わってる。おまえが遠慮することなんて何もない」

「お、終わってるからいいってもんじゃないわよ！」

ターニャは必死に言い返した。

レオナルドはうんざりしたように反論する。

「俺が振ったのならともかく、俺があいつに振られたんだぞ。おまけにあいつはあの先生と仲良くやってるんだろう？ いったいどこに遠慮する要素があるんだよ」

「それでも、私はユールベルの友達だから……きっとあの子は傷ついちゃう……きっと裏切られたような気持ちになると思う。あなただってユールベルを傷つけたくはないでしょう？」

それは今まで口にしなかった本音だった。ユールベルは自分を見捨てられることを何よりも怖れている。だから、今まで自分を好きだと言っていたレオナルドが、他の人、それも友人と付き合いだしたとなれば、理性ではともかく、感情的な面では見捨てられたと感じてしまうに違いない。

しかし、それでもレオナルドは引かなかった。

「そんな納得できない理由で、好きな女を諦めるつもりはない」

真剣にそう言うと、さらに間を詰める。ターニャはその距離の近さに驚き、後ずさりかけたが、レオナルドは手首を掴んでそれを引き留めた。

「俺が諦めるのは、本気でおまえに嫌われたときだけだ」

「嫌いよ！」

ターニャはカッとして間髪入れずに叫んだ。その瞬間、急に目頭が熱くなり、彼の姿が大きくぼやけて見えた。そんな自分に混乱し、やけになって大声を張り上げる。

「あなたみたいなわからずや大っ嫌いなんだから！！」

「……俺には好きって言ってるように聞こえるけどな」

「はあっ？！！」

レオナルドはどこまでも自己中心的だった。だが、その声にはどこことなく寂しさが漂っているように感じられた。少し冷静さを取り戻したターニャの胸に、理由のわからない罪悪感が広がる。

「いい加減に素直になれよ。無理をしていたら苦しいだろう。俺も……きつい」

ふわり、と背中をあたたかいものが覆い、ターニャは驚いて顔を上げた。それはレオナルドのジャケットだった。彼が自分の着ていたものを掛けてくれたのである。彼の体温の残るそのジャケットに、ターニャの身体はすっぽりと包まれた。

「不格好だが、こんな時間だ、誰も見ないだろう」

「レオナルド……」

ターニャは戸惑いながら目を泳がせる。心臓を驚掴みにされたように苦しい。彼を拒絶するつもりなら借りるべきではないのかもしれない。だが、彼の厚意を踏みにじるようなことは言えなかった。肝心なときに強気になれない自分に歯痒さを感じた、そのとき――。

「もしも本当に俺のことが嫌いだったら、そのジャケットは返さずに焼き捨てる」

「えっ……」

「おまえがそこまでするなら、俺もキッパリと諦めてやる」

レオナルドは真剣な面持ちで言った。そして、軽く右手を上げながらぐるりと背を向け、シャツ一枚という見るからに寒そうな格好のまま、片手をポケットに突っ込んで帰っていく。ターニャは何も声を掛けることができず、闇夜にほのかに浮かぶ白い背中をただ呆然と見送った。



焼き捨てるなんて出来るわけじゃない——。

狭いアパートに帰ったターニャは、ハンガーに掛けたジャケットを見つめながら、膝を抱えて心の中で毒づいた。レオナルドの貸してくれたそのジャケットは、生地も仕立ても良く、明らかに高そうなものである。貧乏だった自分がそれを焼き捨てるには勇気がいる。

彼の勝手な押しつけに腹が立って仕方がなかった。

なのに、あのときの彼のことを思い出すと胸がキュッと締めつけられ、顔も熱くなる。その感情の正体に、ターニャ自身もうっすらと気づきかけていた。それでも、ユールベルのことを思うと、受け入れるわけにはいかない。しかし、彼の言い分ももっともであり、間違っていない。

思考は堂々巡りして結論に辿り着けない。

灯りを落とした暗い部屋の中で、抱えた膝に顔を埋める。答えを出さなければいけないことはわかっている。けれど、一晩中考えても、何一つ決断は下せなかった。

翌日、レオナルドは姿を見せなかった。

その翌日も、翌々日も、ターニャの周辺は平和すぎるくらいに平和だった。彼がしつこくつきまとう以前、つまり、ほんの数週間前までの生活である。これが自分が望んだ結果なのだ。にもかかわらず、心に大きな穴が空いたような寂しさを感じた。

愛想つかされたのかな、私——。

嘘をついて逃げようとしたうえ、嫌いだの大嫌いだの言ったのだ。愛想を尽かされるのも当然のことだろう。最後の去り際に見た、彼のつらそうな顔が脳裏によみがえり、胸がズクリと疼く。それでも、ユールベルのことを思えばこれで良かったのだと、何度も自分に言い聞かせた。

「4日ぶりだな」

ターニャが仕事を終えてアパートへ帰ってくると、レオナルドは門の横にもたれかかって待ち構えていた。組んでいた腕をほどき、軽く右手を上げて一歩前に出る。

ターニャはビクリとして半歩下がると、訝しげに眉をひそめた。

「どうして私の住んでるところを知ってるのよ」

「おまえが教えてくれたんだぞ」

レオナルドはポケットから取り出した小さな紙片を掲げる。それは、以前、ターニャが渡した名刺だった。裏には自宅の連絡先を書いた記憶がある。もう1年以上前のことであり、今の今まですっかり忘れていた。

「……諦めたんじゃないの？」

「俺の言ったことを忘れたのか？ 本気で嫌われない限り、諦めるつもりはない」

じゃあ、なんで……と言いかけて、ターニャはその言葉を呑み込む。しかし、表情には出ていたのだろう。レオナルドは少し視線を逸らし、柔らかい前髪を掻き上げながら、微かに頬を染めてぶっきらぼうに説明する。

「ずっと風邪をひいて寝込んでいたんだ。何度も抜け出して行こうとしたんだが、母親に引きずり戻されてベッドに縛りつけられてな」

「もしかして、その風邪って……」

あの日の夜はかなり冷え込んでいた。そんなところでコートも着ずに何時間も待ったうえ、ターニャにジャケットを貸してシャツ一枚で帰ったのだ。風邪をひいても仕方のない状況である。

「ああ、俺が勝手にやったことだ。おまえが気にすることはない」

「気になんてしないわよ」

誇らしげに胸を張るレオナルドに、ターニャは呆れたような眼差しを送る。

「どうしようもないバカだなんて思っただけ。バカなのに風邪をひくなんて、本当に何の取り柄もないじゃない」

「おまえな……」

反論のしようがなかったのか、レオナルドは低い声でそれだけ言うと、額を押さえて小さく溜息をついた。真新しいジャケットの腕に固く皺が走る。それを目にしたターニャは、あることを思い出し、しばらく思考を巡らせてから静かに切り出す。

「少しここで待っててくれる？」

「……ああ。だが、逃げるなよ」

「そんなつもりはないわ」

訝しげに念を押したレオナルドに、ターニャは冷たく答えると、アパートの階段を小走りで駆け上がっていった。

「はい」

アパートから出てきたターニャは、待たせていたレオナルドに、口の部分を折り返した紙袋をそっけなく手渡した。レオナルドは不思議そうな顔で受け取り、顔の位置まで持ち上げてじっと眺める。

「何だこれ？俺へのプレゼントか？」

「あなたのジャケットの燃えかすよ」

「何っ?!」

レオナルドは焦って紙袋の口をバツと開き、顔を突っ込まんばかりに中を覗き込んだ。

「燃えてない……よな？」

そう言いながら折り畳まれたジャケットをそろりと取り出し、表を眺めたり裏返しにしたりして確認する。しかし、どこも燃えてなどいない。

結局、ターニャは燃やすことができなかったのだ。

渡すものだけ渡したあと、素知らぬ顔でこっそり帰ろうとしたターニャを、レオナルドは手首を掴んで引き留める。ニツ、と口の端が吊り上がった。

「ようやく俺を好きだと認めたな」

ターニャはカッと顔を真っ赤にしてあたふたとする。

「べっ、弁償しろって言われたら困るから！だから燃やさなかつただけよ!!」

「この期に及んでまだそんな意地を張るのか。まあそんなところも可愛いけどな」

「年下のくせに、年上に向かって可愛いとか言わないでっ！」

突然、レオナルドは真剣な表情になると、ターニャの両方の手首を掴んで壁に押しつけ、ぐいと顔を近づけた。鮮やかな青い瞳で、じっと心の奥底を見透かすように覗き込む。ターニャはますます自分が熱を帯びていくのを感じた。

「なっ、何よ……」

「おまえが好きだ」

まっすぐな言葉と眼差しに、ターニャの心臓はドキンと跳ねた。目を見開いたまま動きが止まる。その一瞬の際に、レオナルドは掠めるようにターニャの唇に口づけた。

な、な、な……。

「何するのよっ！ は、初めてだったのにっ！！」

ターニャはあまりのことにパニックになり、ゆでだこのように耳まで真っ赤にして、わけもわからずぼろぼろと涙を流した。手首を掴まれたままで、頬を伝う涙を拭うこともできず、浅くしゃくり上げながら震える口を開く。

「い、いつか素敵な人とロマンチックになって、ずっとずっと夢見てたのに……！」

「それならいま叶っただろう」

「どこがよ、バカーーっ！！」

しかし、レオナルドはその暴言を受け流してニヤリと笑う。

「そうか、初めてだったのか……これから楽しみだな」

「なっ……バカっ！ 変態！！ 最低っ！！！」

そう喚き立てながら抵抗するターニャを、レオナルドはものともせずぎゅっと抱きしめた。ターニャは泣きながら彼の背中を叩いていたが、次第にその手は弱まっていく。やがて完全に動きを止めると、レオナルドの胸に顔を埋めて小さく鼻をすすった。

本当にどうしようもないくらい最低……あなたも……私も——。

レオナルドの背中にまわした手に、ターニャは戸惑いながらもそっと力をこめた。

ふー……。

手持ちの仕事が一段落したジョシュは、細く息を吐いて椅子にもたれかかった。背筋を伸ばしながら、何とはなしに奥へ続く通路に目を向ける。見えるわけでないことはわかっていたが、それでもいつも無意識に目を向けてしまうのだ。

あいつ、どうしてるかな——。

僅かに眉を寄せながら再び溜息をつく、目を閉じて彼女の姿を思い浮かべた。

アカデミーを卒業したユールベルが、正式に魔導科学技術研究所に勤務するようになったのが約一ヶ月前のことだ。同時に配属先が伝えられたが、それは誰もが驚かざるをえない異例のものだった。

彼女の配属先は、レベルC 特別研究チーム——。

研修のときと違うチームに配属されることは通例であり、ジョシュも覚悟はしていたが、異例なのは彼女が配属されたそのチームである。研究所でも限られたものしか入室が許可されていない、立入制限区域で研究を行う特別チームなのだ。そこでは機密事項を含む高度な研究が行われていることもあり、相応の実績を上げ、なおかつ身辺がクリーンであると判断された所員のみが配属される。新人が配属されることなど通常はありえない。誰が考えてもラグランジェ家の力が働いているとしか思えなかった。

おそらくはサイファの仕業だろう。

しかし、不思議と怒りは湧いてこなかった。表沙汰にはなっていないものの、研修のときに、彼女はラグランジェの名のために襲われかけたことがあった。今回の配属は、二度とそのような目に遭わせないための配慮なのだろう、とジョシュは好意的に解釈していた。完璧ではないにしろ、一般フロアと比べて安全であることには違いない。セキュリティはしっかりしているし、何より、特別チームにはレイモンドのような愚か者はいないはずである。

問題は、ジョシュがそこに立ち入る権限を持っていないことだ。

当然のように仕事上の接点もなくなり、一ヶ月も経つというのに、彼女とはまだ言葉を交わしたことがすらない。何度か廊下を通るのを見かけたことはあるが、勤務中では、用もないのに追いかけて声をかけることなど出来はしない。もっとも、立入制限区域への入室を許可されているサイラスは、勤務中にときどき用もなく彼女の様子を見に行っているようだが……。

せめて食堂で会えないかと、行くたびに彼女の姿を探しているが、一度も見つけたことはなかった。食堂ではなく自席で食べているのかもしれない。特別研究チームにはそうする人が多いという話を聞いたことがある。彼女もまわりに合わせている可能性はあるだろう。

昼休憩の時間になり、ジョシュはひとりで食堂に向かった。スパゲティとサラダの載ったプレートを持ち、あたりをぐるりと見まわして、残り少ない空席を見つけようとする。同時にユールベルの姿も探す、それは習慣のようなものであり、もはやほとんど期待はしていなかった。

しかし、その日——ついに見つけた。

一瞬、我が目を疑ったが、見間違いであるはずがない。顔はよく見えないものの、腰近くまである緩いウェーブを描いた金の髪も、後頭部で結ばれた白い包帯も、間違いなく彼女のものである。ジョシュはそのテーブルの前に立つと、少し緊張しながら、窓際にひとりで座っている彼女に声を掛けた。

「ここ、いいか？」

ユールベルは驚いたように顔を上げた。呆然としながらも、小さくこくりと頷く。

ジョシュは冷静を装って席に着いた。

「元気でやってるか？」

「ええ」

「そうか、良かった」

素っ気ないくらいの短い会話を交わすと、ジョシュはフォークを手に取り、黙々とスパゲティを食べ始めた。しかし、半分ほど口にしたところで手を止めると、そっと彼女に目を向けて尋ねる。

「おまえ、いつも姿を見ないけど、食堂には来てないのか？」

「食堂で食べているけれど、お昼休み、ずれることが多いから」

その理由にジョシュは納得した。基本的に、特別研究チームというのは、研究のこととなると寝食を忘れるような人間が多い。彼らにとっては昼休憩など重要ではないのだろう。

「大変だな」

「食堂が空いていて助かっているわ」

「それは言えるかもな」

ジョシュは小さく笑いながら言った。つられるように、彼女の顔も僅かに綻ぶ。それを見たジョシュの顔はほんのりと熱を帯びた。彼女に悟られないようにうつむくと、黙々と冷たいサラダを口に運ぶ。

「ごめんなさい」

「えっ？」

不意に落とされた小さな謝罪に、ジョシュは驚いて顔を上げた。そこには、何かをこらえるような、彼女の沈鬱な表情があった。

「新人が特別研究チームなんて、異例だって聞いたわ」

「そんなこと俺は気にしてない。おまえも気にするな。謝る必要なんてないんだ」

彼女がこういうことを気にするようになったのは、おそらく、研修のときにジョシュが冷たく当たったせいである。その理由がラグランジェ家にあることを知り、彼女は自分を責めるようになったのだ。

「おじさまには抗議したけれど、聞き入れてもらえなかった」

「おまえを守るために必要だと思ってやったことなんだろう」

ジョシュは腹立たしくもサイファの肩を持つような発言をしてしまう。それだけ必死だった。しかし、その甲斐もなく、彼女はいまだに表情を曇らせたままうつむいていた。

「もしかして、誰かに何か言われたのか？」

眉をひそめたジョシュの問いに、ユールベルは小さく首を横に振った。

「みんな良くしてくれるわ」

「だったら一人で気に病むな。おまえは自分に出来ることを精一杯やればいい」

それは自身のことを棚に上げた発言だった。いつも一人で後ろ向きなことばかり考え、自分に嫌気が差し、他人に当たり散らしている。そんな人間が言ったところで、説得力などあるはずもない――。

しかし、ユールベルはこくりと真摯に頷いた。

そのことで、ジョシュは逆に自分の方が励まされたように感じた。単なる自己満足かもしれないが、彼女の力になれたことが嬉しかったのかもしれない。自分が認められたように思えたのかもしれない。ほっと安堵の息をつく、再びスパゲティを口に運び始めた。

カタン――。

彼女より先に食べ終わったジョシュは、どうしようかと思案しながらフォークを置いた。

このまま席を立ててさよならしては、今度いつ会えるのかわからない。この調子だと数ヶ月後ということも十分に考えられる。それに、今日のように運良く会えたとしても、こんな短い会話だけでは、自分と彼女の関係は何ひとつ変わりはないのだ。だとしたら――。

「今度の休日、どこか行かないか？」

「……えっ？」

意を決して切り出したジョシュの耳に、明らかに戸惑いを含んだ声が届いた。彼女は訝しげに言葉を繋ぐ。

「どうして？」

「どうしてって……」

まさか理由を訊かれるとは思わず、今度はジョシュが戸惑った。しかし、考えてみれば随分と唐突な話であり、不審に思われても当然のことだろう。もしかすると、レイモンドとのことがあったので、この手の話には警戒しているのかもしれない。

俺は、あいつとは違う――。

ラグランジェの名前などに興味はない。そんなもののために彼女に近づこうとしているわけではない。ジョシュは斜め下に視線を落とすと、テーブルに載せた手をギュッと握りしめた。

「好きだからだよ」

その言葉が終わるか終わらないかのうちに、プレートを持って席を立ち、彼女の視線から逃れるように背を向ける。

「今度の休日、朝9時に研究所の前で待ってる」

ぶっきらぼうな口調で一方向的にそう告げると、彼女の返事を聞かないまま、返却口に向かってその場から足早に立ち去った。彼女がどんな顔をしているのか気になったものの、それを知るのが怖くて、食堂を出るまで後ろを振り返ることも出来なかった。

「朝9時って何だよ……」

ジョシュは研究所の前で塀に寄り掛かりながら、大きく溜息をついてうなだれた。

今度の休日、朝9時に——。

とっさにそうやってしまったものの、遠出するわけでもないのに、朝9時に待ち合わせなどどう考えても早すぎる。子供でもこんなに早く遊びに行きはしない。住宅街から離れた場所柄も関係しているのだろうが、実際、まわりにはほとんど人影もなく閑散としていた。

それ以前に、一方的に約束を押し付けたことが一番の問題である。いや、断る隙すら与えなかったのだから、そもそも約束にさえならないのだ。臆病ゆえにそんな態度をとってしまったのだが、彼女の目にはさぞや傲慢に映ったことだろう。もしかすると、レイモンドとたいして変わらない男だと思われたかもしれない——そのおぞましい想像を否定するように、必死にブンブンと首を横に振った。

腕時計に目を落とす。もう間もなく9時である。

ジョシュは青空を大きく仰ぎ見て、細く長く溜息をついた。彼女は来ないかもしれない。来なくても当然だと思う。それでも一応10時くらいまでは待ってみよう、そう考えたそのとき——。

「ごめんなさい、遅くなって」

ユールベルが駆け足でやってきた。少し息を切らせながらそう言う。薄手の白いワンピースがひらひらと揺れて目に眩しい。

「……来たのか？」

「どういう意味？」

「あ、いや……」

ユールベルは怪訝に小首を傾げて、ジョシュをじっと見つめている。来いと言われて来たのに、来たのかなどと問われては、確かに不安にもなるだろう。慌てて、ジョシュは少々ぎこちない笑顔で取り繕った。

しかし——。

彼女は嫌ではなかったのだろうか。嫌だったが仕方なく来たのだろうか。好きだからと言ったことに対しては、どう思っているのだろうか。次々と疑問が頭に浮かぶが、どれも口には出せなかった。

「それで、どこへ行くの？」

「……え？」

ジョシュは大きく瞬きをして、口もとを引きつらせたまま硬直した。ユールベルを誘うことで頭がいっぱいになってしまい、肝心なその後について何も考えていなかったことに、彼はこのときになってようやく気がついた。

「悪い、こんなところしか思いつかなくて……店はまだ開いてないし……」

「人の多いところは苦手だから、こういうところの方がいいわ」

そこは公園だった。広々とした芝生の奥に、大きな湖が続いている。まだ午前中のためかあまり人は多くなく、ランニングしている人、ボール遊びをしている人、散歩をしている人、木陰のベンチに座って読書をしている人が、ちらほらと目につく程度である。

二人は木陰の下に、ジョシュの上着をひいて座っていた。

ユールベルは軽く膝を抱え、ぼんやりと青い空を見上げている。緩やかなウェーブを描いた金の髪が小さく揺れ、後頭部で結ばれた白い包帯もひらひらと舞う。その横顔を見つめながら、ジョシュは出来るだけ何気ない口調で切り出した。

「卒業おめでとう」

ユールベルはふわりと髪を揺らして振り向いた。半開きの口できょとんとしたあと、少し気恥ずかしそうにうつむき、小さな声で「ありがとう」と応じる。

「首席卒業だって？ なんか代表で挨拶したってサイラスから聞いた」

「私、ああいうのは苦手なのに、辞退は許してもらえなかったから……」

彼女はますます深くうつむくと、膝を引き寄せて顔を埋める。その照れたような仕草が可愛くて、ジョシュは小さく笑みをこぼした。

「サイラスとはよく会っているのか？」

「今はときどき様子を見に来てくれるだけ」

ジョシュもそれほど頻繁にサイラスと会っているわけではないが、彼はそのたびにユールベルの話をしていた。その内容から察するに、彼女がアカデミーを卒業するまでは、毎日のように会っていたようだ。今は「ときどき」ということらしいが、週に2、3回は顔を合わせているのだろう。彼の話だけが今の彼女を知る唯一の手掛かりであり、その点ではとてもありがたく感じていた。しかし、同時に、自分自身に対する不甲斐なさも感じずにはいられなかった。

サイラスには水をあけられるばかりだな――。

彼は立入制限区域に入る許可を持っており、ときどき特別研究チームの手伝いをしているようだった。今はアカデミーの教師がメインであるが、約束の4年を終えれば、おそらくは正式に特別研究チームへ配属されるのだろう。いまだに下っ端の自分とは雲泥の差である。

そんな人間には、ユールベルと会う資格はない。

まるで現実にそう諭されているかのようだった。しかし、今日彼女に会って、諦めたくないという思いをいっそう強くした。勝手に卑屈になって身を引くなんてことはしたくない。いや、もうしないと決めている。だからといって焦ることも禁物だ。レイモンドの件で傷ついているだろう彼女を、意図せず傷つけてしまう結果になりかねないのだから――。

「やあ、ジョシュにユールベルじゃないか。こんなところで何をやってるんだ」

ビクリとして振り返ったジョシュは、その声の主を目にし、思いきり顔をこわばらせて絶句した。ややあって我にかえると、慌てて立ち上がり、ユールベルをかぼうように彼の前に立ちふさがる。

「レイモンド……おまえこそ、どういうつもりだ」

「この格好を見たらわかるだろう。ランニングだよ。研究ばかりしているひよろっこいおまえと



は違って、俺はこの体をつくるために相応の努力しているのさ」

確かに彼はランニングシャツに短パンという、いかにもな格好をしていた。あまり気にしたことなかったが、剥き出しになった彼の腕や脚は、適度に筋肉がついていてたくましく見える。だからといって、彼の言うことを鵜呑みにはできない。

「そんなこと言って、何かたくらんでるんじゃないだろうな」

「悪いが、今は他にターゲットがいるんでね」

そう言って、レイモンドはフツと笑って口もとを斜めにする。

「ジョシュ、研究所での君の態度は忘れていない。覚悟しておけよ。結果的にラグランジェ本家の次期当主に唾を吐いたことになるんだからな」

その意味が掴めず、ジョシュは眉をひそめる。しかし、ユールベルにはすぐにわかったようで、ジョシュの後ろに座ったまま、じっと上目遣いにレイモンドを睨んでいた。

「あなた……、本当におじさまに殺されるわよ」

「自由恋愛を妨害する権利が彼にあるとでも？」

「あなたは自由でも、相手にとっては不自由だわ」

「君のときのような強引な手を使うつもりはないさ。何せ相手は子供だからな。今度はじっくりと時間をかけて口説いていくつもりだ」

二人の会話を聞いているうちに、ジョシュにも話が見えてきた。

どうやらレイモンドは、ラグランジェ家当主——すなわちサイファ——の娘と結婚して、自分が次期当主に収まるつもりらしい。サイファに悪感情しか持たれていないであろう彼が、ラグランジェ家に入ることなど、ましてや次期当主として迎えられるなど、到底あり得る話ではないと誰もが思うはずだ。しかし、彼がそのつもりで行動を起こすのなら、ターゲットの娘が無事で済むかが心配である。強引な手を使わないという言葉信じていいかわからないし、もしそうだとすると、子供ならば表面的な優しさにコロリと騙される可能性も高いだろう——とジョシュは思ったのだが、ユールベルの考えは違ったようだ。確信したような強い眼差しで断言する。

「彼女は私ほど愚かじゃない。絶対にあなたの思いどおりになんかならないわ」

「ふむ……なるほど……」

レイモンドはゆっくりと右手で顎を掴んで考え込むと、やがて一人納得したように頷き、真面目な面持ちでユールベルを見つめて自分の胸に手を当てた。

「俺にも情はある。君が泣いて謝るのなら、当主の座は諦めて君と結婚してやってもいい」

何を勘違いしたのか、それともわざとなのか、上から目線でありえないくらい勝手なことを言う。ユールベルは何とも言えない微妙な表情で言葉を失っていた。彼の身勝手さをよく知っているジョシュも、さすがに開いた口がふさがらない。

「俺としてもロリコン趣味はないんだ。あんな実年齢以上に子供っぽいガキなんて、当主の娘という肩書きさえなければ相手をする気も起きないさ。その点、君はいろいろと楽しませてくれそうだからな」

レイモンドはそう言うと、いやらしく片方の口角を吊り上げ、舐め回すようなねっととした視線をユールベルに絡ませる。まるで白いワンピースの中の肢体を、その目に映しているかのよ

うだった。彼女はぞくりと身を震わせると、自分の腕を抱え、その視線から逃れるように大きく顔を背けてうつむいた。緩やかなウェーブを描いた髪がはらりと落ち、彼女の表情を隠す。

「やめろ！！」

ジョシュはあらためて二人の間に割り込むと、両腕を広げ、レイモンドの視界から必死に彼女を隠そうとした。そして、ありったけの嫌悪感を瞳に込め、斬りつけるように激しく睨む。腹立たしいと思ったことは数えきれないほどあるが、ここまで誰かを憎いと思ったのは初めてかもしれない。いっそサイファに殺されてしまえとさえ思った。

しかし、レイモンドは痛くも痒くもないようで、小馬鹿にしたように鼻先でフツと笑う。

「相変わらず姫を護る騎士か？ どうせそれ以上の進展もないんだろう」

「……だったら何だ」

背後のユールベルを気にしながら、ジョシュは小さな声でぼそりと言う。

そんなジョシュを見て、嫌がらせのように、レイモンドはよりいっそう声を大きく響かせる。

「残念だったなあ？ せっかくユールベルを抱かせてやる約束をしたのに、俺がこんなことになったせいで約束がおじゃんになって」

ジョシュは目を見開き、息をのんで顔を真っ赤にした。

「やっ……約束なんてしてないだろう！ おまえが勝手に……！」

「ま、せいぜい一人で頑張ることだな。アドバイスくらいならしてやるよ」

「うるさいっ！！」

ジョシュがいきり立てば立つほど、レイモンドは愉快そうに笑う。その不快な笑い声は、広い空に高らかに響いた。ひとしきり笑うと、ジョシュの肩を軽く押しのけ、腰を屈めてユールベルを覗き込みながら白い歯を見せる。

「ユールベル、その気になったら王宮を訪ねてきてくれ。間違っても、こんな出世の見込みもないような男なんて相手にするなよ」

ジョシュが反撃して押し返そうとすると、レイモンドはひょいと身軽に避けて数歩後退する。そして、ランニングのポーズをとって足踏みを始めると、じゃあなと右手を上げて、何事もなかったかのように足どり軽く湖の方へ走っていった。

ジョシュはおずおずとユールベルに振り返った。何も言わずにじっとジョシュを見上げている、感情の窺えないその瞳に怯えながら、誤解を解こうとあたふたと両手を動かしながら口を開く。

「あ……あのな、レイモンドが言った約束とか何とか、あれ、俺、そんな約束なんてしてないから。あいつが一方向的に言ってきただけで、俺はそんなつもりなくて……」

必死になればなるほど、出来の悪い言い訳のようになっていく。そのみっともなさに耐えきれなくなり、思わず頭を抱えて彼女に背を向けた。

「私は……」

遠慮がちに切り出された彼女の声に、ジョシュの鼓動は大きくドクンと打った。どんな言葉をぶつけられるのか怖かった。背筋が凍り付くような冷たさと、頭から熱湯をかぶったような熱さ

を同時に感じ、何も考えられないほどに目眩がした。しかし――。

「私は、ジョシュのことを信じているから」

彼女は静かな声で噛みしめるようにそう言った。驚いてジョシュは振り向く。

「信じて……くれるのか？」

「あなたはそんなことを望む人じゃないもの」

「……………」

深い森の湖のような瞳で見つめながら、まっすぐそう言ってくれる彼女に、ジョシュは二の句が継げなかった。眉を寄せてうつむき、額に右手を押し当てる。一度は忘れようとした罪悪感が、急に胸の内を支配して、息が出来ないほどに苦しくなる。

「どうしたの？」

「……夢を、ときどき見るんだ」

話が見えないユールベルは、地面に手をついて身を乗り出し、不思議そうに下からじっと覗き込む。しかし、ジョシュは彼女を見ることができず、顔をそらして、額を押さえていた手で両目を覆った。ずっと隠してきたことを、あふれくる感情にのせて吐露する。

「場面はあのときの資料室で……だけど、ユールベルに跨がっているのは、レイモンドじゃなく俺で……」

「夢、でしょう？」

そう、現実ではなく夢である。だけど、それは自分自身が見せているもので――。

「何度も見るってことは、どこか俺の願望が入ってるのかもしれない」

「……もしかして、以前、私を避けていたのって、これが原因なの？」

訥々と紡がれる疑問に、ジョシュは顔を隠したまま小さく頷いた。その夢を見るようになってからは、彼女への罪悪感と、自分に対する嫌悪感とで、まともに彼女と接することが出来なくなった。いや、彼女と接していい人間ではないように感じたのだ。

「そんなことだったなんて……」

「そんなことって、おまえ……」

半ば呆れたように溜息まじりに言われ、思わずジョシュは目を覆っていた手を外し、困惑ぎみに彼女を見下ろして言い返す。しかし彼女は淡々と続ける。

「夢を見ることと実際に行動を起こすことは違うわ」

「それは、そうだけど……」

ジョシュは複雑な表情で眉を寄せた。確かに現実と夢とでは重みが違うが、夢だからといって気にならないわけではないだろう。きっと嫌な思いをしているに違いない。

「言わなければわからなかったのに」

「……嫌な話を聞かせて悪かった」

ジョシュは彼女の前に膝を折って座り、うなだれるように頭を下げる。ユールベルは無表情のまま首を横に振った。

「俺を、許してくれるか？」

「あなたは何も悪いことなんてしていない」

それが本心かどうかはわからない。しかし、彼女が自分のことを否定しないのならば、勝手に先回りして自ら身を引くようなことはしたくないし、してはならないと思う。

だから、俺は――。

芝生のうえで握りしめた手が汗ばんできた。ぐっと力を込めて握り直す。そして、しばらく考えを巡らせると、少し顔を上げ、ごくりと唾を飲み込んでから口を開く。

「じゃあ、来週も、会ってくれるか……？」

ユールベルは瞬きをしてきょとんとした。そして小さくごくりと頷く。相変わらずの無表情だったが、ジョシュがほっとして緊張を解くと、彼女の表情も少し緩んだように――わずかに微笑んだように見えた。

「一人でウチに乗り込んでくるなんて、おにいさん結構いい度胸してるよね」

「度胸って何だよ」

「姉さんとのことを僕に追及されるって思わなかった？」

「……………」

初めて彼女と二人で休日を過ごしてから3週間、ジョシュは毎週ユールベルと会っていた。今までは公園など外で会っていたのだが、今日は彼女の家で会う約束をして、ここへやって来たのである。もちろん彼女の弟がいることは承知の上だ。むしろ、二人きりだったら彼女の家にかかることはなかったに違いない。彼女も警戒するだろうし、自分も遠慮しただろうと思う。

彼女の思考は相変わらずわからないままだ。

なぜ自分と会ってくれるのだろう。自分が好きだと言ったことに対してどう感じているのだろう。自分のことをどう思っているのだろう——。聞きたいことは山ほどあったが、実際に聞くことは躊躇われた。聞いた瞬間にすべてが失われてしまうような、そんな気がして怖かったのだ。

ただ、少なくとも嫌われてはいないだろうという確信はあった。今はそれで十分である。レモンドとのことが心の傷になっているかもしれない彼女には、慎重すぎるくらいに進めるのがちょうどいいはずだ。焦らずに少しずつ彼女との距離を縮めていけたらいい。そして、いずれは——。

「姉さんと付き合ってるの？ その辺、イマイチはっきりしないんだけど」

アンソニーはソファに座ったまま、膝に腕をのせて身を乗り出し、眉をひそめながらジョシュに尋ねる。

付き合うというのが恋人になると同義ならば、現時点での答えは否としかいいようがない。彼女の気持ちは聞いていないし、毎週会っているのは確かだが、ただ並んで歩くだけで手さえ繋ぐことはないのだから。

ジョシュは考え込んだまま返事をしなかったが、微妙に曇った表情を見て、アンソニーはだいたいのところを察したようだった。面倒くさそうに溜息をついて上体を起こす。

「ほんと焦れたくて仕方ないんだけど。子供の恋愛じゃあるまいし何やってんのかなあ。おにいさんもう30近いんでしょう？ いい大人っていうか、そろそろおじさんだよ？」

「おまえには関係ないだろう」

「相手が姉さんじゃなければね」

アンソニーは頭の後ろで手を組みながら言った。

「僕としてはさ、先生一押しだったんだよね。姉さんには、先生みたいな優しくて穏やかな人がいいんじゃないかなって。まあ、先生にその気がなければ仕方ないんだけどさ。どうなんだろう？ 先生って姉さんのこと好きじゃないのかなあ？」

ジョシュにとって、それはあまり考えたくないことだった。もしも、サイラスがユールベルに好意を寄せているとしたら、そして行動を起こしたとしたら、自分ではとても敵わないだろうと思う。そして、サイラスの方が彼女を幸せにできるのではないかと――。

「ねえ、先生に聞いてきてくれない？」

「自分で聞いてくればいだろう」

不安からか、思わずそんな突き放すような言い方をしてしまう。

アンソニーは体を起こして前屈みになると、もの言いたげにじっとジョシュを見つめた。

「おにいさんは姉さんのこと好きなんだよね？」

「……ああ」

あまりにも直球な質問にいささか動揺しながらも、ジョシュは正直に答えた。そのことはユールベル本人にも言ってあるし、アンソニーもとっくにわかっているようなので、今さら隠す必要はないだろうと思う。

「それで、どうしたいわけ？」

「どう、って言われても……」

「念のため言っておくけど、たいして本気でもないのに思わせぶりな態度をとったり、ちょっかいを出したりして、姉さんを傷つけることだけはやめてよね。そんなことをしたら、僕、絶対におにいさんのこと許さないから」

「俺は、本気だ」

本気だからこそ、彼女に対してこれほど慎重になっているのだ。決して思わせぶりな態度をとっているつもりはない。しかし、アンソニーはまだ信用していないのか、険しい表情でぐいっと身を乗り出して問い詰める。

「全部まるごと受け止める覚悟はあるの？」

「……ああ」

彼の迫力に気おされながらも、ジョシュは真剣な顔で頷く。にもかかわらず、アンソニーはソファにもたれかかって深く溜息をついた。僅かに顎を上げて、疑いの眼差しをジョシュに流す。

「本当にわかっているのかな……」

「何がだ？ どういうことだ？」

何か含みがありそうなアンソニーの言動に、ジョシュは眉をひそめた。

「ま、とりあえずおにいさんのこと信用しておく」

「あの、コーヒー……」

背後からのユールベルの声に、ジョシュはビクリと体を震わせた。アンソニーと話しているうちに、彼女が隣の台所にいることをすっかり忘れてしまっていた。二人とも声をひそめていなかったように思うので、もしかしたら会話を聞かれてしまったかもしれない。

ユールベルは無表情のまま、トレイにのせたコーヒーをテーブルの上に置いていく。

ジョシュは息を詰めたままその横顔を窺い、特に意識している様子はなさそうだとわかると、ほっと小さく安堵の息をついた。

「ねえ姉さん、おにいさんがね、姉さんのこと……」

「わーっ！！！」

アンソニーがニコニコしながらユールベルに話し始めると、ジョシュは血の気が引いて頭が真っ白になった。妨害するように大声を上げて、あたふたと両手を伸ばす。

「なに……？」

「い、いや……」

ビクリとしたユールベルを見て、ジョシュは我に返った。不安の拭えないまま再びアンソニーに目を向けると、彼は白い歯を見せて悪戯っぽく笑っていた。またからかわれたのだと脱力する。

それでも、本当にユールベルに言われてしまうよりはいいだろう。

後ろめたいことは何もないが、それはいつかあらためて自分から彼女に伝えるべきことであり、こんな軽い調子で暴露されるのだけは勘弁してほしいと思った。

ユールベルが淹れてくれたコーヒーを飲んで一息ついたあと、ジョシュは大きなガラス窓を開けて、コンクリートのベランダに出た。雲ひとつない鮮やかな青空から燦々と陽光が降り注ぎ、そのまぶしさに思わず目を細める。そして、あまり広くはないそこにしゃがみ、持ってきたビニール袋から中身をひとつずつ出して広げた。白いプランター、袋に入った土、肥料、スコップ、そして花の種である。

「何かと思ったら花壇だったんだ」

窓際にしゃがんで覗き込みながら、アンソニーが呆れたように言う。

「女の子と会うのに花束を持ってくる人はいても、花壇を持ってくるのはおにいさんくらいじゃない？」

「そうかもな。どっちも花なんだし悪くはないだろう」

正確には花壇でなく鉢植えであるが、些細なことであり、ジョシュはあえて訂正しなかった。両方の袖をまくり上げると、プランターに土と肥料を流し込み、黙々とスコップで整えていく。

「でも、もっと他にいいものがあると思うんだけど。初めてのプレゼントだよな？」

「私がお願いしたの」

ジョシュの代わりに、アンソニーの隣に立つユールベルが答えた。

そう、これは彼女が望んだことなのだ。別にジョシュの独断でプランターを抱えてきたわけではない。いくらなんでも、頼まれもしないのにこんなものを持ってきて押しつけるほどの図々しさは持ち合わせていなかった。

一通りプランターの土をならして準備を整え、種をまき始めると、アンソニーも面白がって手伝い始めた。

「おにいさんって何となく無趣味な人かと思ってたなあ」

「別にこれは趣味ってほどでもないけど……」

一人暮らしの部屋はあまりに味気なく、また人恋しさも手伝ってか、何とはなしにプランターで花を育てるようになってただけである。特に詳しいわけではない。ただ適当に種をまいて水をや

って草をむしると、それなりに花は咲いてくれた。花の種類にこだわりがないので、育てやすいものばかりを選んでいるからだろう。

先週、そういう話をユールベルにしたら、意外なことに、彼女は自分も育ててみたいと言った。これまで彼女が自分から何かをしたいということはほとんどなく、何に関心があるのかもわからなかったのが、少しでも彼女を知る手がかりを得られたことが言いようのないくらいに嬉しかった。

「適当に水をやってれば育つと思うけど、うまくいかなくても気にするなよ」

念のため、窓際に立っているユールベルにそう釘を刺す。ジョシュも仕事が忙しかったときに少し枯らしたことがあったが、それだけでけっこう落ち込んでしまった記憶がある。できればそんな思いを彼女にはさせたくはないが、生物である以上、絶対に駄目にしない方法などないこともわかっていた。

「適当って……？」

「俺もあんまりよくわかってないけど、土が乾いてきたらやればいいんじゃないかと……あ、やりすぎもよくないからな。様子を見て調整していけばいいと思う」

ユールベルは不安そうな面持ちながらもこくりと頷いた。

「おにいさん、どうせたびたび見に来るつもりなんだよね？」

アンソニーは「どうせ」に力を込めて皮肉っぽく言う。確かに、彼女に任せきりにするのではなく、ときどきは成長具合を確かめに来た方がいいかもしれない。しかし——ジョシュは彼の眼差しから逃れるように、プランターを見つめたまま目を細めた。

「それは……ユールベルが望むのなら……」

「私は、ジョシュさえ迷惑でなければ……」

呼応するように頭上から降ってきた彼女の声。

ジョシュはドキリとしてそこに立つ彼女を見上げた。いつものように感情の窺えない表情をしていたが、少し視線を外して目を泳がせたり、心持ち肩をすくめて後ろで手を組んだりして、どこか落ち着きなく感じられた。まるで、恥じらっているかのよう——。

それは勝手な解釈かもしれない。

しかし、来ることを許されたのは事実である。

ジョシュは柔らかくふっと表情を緩めると、行くよ、と小さいながらもはっきりとした声で言った。

ベランダに座るジョシュ、窓際にしゃがむアンソニー、その隣に立つユールベル——3人は、あたたかい日差しと緩やかなそよ風を感じながら、それぞれ無言でたたずんでいた。心地いい昼下がりが、眠気を運んでくる。ジョシュはあくびを噛み殺しながら、雲ひとつない穏やかな青空を見上げた。

「花が咲く頃にはどうなってるかなあ」

アンソニーはプランターを見つめながら、からかうような口調でなく、ぼんやりと独り言のようにそう言った。



ジョシュも、ユールベルも、何も答えなかった。

けれど、そこには気まずい空気はなく、ジョシュはうつむいたまま目を細めて、その近くで遠い未来のことをおぼろげに遠慮がちに思い描いた。

研究所の食堂で、ジョシュはいつものようにBセットを注文した。

ユールベルに会えるのではないかと期待して、このところジョシュは少し遅めに来るようになったのだが、あの転機となった出会い以降は、一度も食堂では見かけていない。彼女は正規の休憩時間より後になることが多いのだろう。それだけに、あのとき会えたことは運命のような気さえしていた。

少しだけ人波の引いた食堂をぐるりと見渡す。

おそらくいないだろうと思っていたが、その日は窓際に彼女が座っていたのを見つけた。緩やかなウェーブを描いた金の髪と、後頭部で結ばれた白い包帯——ジョシュの胸はそれだけで熱くなる。今にも走り出したい気持ちを抑えつつ、彼女の方へゆっくりと足を向けた。

しかしその瞬間、ある光景を目にして、とっさに近くの柱に身を隠した。

ユールベルの前にサイラスが座っていたのだ。

別に隠れる必要はなかった。研究所の食堂で一緒に昼食をとっているだけで、やましい現場でも何でもない。二人ともジョシュの知り合いであり、声を掛けて同席を求めればいいだけのこと、邪魔をしたくなければ黙って離れればすむだけのこと。なのに——。

ジョシュは柱の陰になった席に腰を下ろし、後ろめたさを感じつつも、二人からは見えないであろうその場所からこっそりと聞き耳を立てた。

「でも、そうはならないんじゃないか……」

「前提条件が違うんだよ。限りなく絶対零度に近い温度で反応させれば、理論上は上手くいくはずなんだけど、実際に実験をするのは難しそうだね。今の研究所の設備では無理だって言われたよ」

どうやら二人は研究の話をしているらしい。食事中までこんな話をしなくても、と思うものの、そういう会話ができる二人をジョシュはうらやましく思った。ジョシュは、サイラスとも、ユールベルとも、真面目に研究の話をしたことなどほとんどない。自分にそれだけの知識も能力もないからだろう。

しばらく研究の話が続いた。

ジョシュの手にはフォークが握られているものの、ただ握っているだけで、サラダの上で微かに揺れながらとどまっている。背後の二人が気になって、食事をするどころではなかった。

「ねえ、ユールベルって休日は何をしてるの？」

その質問にジョシュの心臓はドキリと跳ねる。

「別に……」

ユールベルはごまかすように口ごもった。ジョシュの名前は出てこない。ほっとしたような、残念なような、相対した気持ちがジョシュの心に渦巻いた。それでも、今はこれでいいのだと自分に言い聞かせる。

だが、話はこれで終わらなかった。

「じゃあさ、今度の休日、もし良かったらどこか遊びに行かない？」

「えっ……」

気楽なサイラスの言葉と、戸惑いを隠せないユールベルの声。そのとき二人がどんな表情をしているのか、気になって仕方なかったが、柱の陰から顔を出すなどという危険なことはいできない。ただフォークを握りしめたまま、奥歯を食いしばり、じっとどちらかの次の言葉を待つ。

「あ、別に無理しなくていいんだけど」

「そうじゃなくて、予定があるから……」

「そっか」

彼女とは次の休日也會う約束をしている。予定とはおそらくそのことだろう。サイラスの誘いより自分との約束を優先してくれたことに、ジョシュはほっと胸を撫で下ろした。が、それも一瞬のことである。

「じゃあ、その次の休日はどうかな？」

「ごめんなさい、その日も予定があるの……言い訳じゃなくて……」

ユールベルは申し訳なさそうに言う。

ジョシュはフォークの先を見つめて眉をひそめた。自分がユールベルと約束をしたのは次の休日だけである。いつも帰り際に次の約束を取り付けているのだが、その先の約束まではしたことがない。だから、彼女のその予定は、自分以外の誰かとの約束ということになる。もちろん、誰と休日を過ごしても彼女の自由なのだが――。

「そっか、じゃあ暇なときがあったら誘ってくれる？」

「ええ……」

サイラスの声は明るいまだだった。

ジョシュは口を引き結んで、フォークをサラダに突き刺した。二人が楽しそうにとりとめのない話を続けるのを聞きながら、身を隠したまま、音を立てないようにひっそりとサラダを口に運んだ。

次の休日――。

昼過ぎにユールベルと待ち合わせをして、公園を散歩したあと、彼女が希望したアイスクリーム屋へ向かった。彼女の方から行きたいことやしたいことを言ってきたのは初めてで、少しずつ打ち解けてきている証左かもしれないとジョシュの気持ちは弾んだ。

アイスクリーム屋の店内に座っている客は、ほとんどが若い女性だった。あちらこちらから楽しそうなお喋りが聞こえてくる。その雰囲気には少しばかり居心地の悪さがあったものの、目の前でアイスクリームを口に運ぶ彼女を見ていると、やはり来て良かったと思わざるを得ない。

「アイスクリーム、好きなのか？」

「……多分、好き」

下を向いたまま訥々と答えるユールベルの表情には、僅かに戸惑いが浮かんでいた。しかし、それさえも、ジョシュには可愛らしく感じられて、アイスクリームをつつきながら自然と顔がほころんでいた。

アイスクリームを食べ終わって外に出ると、もうだいぶ日が傾き、地平近くの空が燃えるように赤く染まっていた。そろそろ帰らねばならない時間である。ジョシュは名残惜しさを感じつつ、彼女と並んで帰路につき、やがて研究所近くの交差点で足を止めた。そして、いつものように次の約束を取り付けようとする。

「再来週にまた会えるか？」

「……来週じゃないの？」

ユールベルは不思議そうに聞き返し、少し不安そうにジョシュを見上げた。その深森の湖のような瞳にどきりとして、ジョシュは混乱した思考のままドギマギと質問を返す。

「来週は予定があるんじゃないのか？」

「別に、ないけれど」

「ないって……だってこの前おまえ……」

そこまで言いかけて、ジョシュは慌てて口をつぐんだ。しかし、少し遅かったようである。ユールベルは怪訝な面持ちでジョシュを下から覗き込んだ。

「この前って？」

「あ、いや……食堂でサイラスと話してるのが聞こえて……」

正確には「聞いていた」だが、言い訳がましく「聞こえた」と言ってしまう。もちろん、そんなことは見透かされているだろう。盗み聞きのようなまねをしたことで、非難されるかもしれないと不安になったが、彼女はただ困惑したように目を泳がせてうつむくだけだった。後頭部で結んだ白い包帯が緩やかにひらひらと揺れている。

「あれは、あなたと会うことになるだろうと思ったから……」

「えっ？」

思わず口をついた短い声。

視線を落としたままの彼女を見つめながら、ジョシュは気持ちを落ち着けて、彼女の言葉の意味をよく考えてみる。つまり——彼女には誰かと約束があったわけではなく、自分との約束のために予定を開けておいてくれたということ——。

少しは、期待していいのか？

次第に鼓動が速さを増し、そして強くなっていく。体から飛び出さんばかりの動きがはっきりと認識できる。それでも、精一杯の平静を装うと、僅かにうわずった声で言う。

「じゃあ、来週でいいな」

ユールベルは小さく首を縦に振った。そして、ちらりと上目遣いにジョシュを窺う。視線が合うと、ジョシュは少し顔を赤らめながらぎこちなく笑いかけた。つられるように彼女も戸惑いがちに小さく笑った。

少し冷たくなった風が、彼女の長い髪と白いワンピースをふわりと揺らす。

ジョシュは彼女の方へ手を伸ばしたい衝動を抑えつつ、その手を小さく挙げ、またなと言って背を向けながら歩き出した。その足取りは軽い。薄暗くなった空を目を細めて仰ぐと、浮かれる気持ちを静めるように、大きく胸いっぱい深呼吸をした。



「ユールベル！ こっち！！」

奥の席に座っていたターニャは、喫茶店に入ったユールベルを見つけると、少し腰を浮かして大きく手を振った。今まではあちこち撥ねた癖毛だったが、どういうわけかストレートヘアになっていたの、一瞬ユールベルは面食らったが、それを表情に出すことなく、呼ばれるまま彼女の前に腰を下ろす。

「ごめんね、休日に呼び出したりして」

「ううん……」

不安げにそう答えたところで、ウェイトレスが注文をとりにきたので、少し考えてレモンティを頼む。そして、運ばれてきた水に少し口をつけて、小さく息をついた。

「久しぶりね。元気だった？」

目の前のターニャは明るい笑顔を見せている。が、どこことなくぎこちなく、落ち着きもなく、緊張しているように感じられた。

「何か話があるんじゃないの？」

「えっ、ああ、まあ……」

ユールベルが水を向けると、彼女は困惑して目を泳がせた。しばらく眉根を寄せて考え込んでいたが、やがて振り切るようにパッと笑顔を作った。

「ユールベルがどうしてるか気になったのも本当だから。しばらく会ってなくて、就職してからの話もほとんど聞いてなかったし、お仕事ががんばってるかなーって」

「……ええ、それなりに」

彼女の不自然な明るさを疑問に思いながら、ユールベルはぼつりと答えた。

「まわりの人とか大丈夫？ 変な人いない？」

「みんないい人ばかりよ」

今は——と心の中で付け加える。レイモンドのことは彼女に言ってなかったが、もう終わったことであり、あえて言う必要もないし言いたくもない。このことを言うべき相手がいるとすれば、レイモンドが次に狙いを定めているアンジェリカくらいである。

「あの先生とは仲良くしてる？ ほら、えーと……」

名前を忘れてしまったようで、ターニャは斜め上に視線を向けて記憶を辿る。しかし、それがサイラスのことだというのは、ユールベルにはすぐにわかった。

「先生とはときどきは会っているけど」

「そう、良かった」

ターニャは安堵したように息をついた。彼女はなぜほとんど面識のないサイラスのことをそれほど気にするのだろうか。もやもやした気持ちになりながらも、あえて聞こうとはせず、何となくテーブルの上のグラスに視線を落とした。

沈黙が重くなってきたところで、ユールベルの頼んだレモンティが運ばれてきた。スライスされたレモンを紅茶に沈めてそっと口をつける。その温かさにほっとして、少しだけ気持ちが軽

くなった。

「ね、ケーキも頼まない？ 遠慮しなくていいのよ？」

ターニャは思いついたように勧めてくる。今日は彼女の奢りということなので、気を利かせてくれたのだろうが、どちらにしてもケーキまで頼むつもりはなかった。

「私、このあと用があるから」

「え？ そうなの??」

「まだ一時間くらいは大丈夫だけど」

「そっか……」

ターニャは少し考えたあと、残っていたミルクティを飲み干した。ティーカップをソーサに置くと、ゆっくりと顔を上げて、まっすぐにユールベルを見つめる。

「私、ユールベルのこと、とても大切な友達だと思ってる」

一言、一言、噛みしめるように繋いでいくと、大きく息を吸い、思い詰めたように表情を陰しくして続ける。

「だから、私から、言っておかなくちゃって……」

ただごとでなく緊張している彼女を見て、ユールベルは不安になってきた。あまりいい話でないことは容易に想像がつく。しかし、話の内容についてはまったく心当たりがなかった。僅かに眉を寄せながら、口を開こうとしている彼女の次の言葉を待つ。

「わ、私ね……今、レオナルドと付き合ってるの」

ガタン——！

ユールベルはテーブルに手をついて反射的に立ち上がった。顔をこわばらせて硬直する。思いもしないことに驚いたというのもあるが、それだけでないことは自分自身でよくわかっていた。

「ごめんなさい、あの……」

ターニャは怯えたように身をすくめて目に涙を溜めていた。そんな彼女を見ていられなくて、ユールベルは下を向く。肩から髪がはらりと落ちて揺れた。

「どうして謝るの？ あなたは何も悪くない」

そう、ターニャは何も悪くない。レオナルドも悪くない。悪いのは他の誰でもなく、勝手に動揺している自分自身。今の私にはそんな資格もないのに——。

「だけど……」

「もう行くわ」

「待って！」

ターニャの必死な声に追い縋られ、ユールベルは背を向けたまま足を止めた。緩いウェーブを描いた金色の髪がふわりと揺れ、後頭部の白い包帯がひらりと舞う。

「私たち、これからも友達よね？」

ターニャがおずおずと問いかけると、ユールベルはぎこちなく小さな口を開く。

「ええ、何も変わらないわ……」

「だったらお願い、行かないで！」

「……今は、一人になりたいの」

両手を顔で覆って静かに泣き崩れるターニャと、まだほのかに湯気の立ち上るレモンティを残し、ユールベルは足早に喫茶店を後にした。

約束の時間よりだいぶ早く、次の待ち合わせ場所に着いた。近くの植え込みの煉瓦に座り、膝を抱えてそこに顔を埋める。前を通る人たちがちらちらと不思議そうに視線をよこすが、ユールベルにはそれを気にする余裕などなかった。通り過ぎる人たちの足音を聞きながら、膝を抱える手にぎゅっと力を込める。

どれくらいの時間が過ぎたのかもわからず、時が止まったように感じていた、そのとき。

「ユールベル？」

少し離れたところからジョシュの声が聞こえた。彼は急いで駆けつけてくると、隣にひざまずき、ユールベルの背中に手を置いて覗き込む。

「どうしたんだ？ 気分が悪いのか？」

優しくあたたかな声、あたたかな手。そのせいで、必死に凍らせようとしていた自分の気持ちが一気に氷解した。バツと勢いよく彼の首に腕を絡めて抱きつく。ジョシュはバランスを崩して尻もちをつきながらも、ユールベルの体をなんとか受け止めた。

「ど、どうしたんだよ……」

ジョシュの声はうわずっていた。しかし、構うことなく、細い腕にぎゅっと力を込めて縋りつく。ピタリと寄せた体から体温と鼓動が伝わる。少し乱れた長い髪が、彼の背中側に落ちて揺れた。

「抱いて」

「……え？」

チチチチチチ……。

遠くに小鳥のさえずりが聞こえる。

ユールベルは少し背中を丸め、膝を抱えるように体を横たえていた。強い日差しに照りつけられた足もとがジリジリと熱い。

「少しは落ち着いたか？」

いつもと変わらないジョシュの口調。けれど、ユールベルは背を向けたまま何も答えなかった。頭上の木々がさわさわと擦れる音と、優しい草の匂いに包まれながら、小さな口をきゅっと結んで身を固くする。

「無理しなくてもいいわ」

「無理なんてしてない……まあ、かなり驚いたけど……」

抱いて、少しでも私のことを想ってくれるなら——我を忘れてそんなことを求めてしまったユールベルを、ジョシュは理由も聞かずにこの公園へ連れてきてくれた。彼は大きな木陰に腰を下ろして空を見上げたが、ユールベルはとて彼顔を見られず、その隣に寝転がりずっと背を向けていた。

「気持ちが沈んだときやつらいときは、外に出て青空を見上げるのが一番いい」



「……雨が降ってたら？」

「いつかは晴れるだろ」

ジョシュは苦笑しながら答えた。その答えを、ユールベルはうらやましく思い、同時に彼との距離を大きく感じた。

「もうわかってると思うけれど、私、あなたが考えていたような無垢な女の子じゃない」

「別に、俺は……」

ジョシュはそう反論しかけて口ごもった。ユールベルは淡々と続ける。

「あなたがそう誤解しているのはわかっていた。わかっていたけど否定しなかった。あなたの優しさを利用していたの。寂しかったから、一緒にいたかったから……だからごめんなさい。もうこれで終わりにするわ」

「ちょっと待てよ！ なに言ってんだよ、勝手に終わらせるなよ！」

ジョシュは焦ったように振り向いて言った。それでもユールベルは背を向けたまま動かない。少し呼吸をしてから、静かに話し始める。

「私、今朝、友達に会ってきたの。話があるって言われて」

ジョシュは相槌も打たず黙りこくっていた。ユールベルから彼の姿は見えないが、いきなり話が変わって困惑しているだろうことは、何となく空気で伝わってくる。少し緊張して手元の芝を握りしめた。

「その友達、付き合ってるって……私が以前一緒に住んでいた人と」

「す……?!」

ジョシュは素っ頓狂な声を上げかけて、それを呑み込んだ。

「……今でも、そいつのことが好きなのか？」

「優しくしてくれるから、寂しさを埋めるために利用していたのよ。きっと、最初からずっと……。好きな人は他にいたけれど、相手にしてもらえなかったから。でも、そういうのは良くないと思って自立しようとした。けれど無理だった。さっきみたいに友達に嫉妬したり、あなたを利用したり、弟にまで縋ったり……」

ユールベルの声は次第に小さくなっていく。芝を握る手に力がこもり、ブチブチとちぎれる音がした。

「利用とか言うなよ。だいたい弟は家族なんだから遠慮することないだろう」

「そう、家族なの。家族だから許されない……あんなこと……」

「……………」

張りつめた空気。ジョシュが背後で小さく息を呑んだ。ユールベルの発言は曖昧だったが、その言い方から何があったか察したのだろう。それでも構わないと思って口にしたのだから、覚悟はできている。ユールベルは芝を握る手を緩めた。

「ここまで聞いたら軽蔑する以外にないでしょう？ もういいの」

「放っておけるかよ！」

ジョシュは横たわるユールベルの両側に手をつき、真上から覗き込んで強く訴える。そろりと視線を上に向けたユールベルに、彼の真剣な眼差しが突き刺さった。

「俺と一緒にいたいって思ってくれたんだろう？ それって俺のことを好きってことじゃないのか？ それともまだ相手にしてくれなかったヤツに未練があるのか？」

「わからない……本当にわからないの……」

必死に追及されて混乱する。言い逃れではなく、本当に自分の気持ちがわからなかった。ユーベルが潤んだ目を細めると、ジョシュは奥歯を噛みしめて苦しげに顔をしかめた。

「俺は、利用されたなんて思っていない。お互いに会いたいから会ってただけだろ？ 嘘について騙してたわけでもないのにそんな言い方するなよ。俺のことを嫌ってるわけじゃないなら、これからも……」

「同情ならやめて。私もあなたも傷つくだけだから」

「同情じゃない。俺が終わりにしたくないだけだ！」

今の彼がそう思っていることは間違いないだろうが、それはおそらく一時の感情に流されてのこと。だから、それに縋ってはいけないし、自分からきっぱりと終わらせなければならない。これ以上、彼に後悔させないように、自分が後悔しないように――。

「……来週、また会ってくれるか？」

ジョシュが緊張した面持ちで問いかけてくる。

ユーベルは彼から目を逸らすと、少し考え、やがてぎこちなくこくりと頷いた。

「あれ？ ジョシュもう帰るの？」

「ああ、ちょっとな」

研究所の門前で鉢合わせたサイラスに軽く答え、ジョシュは目的の場所へと足を向ける。まだ勤務時間は終わっていないが、用があるからといって抜けさせてもらったのだ。普段は夜遅くまで仕事をしていることが多いため、このくらいの融通は利かせてもらえる。とはいえ、ジョシュが頼んだのは初めてのことであり、上司も少し驚いた様子で、よほどの用件だと思ってくれたようだった。

研究所からそう遠くないところにある、何の変哲もないごく普通の学校。

ジョシュはその門前に到着すると、校舎の方を見やった。昇降口の前には下校する生徒たちが溢れ、若々しい賑やかな声が上がっている。この分だと、すでに帰ってしまった生徒も多そうだ。

あいつ、まだいるかな――。

会えなかったら何のために仕事を抜けてきたのかわからない。こんなことならもう少し早く来れば良かった、と後悔しつつ、次々と出てくる生徒たちを確認していく。そのとき、周囲から頭ひとつ抜け出た少年が目についた。向こうもジョシュに気付いたようである。

「おにいさん！」

アンソニーは人なつこい笑顔を見せながら、小走りで駆けつけてきた。

「どうしたの？ 偶然……なわけないよね？」

「おまえに話があって来た……んだけど……」

そう言いながら、彼についてきた小柄な少女にちらりと視線を向ける。随分と子供っぽく見えるが同級生なのだろうか。アンソニーが実年齢より大人びているせいで、隣にいると余計にそう見えるのかもしれない。

「あ、紹介するよ。僕の同級生で彼女のカナ、こっちは姉さんの同僚のジョシュ」

「こんにちは」

「あ、ああ……」

カナに可愛らしい笑顔で握手を求められ、ジョシュは慌てて右手を差し出す。アンソニーに彼女がいるということは、以前に聞いたので知っていたが、ユールベルからあの話を聞いたせいか戸惑いを隠せない。

「カナ、ごめん。おにいさんと話してくるから、今日は先に帰ってくれる？」

「うん、じゃあ、またあしたね」

カナは素直にそう答え、ジョシュに礼儀正しくお辞儀をし、アンソニーには手を振って去っていく。

「で、どこで話をするの？」

「ああ……歩きながら……」

これからするのは誰にも聞かれない話なので、喫茶店に入るわけにもいかず、ジョシュにはそれしか思い浮かばなかった。変に思われはしないかと心配したが、アンソニーは特段気にする様子もなく、じゃあ……と言って、カナの去っていった反対側へ足を向けた。

二人は無言のまま並んで歩く。

何かを察してか、ただの偶然か、アンソニーは人通りの少ない道を選んでいるように見えた。早く切り出さねばと思うものの、彼がスタスタと足を進めるため躊躇われてしまう。

どこへ向かっているのだろうか――。

ジョシュはチラリと隣を窺った。彼は初めて会ったときよりも背が伸びていて、今はジョシュよりも高くなっている。そこにこだわりを持っているわけではないが、何とはなしに敗北感を覚え、小さな溜息とともに足もとに視線を落とした。

「ここならどう？ あまり人が来ないけど」

ほとんど会話らしい会話もせず、30分ほど歩くと、アンソニーは唐突にそう口を切った。

ジョシュは顔を上げる。

眼前は大きく開けていた。正面の煤けたガードパイプの下方には、大きな川が流れている。少し冷たい風が新鮮に感じられて心地いい。そして、まわりには、確かにあまり人がいなかった。

「あ……ああ……」

「良かった。おにいさんとここ来たかったんだよね」

アンソニーはそう言って屈託なく笑うと、河原へと続く石段を下りていく。彼が何を考えているのか今ひとつ理解できず、眉根を寄せながらも、ジョシュはその背中を追ってゆっくりと階段を下り始めた。

「おまえたちのことを聞いた」

石段を下りきったところで、ジョシュは河原の小石を踏み鳴らしつつ切り出した。

アンソニーは不思議そうな顔で振り向く。

「どういうこと？」

「それは、その……ユールベルとおまえの関係というか……えっと……」

覚悟は決めてきたつもりだったが、いざとなると口に出すのが憚られ、みっともないくらい狼狽えた曖昧な言い方になってしまう。しかし、アンソニーは、その様子で何を言いたいのか理解したようだ。一瞬、息を吞んで目を見開いたが、すぐに溜息をつきながら両手を腰に当て、いかにも残念そうに大きく抑揚をつけて言う。

「なんだあ、先生、喋っちゃったんだ」

今度はジョシュが目を見開いた。

「え……？ 先生って、サイラスか？」

「先生から聞いたんじゃないの？」

「俺は、ユールベルから聞いた……」

「へえ、姉さんが……」

アンソニーは斜め下に視線を落としながら考え込んだ。まさかユールベル本人が言うとは思わなかったのだろう。考え込みたくなるのも無理はない。だが、それをいうならジョシュも同じである。

「サイラスは知ってたのか？」

「まあね、僕が言ったから」

半信半疑で尋ねると、アンソニーは事も無げにさらりと答える。なぜ、サイラスにだけ話したのか疑問に思ったが、彼はサイラスを慕っており、ユールベルと付き合っほしいと願っていたようなので、あえて本当のことを話しておいたのかもしれない。

「それで……あいつ、何か……」

「何も」

彼がいつ知ったのかはわからないが、ユールベルと接する態度に変化はなかった。それ自体は悪いことではない。だが、知りながらなぜ放置していたのかがわからない。他人事だから関わらなかったのだろうか。関わるべきではないと思ったのだろうか。

しかし、ジョシュは、このままにはしておけなかった。

「おまえ、もうあんなことはやめろよ」

「なに、おにいさん嫉妬してるの？」

アンソニーは軽く笑いながら、茶化すように答えた。だが、ジョシュは表情を険しくしたまま崩さない。

「真面目に言ってるんだ。こんなこと……ユールベルも、おまえも、余計に傷つくだけじゃないのか？ 残るのは虚無感と罪悪感だけだろう。根本的な解決にはなっていない」

感情を抑えて諭すようにそう言ったが、その途端、アンソニーの目がぞっとするくらい冷たくなった。無表情のまま、少し顎を上げてジョシュを見下ろす。

「姉さんが壊れそうになって震えてるのを、黙って見てろって？」

「そうじゃない。方法が間違ってるって言ってるんだ」

ジョシュは額に汗を滲ませながら言い返した。一瞬だが、遥か年下の彼に、言いしれぬ恐怖を覚えた。ラグランジェという恵まれた家で生まれ育ちながら、なぜこんなにも冷たく荒んだ目が出るのかわからない。

「おにいさんはいいよね」

彼はフツと鼻先で笑って、視線を流す。

「姉さんが落ち着いているときに会って、楽しく過ごすだけなんだから」

その静かな声に、ジョシュはまるで鈍器で後頭部を殴られたように感じた。何も言葉が出てこない。

アンソニーは顎を引き、厳しい顔になる。

「僕は一緒に暮らしてるんだよ。良いときも悪いときもずっと一緒にいるんだよ。たとえ一時でも落ち着かせられるなら、そうしてやりたいし、そうしなければいけない。あんな姉さん見られないんだ。間違ってることくらい僕だってわかってる。じゃあどうすればいいのさ。間違っ

てるって責めるんだったら解決策を提示してよ」

「……ただ話を聞いてやるだけでも、だいぶ違うんじゃないか」

そう答えながらも、ジョシュは自分の言葉が嫌になるほど空疎に感じられた。戸惑いが声に滲む。言っている方がこれでは、何の説得力もないだろう。案の定、アンソニーは呆れたような顔で溜息をつく。

「何もわかってないくせにアドバイスするなんて、随分無責任だね」

「そりゃ、何もかも知ってるわけじゃないが……」

さすがに『何もわかってない』などと言われては、反論せざるを得ない。家族であるアンソニーとは比べようもないが、少しずつともに過ごす時間を積み重ね、わかり合おうとしてきたつもりである。けれど、彼はそれを軽い冷笑で薙ぎ払った。薄い唇に笑みをのせ、挑発するような眼差しで言う。

「いいよ、教えてあげる。姉さんのこれまでを」

アンソニーから聞かされた話は、想像もつかないほど壮絶なものだった。

幼い頃に本家一人娘の魔導の暴発を受けて、左目の視力を失ったうえ、目のまわりに消えない傷を負ったこと。

実の親に疎まれて虐待され、結界を張った部屋に7年も監禁されていたこと。

その結界を自力で破って自由を手に入れたこと。

本家一人娘を階段から突き落としたと誤解され、責められ、壊れかけたこと。

そのとき世話してくれた人を好きになったが、冷たい態度でにべもなく拒絶され続けたこと——。

あまりのひどさに、口を覆って絶句するしかなかった。いったいユールベルの味方はどこにいたのだろうか。アンソニーも、ほんの数年前まで姉がいることすら知らなかったらしい。

無茶苦茶だ。何なんだこれは、どうしてこうなった。

怒りで体が震える。まだ見たこともない彼女の両親に憎しみさえ覚えた。

今なら理解できる。彼女が両親と離れて暮らしていることも、サイファが親代わりになっていることも、研究所でいきなり特別研究チームに配属されたことも。当主としての義務なのかもしれないが、彼女を守ってきたのはサイファだけだったのかもしれない。しかし、それもここ数年のこのことのようなのだ。

「わかったよね？ 同情なんてやわな感情で支えられるものじゃないって」

「……同情なんかじゃない」

ジョシュは低く確かな声で言い切った。

確かに、生半可な気持ちでは支え切れないだろう。それがわからないほど愚かではない。わかっているもなお、ユールベルを守りたいと強く思ったのだ。同情もあるかもしれない。だが、どうでもいい相手だったらここまで考えはしない。彼女と出会う以前は、他人との関わりを望まず、たとえ同情を感じても行動を起こすことはなかったのだから。

「じゃあ、おにいさんの決意を聞かせてよ」

「決意……？」

思わず聞き返すと、アンソニーは燃えるような鮮やかな青の瞳を、まっすぐジョシュに向けた

。「行動以前に言葉にすら出来ない人を、僕は信用しない」

ジョシュはごくりと唾を飲んだ。

さらさらと川の流れる音が、急に大きく聞こえてきた。それに同調するかのようには鼓動が高まっていく。誤魔化す理由も必然もない。ただ、アンソニーに認めてもらえるか自信がなくて、怖かった。

「……俺は」

随分と長い沈黙のあと、ジョシュはやや擦れた声で切り出した。

## 終幕

---

今日で必ず終わらせる。自分で終幕を下ろすの——。

ユールベルは鏡を正面から見据えて、その向こうの自分に暗示を掛けるかのごとく、胸の中で決意の言葉を繰り返す。鏡は嫌いだった。そこに映される自分の姿を目にするのが苦痛で、いつもは避けているのだが、今日は挑むようにまっすぐに相對していた。

「今日もおにいさんとデート？」

ベランダから顔を覗かせたアンソニーが、さらさらと短い金髪をそよがせながら、小さな如雨露を片手にそう尋ねた。如雨露の先からは水滴がしたたっている。ちょうどプランターに水をやっていたところのようだ。

そのプランターは、ジョシュが作ってくれたものである。

話し合って決めたわけではないが、平日はユールベル、休日はアンソニーが世話をするようになっていた。何をすればいいのかわからなかったが、ジョシュに言われたように適当に水をやっていたら、本当に若緑色の小さな芽が出てきた。今は、まだ花は咲かせていないものの、青々とした背丈がしっかりと着実に伸びてきている。

「ゆっくりしてきなよ。遅くなってもいいからね」

彼は軽く笑いながらそんなことを言う。

ユールベルはムツとして眉をひそめる。そして、口をつぐんだまま、緩いウェーブの金髪をなびかせて足早に部屋をあとにした。

空は鮮やかに晴れ渡り、眩しいくらいの日差しが地上に降り注ぐ。

待ち合わせ場所には、すでにジョシュが来ていた。

ユールベルより早いのはいつものことであり、不思議でもなんでもないが、硬い顔で唇を引き結んでいることが少し気にかかった。何か思い詰めているようにも見える。しかし、ユールベルに気がつくと、ほっと安堵したように表情を緩ませた。

「とりあえず公園へ行くか」

その声は普段と何ら変わりのないものだった。ユールベルも素直に頷く。それから二人並んで公園に向かうと、小径をゆっくりと散歩したり、木陰でのんびり話をしたりと、あたたかい陽だまりに包まれながら、これまでの休日と同じように穏やかな時間を過ごした。

日が傾き、帰る時間が近づいた頃——。

ジョシュがぎこちなく遠慮がちに手を繋いだ。

ユールベルが顔を上げると、彼は照れたような表情で前を向いていた。夕陽のせいではっきりとはわからないが、頬もほんのり紅く染まっているように見える。その緊張ぎみの横顔に、その手のあたたかさに、ユールベルの胸はキュッと締め付けられる。決意が鈍りそうになるが、これが最後だからと自分に強く言い聞かせた。



「来週も今日と同じ時間でいいか？」

別れ際、ジョシュは軽く尋ねてきた。

そう、こうやって次に会う日時を決めることが、二人には当たり前になっていた。途切れることのなかった約束、終わりの見えなかった逢瀬——しかし、それも今日までのこと。ユールベルは口を引き結ぶと、そっと首を横に振る。

「何か予定があるのか？」

「……もう、会わない」

「えっ？」

単純に声が聞き取れなかったのか、訝しむ様子もなく、ジョシュは少し顔を近づけて聞き返した。ユールベルは小さく息を吸い込み、あらためて心を決めると、今度ははっきりとした口調で言い直す。

「もうあなたと会うのをやめるわ」

ジョシュの目が大きく見開かれた。

「……な、んで……？」

「今までありがとう」

ユールベルは抑揚のない言葉を返す。

「理由を教えてくれよ！」

「もう会いたくないから」

「……嘘だ」

ジョシュは喉の奥から絞り出すように言う。ユールベルはたまらず顔をそむけた。

「お願い……あなたといると苦しいの。これ以上、私のことを苦しめないで」

「……違う。俺と一緒にいるから苦しいんじゃない。俺から逃げようとするから苦しいんだ」

彼は冷静にそう言いながら、沸き上がる感情を堪えるように、体の横でこぶしをギュッと爪が食い込むほどに握りしめる。それを見て、ユールベルは、まるで自分の心臓を鷲掴みにされたかのように感じた。

「……そうよ」

胸を押さえて声を絞り出す。右目に涙が滲み、頭に熱い血が上っていく。

「でもそうするしかないの！ あなたもいつか私から離れていく！ 今は意地になって無理をしてるだけ。私がどんな人間かももうわかったでしょう？ いつも誰かを利用して縋って……弟さえも……。心も体も穢れきっている。誰にも好きになってもらう資格なんてない。だから……」

「勝手に決めつけるなよ！」

ジョシュは感情的に言い返した。そして呼吸を整えると、涙目のユールベルを正面から見据える。

「俺は、逃げない」

「今はそう思っているけど、いつか……」

「どうやったら信じてもらえるんだよ！」

「ジョシュは悪くない。悪いのは私……だから、どうしようもない……ごめんなさい……」

ユールベルは泣きそうになるのを懸命に堪えようとしていた。唇を強く噛みしめて目を伏せる。けれど、怖いくらいまっすぐな彼の眼差しに、全身が熱を帯び、胸が焼けるように熱くなり――そして、右目から大きなひとしずくが零れ落ちた。

さらに強く唇を噛み、こぶしを握りしめる。

それでも、次々と溢れくる涙は止められない。やがて、堰を切ったように大声で泣き崩れた。その場でうずくまって激しく慟哭する。そこが往来の真ん中であることも、研究所の近くであることも、誰かが見ているかもしれないことも、知り合いが通るかもしれないことも、何もかもどうでもよかった。

時折吹く風が冷たい。

空はすっかり濃紺色に塗り替えられていた。星もあちらこちらで瞬き始めている。

二人は、植え込みまわりの煉瓦に、並んで座っていた。

ユールベルが泣き崩れたあと、ジョシュは何も言わずに、ずっと背中に手を置いて寄り添ってくれていた。ひとしきり泣き疲れるまで泣いて、少し落ち着いてくると、すぐ近くの植え込みの方へそっと促された。それから1時間ほど、ただ黙って膝を抱えるだけである。彼がどう思っているのか不安だったが、それを知るのが怖くて、尋ねることも顔を向けることもできない。

「なあ……」

不意に落とされた声に、ユールベルの体がビクリと震えた。それでも彼は言葉を繋げる。

「おまえ、あの家を出てさ、俺の家に来ないか？」

「……えっ？」

ユールベルは大きく目を見開いて振り向いた。

「おまえの家と比べるとだいぶ狭いけど……いや、もう少し広いところに引っ越してもいい。今までと同等というわけにはいかないが、なるべく不自由させないようにするから」

「……私たちって、そういう関係？」

「これからそうなるんじゃない、駄目か？」

ジョシュは許しを請うように尋ね返す。

ユールベルは眉を寄せてうつむいた。頭が混乱する。彼の言うことがあまりにも飛躍しすぎて、まともに受け止めることができなかった。家を出るように勧める理由はわかっているつもりだ。だからといって、どうして彼と一緒に住むことになるのかは理解できない。確か、自分は終幕を下ろそうとしていたはずなのに――。

「軽薄な気持ちじゃない。俺は、真剣におまえと……」

「弟を一人にするわけにはいかないわ。未成年だもの」

ジョシュの言葉を遮って、ユールベルはそう告げた。論点をずらした自覚はあるが、言ったことは嘘ではない。一人にするわけにはいかないし、両親のもとに返すわけにもいかないのだ。家族の関係を説明しなければ納得してもらえないかと思ったが、彼は何も尋ねてこず、ただ苦い表情で唇を引き結んでいた。しばらく考えて、ゆっくりと口を開く。

「じゃあ、あいつが18になるまで待つ」

「そんな先のこと……」

「俺は、待つよ」

困惑して口ごもるユールベルに、ジョシュは迷いなく言った。少なくとも現時点では、彼が本気でそう思っているだろうことは、ユールベルにも疑いようもないくらいに伝わってきた。

しばらくして、ジョシュが自宅まで送ってくれた。

いつもは近くの交差点で別れるのだが、夜遅くなったからといって、断ったにもかかわらず強引についてきたのだ。おそらく、まだ精神的に不安定なユールベルを心配しているのだろう。扉の前に着いても、ジョシュは手を掴んだまま離そうとしなかった。何か言いたげに目を泳がせている。

「やっぱり今日だけでも俺の家に来ないか？」

「もう大丈夫よ」

ユールベルは努めて無感情に言う。

「なあ、もしつらくなって、泣きたくなくても……その……」

「わかっているわ」

それでもジョシュは手を離そうとしない。中にいるアンソニーと二人きりにしたくないのだろう。彼が何を懸念しているのかはわかっていたが、それでも帰らないわけにはいかないのだ。

握った手に、少し力がこめられた。

「なかなか信じてもらえないけど、俺は、本当におまえのことが好きなんだよ」

ジョシュは、思いつめたように切々と訴えかけた。

しばらく苦悶の表情でユールベルを見つめていたが、やがて細い肩に手を置き、様子を窺いながら少しずつ身を屈めていく。

彼が何をしようとしているかわかった。けれど、拒絶しなかった。

ユールベルが近づくジョシュの顔をじっと見つめると、彼は少し戸惑いを浮かべたが、それでも逃げることなくそっと触れるだけの口づけを落とした。優しい熱が伝わる。次の瞬間、彼の表情を確かめる間もなく、ユールベルは強い腕で思いきり抱きしめられた。足もとがよろけて、白いワンピースがふわりと舞う。

「何かあったら、何でもいいから俺を頼ってくれ」

彼の声が耳にかかる。

唇も、体も、心も、すべてが心地よくあたたかかった。

こんなことは初めてである。

今まで誰と一緒にいても、誰に縋ってみても、虚しさや悲しさという負の感情が消えることはなかった。それどころか縋るたびに大きくなっていった。けれど、今はどうしてだか幸福感の方が大きい。終幕を下ろそうとしていたはずなのに、その動機すら見失いそうになっていた。

もしかしたら、彼なら本当に——？

信じると断言することはまだできないけれど、気持ちは傾きつつあった。もし、信じることができれば、彼とずっと一緒にいられたら、きっとどれだけ幸せだろうと思う。そんな安易な自

分に、幾何かの嫌悪感を覚えながらも――。

「アンソニー？」

ようやく家に帰ったユールベルは、真っ暗なリビングルームで弟の名を呼んだ。

しかし返事はない。

寝室やキッチンなど他のどこからも明かりが漏れておらず、浴室にもいる気配もない。もう寝てしまったのだろうか。何となく嫌な予感がしながらも、手探りで照明のスイッチを入れると、テーブルに紙が一枚置いてあるのが見えた。ユールベルは近づいて目を落とす――瞬間、それを掴み取って凝視し、大きく息を呑んだ。

紙にはアンソニーの筆跡で、ひとことだけ書かれていた。

さようなら、と――。

「行くところに心当たりはないのか？」

「わからない……」

ユールベルは泣きそうになりながら、もういちど紙切れに目を落とす。さようなら——アンソニーが残したのはその一言だけだった。これを見つけたあと、帰りかけていたジョシュを追いかけて助けを求めたが、彼もまた驚いてあたふたするばかりだった。頭を掻きながら必死に思考を巡らせると、何か思いついたのか、パッと顔を上げて人差し指を立てる。

「そうだ、あいつ彼女がいたろう?!」

「同級生でカナって言っていた気がするけど、会ったこともないし、連絡先なんてわからないわ」

何度かアンソニーと一緒にいるところを見かけたことはあったが、会いたくなくて避けるようになってきた。彼女の話も聞きたくなかったし、アンソニーもそれを察してか積極的に話そうとはしなかった。

「学校の先生は？」

「担任が誰かも知らない……学校の場所はわかるけれど……」

家族でありながら、一緒に住んでいながら、結局はアンソニーのことをたいして知らなかったのかもしれない。ただ利用していただけで、ただ甘えていただけで、彼のために姉らしく何かをしてあげたことなどなかった。考えれば考えるほど、自分がろくでもない人間だと思い知らされて絶望的な気持ちになる。目にじわりと涙が滲んだ。

「愛想を尽かされて当然だわ」

「いや違う、俺のせいだ……」

ジョシュは視線を落として沈んだ声で言う。しかし、すぐに顔を上げて気合いを入れ直した。

「今はそんなこと言ってる場合じゃない。アンソニーを見つけないと」

彼の言うとおりに、今はアンソニーを捜すことが最優先である。ユールベルは涙を堪えてこくりと頷いた。

とりあえず手がかりを求めて学校に来てみたが、明かりは見え、門も閉まっていた。誰かがいそうな気配はない。休日の夜だから、当然といえば当然である。

「誰かひとりくらい先生がいてくれれば良かったんだけど……」

ジョシュは門にもたれかかりながら、悔しげに言う。

それを聞いて、ユールベルはハッとした。

「おじさま……」

「えっ？」

「おじさまに聞けばわかるかもしれない。担任の連絡先くらいなら……」

今でもアンソニーの保護者代理はサイファになっている。学校からの連絡などは彼が受けているはずだ。そう思うと、いてもたってもいられず駆け出した。事情が呑み込めていないジョシ

ユは、よくわからないまま、慌ててユールベルを追って走り出した。

「おじさまって、もしかして……」

ジョシュは大きな屋敷を仰ぎ見ながら、顔を引きつらせた。

しかし、ユールベルには彼に構っている余裕などなかった。無言のまま進んでいき、躊躇うことなくチャイムを鳴らす。しばらくすると重量感のある扉が開き、レイチェルが優しく微笑んで二人を迎えた。

「いらっしゃい、ユールベル……それと、あなたは研究所にいた鼻血の……？」

「それはもう忘れてください！」

ジョシュは顔を真っ赤にして言い返した。レイチェルは口もとに手を添え、くすくす笑っている。このいかにも接点がなさそうな二人に、いったいどういう面識があるのだろうか——ユールベルは少し驚き、そして気になったが、今はそれに気をとられている場合ではない。レイチェルに向き直ると、苦手意識を感じながらも、懸命に彼女の目を見ながら説明を始める。

「私、おじさまにどうしても訊きたいことがあって……」

「ええ、居間にいるわよ。サイファも、アンソニーも」

「……えっ?!」

ユールベルとジョシュは、同時に目を見開いて声を上げた。

「また負けかあ。サイファさん手加減なしだもんなあ」

「手加減で勝ったところで面白くないだろう？」

チェス盤を挟んで談笑するアンソニーとサイファを眺めながら、ユールベルは啞然とした。紙切れを持つ手に、無意識に力がこもる。と、アンソニーが戸口のユールベルたちに気付いて振り向いた。

「あ、姉さん。おにいさんも一緒なんだ」

何事もなかったかのように、にこやかに笑顔を振りまく。

ユールベルの頭の中で何かが切れた。

「どういうことなの?!」

そう叫ぶと、軽くウェーブを描いた金髪と包帯をなびかせながら、部屋の中に駆け込んで行く。ソファのそばに立って睨み下ろしても、アンソニーは顔色一つ変えず、人なつこい笑みを浮かべて答える。

「僕、ここに住まわせてもらうことにしたんだ」

「どうしてそんな……!!」

ユールベルは絞り出すように言う。視界が大きく歪んだ。目に滲んだ涙が今にもこぼれ落ちそうになっている。

サイファはその様子を見て、不思議そうに尋ねる。

「アンソニー、置き手紙をしてきたんじゃないのか？」

「置き手紙ってこれのことかよ」

ジョシュは苛立ちながら、ユールベルの持っていた紙切れを抜き取り、乱暴に開いて前に突き出す。「さようなら」とだけ書いてある紙だ。サイファはソファから身を乗り出してそれを覗き込んだ。

「これはひどいな」

サイファは軽く苦笑しながらそう言うと、ソファに座り直し、口もとを上げて正面のアンソニーに視線を投げる。彼は小さく肩をすくめて視線を落とし、チェスの駒に指をのせた。

「心配してほしかったんだよ……最後だしね」

そう言葉を落として薄く微笑む。が、すぐにいつもの表情に戻るとジョシュに振り向いた。「おにいさん、姉さんのことを頼んでいいよね。僕の代わりにあの部屋で姉さんの面倒を見てやってよ。残してある僕のものは、使うなり捨てるなり好きにしていいいから。ベッドもそのままだし……って、おにいさんは嫌かな」

あははと笑うアンソニーを、ジョシュは苦虫を噛み潰したような顔で見下ろした。その瞳には困惑と怒りが見え隠れする。何かを言いたそうにしているが、口は閉ざしたまま、ただ悔しげに顔を歪めるだけである。

ユールベルは混乱したまま首を横に振った。

「私、そんなこと頼んでない……私……」

「このままじゃ、誰も幸せになれないのはわかるよね。いつかは終わらせなきゃいけないことなんだ。だったら、今が一番いいんじゃないかなって。おにいさんの覚悟も聞かせてもらったしね。姉さんの過去をすべて話したけど、それでもずっとそばで支えて守っていくって。絶対に逃げたりしないって。他にもいろいろと話し合っって、おにいさんなら信用できると思ったんだ。だから、姉さんは安心して頼ればいいんだよ」

アンソニーは落ち着いた口調で、優しく言い聞かせるように言う。その様子を、サイファはゆったりとソファに座ったまま見守っていた。おそらくアンソニーからすべての話を聞いているのだろう。そのうえで、ここに住まわせてほしいと頼まれたから、了承せざるを得なかったのかもしれない。

「私は、何も知らなかった」

ユールベルは肩を震わせながら嗚咽し、顔を両手で覆った。溢れた涙が手のひらを濡らす。ジョシュは何も言わず、そっとユールベルの肩を抱いた。

「姉さん、幸せになってよ。僕も幸せになるからさ」

アンソニーは目を細めて言った。

それでも、ユールベルはどうすればいいかわからず、頭が混乱したまま、ただ体を震わせてすすり泣き続けた。アンソニーの言うことは理解できるが、思考と感情が追いつかなかった。夢なのか現実なのかもわからなくなってくる。肩に置かれた手のあたたかさだけが、辛うじて自分を現実に引き留めているようだった。

「話が違ふとあとで言われるのも何だから、あらかじめ言っておくが」

サイファは不意にそう切り出して、視線を流す。鮮やかな青の瞳がジョシュを捉えた。

「ジョシュ、君をラグランジェ家に迎えることはできない」

ビクリ、と彼の体が小さく震える。

「俺は、別にそんなこと……」

「つまり、ユールベルとは結婚できないということだ」

「……………」

ユールベルの肩に置かれた彼の手に力が入った。

サイファは膝の上で手を組み、淡々とした表情で話を続ける。

「君が気に入らないから言っているわけではないんだよ。ラグランジェ家に迎えるには一定の基準があってね。君には魔導力が不足している。最低限、アカデミー魔導全科に入学できるくらいの力はないといけない」

基準の話はユールベルも聞いたことがある。ラグランジェ家の人間は一族間でしか結婚が許されていなかったが、一年ほど前、基準さえ満たせば外部の人間であっても受け入れることにした——という話だ。溢れた涙を拭ってそっと顔を上げる。隣のジョシュは、思い詰めたように必死な表情を見せていた。

「俺は……一緒にいられるだけで……」

「君はいいかもしれないが、ユールベルにとってはそれで幸せかな？」

サイファはちらりと厳しい視線を流す。

「それ、は……………」

ジョシュは苦しげに言葉を詰まらせた。ユールベルの肩から手を滑り落とすと、体の横で壊れそうなほど強く握りしめる。こぶしは小刻みに震えていた。奥歯を強く噛みしめた表情にも、悔しさとやりきれなさが滲んでいる。

「ラグランジェ家としても困るんだよ」

サイファは容赦なく畳みかける。

「同棲などという外聞の良くないことは避けてもらいたい。ラグランジェ家の品位を下げることに繋がりがねないからな。それに、ユールベルに勝手なことをされては、ラグランジェ家の若い者にも示しがつかないだろう？」

「私、出ます……………」

ユールベルは体の奥底から震える声を絞り出す。

「私、ラグランジェ家を出ます。ラグランジェの名前を捨てます！」

涙の乾かないまま、まっすぐサイファに向かってそう叫んだ。隣では、ジョシュが目を丸くして、ポカンと口を開けている。けれど、ユールベルには自分の言ったことの意味くらいわかっていてた。

「ユールベル、それでいいの？」

サイファは優しく問いかける。

ユールベルは硬い表情でこくりと頷いた。

「ラグランジェの名前さえなければ問題はすべて片付くもの。それに、私、以前からいつかラグランジェ家を出たいと思っていた……そのためには正当な理由があるって聞いていたけれど、これなら認めてもらえるんでしょう？」



「ジョシュと結婚する、というのならね」

そう言われ、とっさに言葉が出てこなかった。ユールベルとしては、一緒に暮らすことを考えていたのだが、結婚でないと正当な理由にならないのだろうか。

サイファは感情のない声を重ねる。

「ラグランジェ家を出るために、彼を利用しているだけなのか？」

「違うわ！好きだから……好きだから、一緒にいたいよ……」

ユールベルは、慎重に、噛みしめるように言葉を紡ぐ。そして、表情を引き締めてサイファを見据えた。

「彼と、結婚するわ」

ジョシュは驚いて大きく目を見張った。しかし、すぐにそれは嬉しそうな表情に変わる。その屈託のなさに、ユールベルの胸は小さく疼いた。彼が好きだというのは嘘ではない。好きだからこそ、怖くなって逃げだそうとした。終わらせようとした。そんな自分が、今さらこんなことを言う資格はあるのだろうか。あまりにも都合が良すぎるのではないだろうか――。

「ラウルのことは吹っ切れたのか？」

「……大丈夫よ」

その名を聞かされて、一瞬ドキリとしたが、すぐに気持ちを落ち着けて答える。強く断言するだけの自信はなかったが、ジョシュがいてくれるなら、おそらくもう心を乱されることはないだろうと思えるようになっていた。

「随分と簡単だね」

サイファは無表情で言う。けれど、ユールベルは引かなかった。

「簡単じゃなかったこと、おじさまなら知っているはずですよ。いくら縋っても私を見てくれなくて、拒絶されて、それでもずっと諦めきれなかった。そんな私の気持ちを融かしてくれたのがジョシュだったの。逃げ込める場所じゃなくて、一緒に過ごす時間が欲しいと思えるようになったの。一緒に生きていくのなら、私はジョシュがいい」

半ばむきになって、懸命に訴えかける。

サイファはふっと笑った。

「ユールベル、君の気持ちはわかった。だが、ラグランジェの名を捨てるとうどうなるか、君は正しく理解しているのかな？」

「……特別扱いされなくなる？」

ユールベルは少し考えて答えた。

ラグランジェというだけで、多少の無理が通ることは知っている。研究所でもそれは実感していた。新人のユールベルが特別研究チームに配属されたのが、何よりの証左である。

「そう、それも影響のひとつだ」

サイファはゆっくりと肯定した。そして、一呼吸おいて続ける。

「加えて言うならば、私も表立って君を助けることができなくなる。もうラグランジェ家の人間ではなくなるのだから……わかるね？」

「俺が守ります」

ユールベルが口を開くより先に、ジョシュが一步前に踏み出してそう言った。強い意志の漲る眼差しを、まっすぐサイファに送る。サイファも鮮やかな青の瞳でジョシュを見つめ返す。二人とも目を逸らそうとしなかった。ジョシュの頬に幾筋かの汗が伝う。と、サイファがフッとおかしそうに小さく笑った。

「ジョシュでは些か頼りない気がするな」

「そんなこと……は……」

ジョシュの声は次第に弱々しくなり、やがて唇を噛んでうつむいた。そんな彼を見ながら、サイファは涼しい顔でソファの背もたれに身を預けている。いったい彼が何を考えているのか、ユールベルにはわからなかった。

「わ、たし……」

息が詰まりそうになりながら、震える声で切り出す。みんなの視線が一斉に向けられた。少し怯みつつも、逃げることなく、静かな口調で噛みしめるように述べていく。

「私、誰かに守られなくても生きていけるくらい強くなりたい。そうなれるように努力するつもりでいるわ。でも……」

そこでいったん言葉を切ると、小さく息を吸い、顔を上げてサイファを見据える。

「いざというときは、ジョシュが守ってくれると信じているから」

彼は決して頼りなくなんかない。

あのときだって、誰よりも必死にレイモンドから守ってくれたのだから——。

「なんか……いきなりこんなことになるなんてな……」

ジョシュは困惑を露わにししながら、濃紺色の空を仰ぎ見た。無数の星のきらめきが二人を照らす。空気はだいが冷え込んでおり、緩やかに頬を掠めるたび、火照ったそこから熱を奪っていた。

「きっと、アンソニーとおじさまの策略だったのね」

「ったく、勝手なことを……」

今にして思えば、サイファの厳しい言葉もこの結果を誘導していたとしか考えられない。けれど、それは自分たち二人のことを慮ってのことだろう。ユールベルはそっと隣に視線を向ける。まだ眉を寄せているジョシュの表情に、少し不安が湧き上がってきた。

「後悔しているの？」

「いや、後悔はしていない。……ユールベルは？」

「後悔していないわ」

二人は顔を見合わせて小さく笑った。

ジョシュは包み込むようにユールベルの手を握る。今朝のぎこちなさはもう消えてきた。ユールベルも、今朝は彼と離れることしか考えていなかったのに——。流されてしまった気がしないでもないが、後悔はしていないし、気持ちがずっと軽くなったように感じていた。彼の手のあたたかさに応えるように、そっと力をこめて握り返した。

コンコン——。

ユールベルは息を吸い込んで決意を固めると、立て付けの悪い扉をノックした。

「入れ」

すぐに、中から短い返事が聞こえた。相変わらず愛想のかけらもない声である。しかし、それさえも懐かしく感じてしまうくらい、長い間、ここを訪れていなかった。ユールベルはもう一度、深呼吸すると、ゆっくりと扉を引き開いた。

机に向かい本を読んでいたラウルは、ページを繰る手を止め、椅子を回して訪問者の方に体を向ける。そして、ユールベルの姿を認識すると、無表情のまま僅かに眉を寄せた。

「座れ」

そう言って、顎で丸椅子を指し示す。

ユールベルは引き戸を閉じて、素直に彼の前の椅子に座った。ギシ、と小さな軋み音が響く。

「おまえほど言うことを聞かない患者もいない」

「うそつき。私以外に患者なんていないくせに」

溜息まじりで落とされた言葉に、間髪入れずそう言い返したが、ラウルは何の反応も示さなかった。いつものように、無言でユールベルの頭を引き寄せると、抱え込むようにして後頭部の包帯の結び目をほどこうとする。が、いつになく手こずっているようだ。

「下手だな」

「えっ？」

「この包帯の結び方だ」

それまではユールベル自身やアンソニーが結んでいたが、最近ではジョシュが結んでいる。決して下手ということはないだろう。ただ、固く結んでほしいという願いをきいてくれているだけだ。反論したい気持ちはあったが、今はあえて口をつぐんだ。

広い胸に両手を置いたまま、あたたかさや鼓動を感じながら目を閉じる。

ラウルはしばらく結び目と格闘して、何とかほどくと、大きく手を回しながら包帯を巻き取っていく。覆われていた部分が露わになり、外気に触れてひやりとした。すぐに彼はユールベルの肩を押して体を離すと、手を洗って戸棚から薬と包帯を取り出し、左目とそのまわりを順に診察する。

「目のまわりが少しかぶれている。これ以上ひどくなりたくないなら、こまめに医者で診せろ。私でなくても構わん」

そう言うと、手早く薬を塗り、新品の包帯を巻き付けていく。そして、再び頭を引き寄せようとするが、ユールベルはラウルの胸を押し返してそれを拒んだ。怪訝な眼差しを送るラウルに、何も答えないまま、丸椅子をゆっくり回して背中を向ける。ラウルも何も言わず、その後頭部に手を伸ばして包帯を結び始めた。

「私、これからもラウルに診てもらおうわ」

「だったら真面目に通ってこい」

「ええ、そうするつもり……」

ユールベルは緊張を緩めるように小さく呼吸をして、言葉を継ぐ。

「私、もうすぐ結婚するの」

包帯を結ぶラウルの手が止まった。しばらく無言で固まったあと、再び手を動かし始める。

「本当なのか？」

「信じられない？」

ユールベルは思わず挑発的な口調で言い返した。しかし、わかっているのかいないのか、ラウルはますます神経を逆なでするようなことを言う。

「当てつけか？ それとも自棄か？」

「ひどい自惚れね」

ユールベルは呆れかえった。包帯を結び終わってラウルの手が離れると、くるりと椅子を回す。緩やかなウェーブを描いた金色の髪とともに、後頭部で真新しい包帯がふわりと揺れ、再びラウルに真正面から相対した。濃色の瞳を睨みつけて言う。

「おめでとうくらい言えないの？」

「めでたいかどうかわからん」

ラウルは素っ気なく答え、包帯の残りと薬を片付け始める。

「……相手は誰だ」

「あなたは知らないと思うけど、私と同じ研究所で働いている人よ。その人はラグランジェ家の人間ではないから、私もラグランジェ家を出ることになったの。おじさまにも許可をもらったわ」

ユールベルは淡々と説明した。そして、相槌すら打たない無表情な横顔を見据えて話を続ける。

「私、ようやく見つけたの。逃げ込める場所じゃなくて、縋りたい人じゃなくて、一緒に生きていこうと思える人。なぜだかわからないけど、彼と一緒にいると、虚しい気持ちにならずに、穏やかな気持ちでいられるから」

「そうか……」

ラウルはその一言だけ落とすと、机に向かった。

ユールベルは目を細めて広い背中を見つめた。そして、音を立てないようにそっと椅子から立ち上がると、その背中に小さくお辞儀をし、まっすぐ出入り口に歩を進めて扉に手を掛けた。そのとき――。

「ユールベル」

不意に名前を呼ばれて振り返る。しかし、彼は机に向かったまま、こちらに目を向けようとしなかった。どういうつもりなのかと怪訝に眉をひそめる。長い沈黙が続いたあと、小さくラウルの口が開いた。

「幸せになれ」

瞬間、ユールベルの右目から涙が溢れそうになった。すんでのところでそれを堪えると、もう一度小さくお辞儀をし、うつむいたまま医務室を出て扉を閉めた。そして、早足でそこから離れ

ると、胸に手を当てて深呼吸しながら顔を上げる。

ありがとう。

これまで拒絶し続けてくれて。

多分、あなたは優しくかった——。

今度こそ本当に大丈夫だと、ただの患者になれると、ようやく心からそう思えた。ゆっくりと階段を下りて外に出ると、目映いばかりの鮮やかな青空を仰ぎ、白いワンピースをひらめかせながら王宮をあとにする。その足取りは、今までにないくらい軽かった。

研究所の食堂で、ジョシュは今日もBセットを注文した。

昼食の載ったトレイを受け取ると、ぐるりとあたりを見まわし、混雑の中で空いている席を探す。と、窓際の席で穏やかな光に包まれているユールベルが目についた。彼女の昼休みは遅れることが多く、正規の休憩時間に来ていることはめずらしい。

さっそく彼女の方へ足を進めようとしたが、そのとき、向かいにサイラスが座っていることに気がついた。一瞬、躊躇するものの、もう以前とは違う。小さく息を吸い込んで、二人のテーブルへと進んでいった。

「サイラス、一緒にいいか？」

「あ、ジョシュ。もちろんだよ」

サイラスは人当たりのいい笑みを浮かべて、自分の隣を示す。サイラスが一人で食事をしているときに声を掛けることはあるが、ユールベルと一緒にの今でも、そのときと何ら変わらない調子で答えてくれた。

ジョシュが示された席に座ると、向かいのユールベルが少し戸惑ったように目を泳がせた。

「ユールベルとは久しぶりなんじゃない？」

サイラスは明るく言う。

ユールベルとは結婚することを決めていて、すでに一緒に暮らしているのだが、まだ研究所のほとんどの人には秘密にしていた。知っているのは所長と副所長くらいだ。といっても、ジョシュが話したわけではなく、サイファの方から話がいったらしい。ユールベルがラグランジェ家を出ることになるので、その報告も兼ねて、早めに話を通しておきたいというのが彼の意向のようだ。時が来れば、所長から他の人にも話が伝わるだろう。

「そうでもないよ」

「そうなの？」

サイラスは意外そうに軽く聞き返した。ジョシュは無表情のままサラダを口に運んだが、ユールベルはまだ困ったような表情を見せている。二人の様子が気まずそうに見えたのか、サイラスは気を遣って、何気ない調子で別の話題を振ってくれた。

ぼんやりとその話を聞きながら、ジョシュは考え込んだ。

ユールベルとのことが皆に知られてしまう前に、サイラスにだけはどうしても自分の口から伝えたい。けれど、なかなかきっかけが掴めず、どうしたものかところ一週間ほどずっと悩んでいた。もしかしたら、今が絶好の機会なのかもしれない。が、やはり、まわりに大勢の人がいる状況はいただけないだろう。できれば、二人きりのときがいいのだが、そういう機会が度々あるわけもなく――。

「ジョシュ？ どうしたのぼーっとして。悩みごと？」

「ん、いや……」

すっかり手が止まっていたジョシュに、サイラスが気遣わしげに声を掛けてきた。ユールベルも不安そうに顔を曇らせている。もっとも、サイラスと違って、ユールベルにはその理由がわか

っているはずだ。

「じゃあ、根を詰めすぎなんじゃない？」

「……かもな」

ジョシュはスパゲティをフォークで巻き取りながら、曖昧にそう答える。

「もうちょっと気楽にした方がいいよ」

「おまえは気楽すぎるんだよ」

そう言いながらも、彼の気楽さは正直うらやましいと思っている。サイラスくらいの気楽さがあれば、悩むことなく、簡単に結婚のことを話すことができただろう。だが、性格なのでどうしようもない。気楽にしようと頑張ったところで、気楽にできるものではないのだ。

「そうだね、僕とジョシュを足して2で割ったらちょうど良さそうだね」

サイラスは楽しそうにそんなことを言う。

確かに、そのくらいがちょうどいいのかもしれない。ジョシュがふっと表情を緩めると、ユールベルもほっとしたように小さく息をつく。彼女にも随分と心配を掛けているようだ。彼女を安心させるためにも、早くサイラスに報告しなければ、とジョシュはあらためて思った。

しかし、結局、この日も何も言えないまま終わろうとしていた。

ジョシュは欠伸を噛み殺しながら大きく伸びをすると、ぐったりと机に突っ伏した。仕事で疲れたというのもあるが、サイラスに今日も言えなかったということが、精神的に大きなダメージとなっていた。自分の不甲斐なさにはとことん呆れるしかない。

もうこのフロアにはもう誰も残っていなかった。

ユールベルもすでに帰っているだろう。せっかく二人で暮らすようになったのに、平日は帰るのが遅く、なかなか一緒に過ごす時間が持てなかった。だが、帰ったときに「おかえりなさい」と言ってくれる人の存在は、とてもありがたいものだ実感している。その小さな言葉だけで気持ちがあたたかくなれるのだ。

そんなことを考えていると、急に家が恋しくなった。

そろそろ切り上げて帰ろうと、机の上に散らばった資料やデータを片付け始める。そのとき――。

「ジョシュ、もう帰るの？」

ふいに名前を呼ばれて振り返る。そこにいたのはサイラスだった。残って仕事をしていたのか、それともアカデミー帰りなのかはわからないが、ジョシュのいるフロアに入ってくると、ニコニコしながら歩み寄ってくる。

「ああ、そろそろ帰ろうと思ってる」

そう答えながらも、ジョシュはチャンスかもしれないと思う。今なら二人きりでまわりに誰もいない。だが、どう切り出していいかわからず、挙動不審にあたふたと目を泳がせてしまう。

サイラスはジョシュの隣の席に腰を下ろした。

「もしかして悩みごと？」

「えっ？」

「昼間から何かずっと考え込んでたよね」

「……………」

まさかサイラスが気にしてくれていたとは思わなかった。ジョシュは資料の山に手を置いて下を向く。なぜ悩んでいたのか、何を悩んでいたのか、それを伝えられればすべて解決するのだ。今しかない——意を決すると、ごくりと喉を鳴らし、何の前置きもなくストレートに切り出す。

「俺、結婚するんだ」

「……えっ？」

サイラスはきょとんとして短く聞き返した。無理もない。本人でさえ信じがたい話なのだから。しかも——。

「相手は、ユールベルだ」

噛みしめるように言葉を落とす。

サイラスは絶句したまま、口を半開きにして固まった。

ジョシュもそれ以上は何も言えなかった。

長い沈黙と静寂が続く。

やがて、サイラスがわずかに掠れた声で言葉を絞り出す。

「ユールベルは、何も言ってなかったけど……」

「俺から話したかったから、言わないでくれるよう頼んでおいた。サイファさんにも許可をもらって、今はもうユールベルのあの家で一緒に暮らしてる。弟のアンソニーはサイファさんの家に引っ越したから二人きりだ」

「……そうだったんだ」

サイラスは独り言のようにつぶやくと、息をつき、それからにっこりと大きな笑顔を作って言う。

「良かったね、おめでとう」

「ああ」

ジョシュはほっと胸を撫で下ろした。

けれど、それがサイラスの本心かどうかはわからない。いつからそうなったのか、どうしてそうなったのかなど、何も聞いてこないのが気になっていた。本来の彼なら、無神経なくらい根掘り葉掘り聞いてくるところだ。ただ驚いているだけだろうか。それとも——。

「……なあ」

「なに？」

「いや、何でもない」

彼自身が自ら言わないことなら、聞き出さない方がいいと思い直す。

自分はサイラスから思われているほどお人好しではない。多分、本当は以前から気付いていたのだろう。けれど、彼に対して、遠慮することも思いやることもなかった。自分から伝えたいというのは、せめてもの罪滅ぼしのつもりだったのかもしれない。そんなことは、ただの自己満足に過ぎないとわかっているのだが——。

「結婚祝いに何か贈るよ」



「そんな無理するなよ」

「……させてよ」

サイラスはぽつりと短い言葉を落とす。気のせいかな、その声にはどことなく寂寥感が滲んでおり、ジョシュは何も返すことができなかった。現実から逃避するかののように、ギィと軋み音を立てて椅子を引き、資料を机の引き出しに片付け始める。フロアにはその小さな音だけが響いていた。

「でも、ジョシュで良かった」

沈黙を破ったのは、何かを吹っ切ったような声だった。

振り返ると、彼は普段と変わらない人当たりの良い笑みを浮かべていた。

今の自分にできることは、彼の思いを裏切らないことだけ。これからもずっとそう思ってもらえるように、ユールベルを幸せにし、そして自分も幸せになる——その決意をあらためて強くする。ひとつ、また新たに責任が増えたが、それは決して嫌なものではない。ジョシュはまっすぐに彼を見つめ、そっと微かに笑みを返した。

「やあ、いらっしゃい。まさか君の方から足を運んでくれるとは思わなかったよ」

「は……」

正面の執務机でにこやかに笑みを湛えるサイファとは対照的に、ジョシュは血の気の引いた顔をこわばらせながら扉に張り付いていた。脚も少し震えている。

「どうした？ 遠慮せずこっちに来たらどうだ？」

「あ、いや……すごい眺めですね……」

何とか答えたその声は、隠しようもなくうわずっていた。サイファはぱちくりと瞬きをする。

「なんだ、君は高所恐怖症なのか」

「こんな高いところは初めてで……」

魔導省の塔の高さは尋常ではない。これまでジョシュは高所を怖いと思ったことはなかったが、この塔の最上階へ来て、そこから広がる光景に初めて足のすくむ恐怖を覚えた。しかも、サイファの背後は一面大きなガラス窓になっており、見たくなくとも強制的に目に入ってしまうのだ。

サイファはすっと立ち上がって隅へ向かうと、そのガラス窓に焦茶色のカーテンを引いた。金の髪をさらりと揺らして振り返り、にっこりと笑みを浮かべて尋ねる。

「これでどうかな？」

「あ、はい……」

ジョシュは大きく安堵の息をついた。先ほど目に焼き付いた光景が消えるわけではないが、視界から隠れたというだけで、ようやく少しずつ心が落ち着いていくのを感じる。そんな自分を幾分情けなく思いながらも――。

「ユールベルとのことで何か問題でもあったのか？」

サイファは、執務机の上でゆったりと手を組みながら、まっすぐにジョシュを見つめて尋ねる。

ジョシュは相談があるとしか言っていなかったが、あえてサイファに相談となれば、ユールベルに関することと推測されても不思議ではないだろう。そして、それはあながち的外れでもない。

「ユールベルというより、ウチの家族の方なんですけど……」

なんと説明しようか悩んで口ごもっていると、サイファの方から尋ねてくる。

「君の家族には結婚することを伝えたんだな」

「相手が18歳って言ったら目を丸くして、名前を言ったら卒倒しかけました」

「だろうね」

サイファは気楽に笑っているが、ジョシュとしては笑いごとでないくらい大変だった。何も知らない深窓の令嬢を騙して自分のものにしたと誤解され、まるで女性の敵を見るような目つきで母親に責め立てられたのだ。騙してなんかいないと何度も力説したが、今でも完全には信じてい

ないのかもしれない。

「それで、反対されたのか？」

「いえ……むしろその逆というか……」

ジョシュは苦い顔でそう言うと、小さく息をついて続ける。

「相手のご両親に挨拶をって意気込んでるんです。ユールベルはラグランジェ家を出るんだから、ラグランジェ家とは無関係だと説明したんですが、そういう問題じゃない、大切なお嬢さんをいただくんだから挨拶するのは当然だって言い張って」

「まあ、真っ当な感覚だね」

サイファは呑気にそんなことを言う。

「でも、ユールベルの両親は……」

ジョシュはそう言いかけて目を伏せた。相手の両親に会わせたくないことが、余計に母親の不信を煽っているらしく、挨拶しようと意地になっているのはそのせいもあるようだ。それが出来るくらいなら、初めからしている。そして、その事情を説明しようにも、どこまで言っているのかわからない。だから、二進も三進もいかなくなって、苦手なサイファにこうやって助言を求めに来たのだ。

サイファはちらりと腕時計に目をやると、すっと立ち上がった。

「よし、今から行くか」

「は？」

話が飛躍して、ジョシュには何のことだかわからない。しかし、サイファはもうコートを羽織ろうとしていた。

「行くって……どこへ？」

「もちろん君の実家だよ」

「え?!」

ジョシュは素っ頓狂な声を上げた。

「その方が早いだろう？」

サイファは襟を直しながら事も無げに言う。しかし、ラグランジェ本家の当主がたかが一所員の実家を尋ねるなど、普通に考えたらありえないことだ。ジョシュとしては、ありがたいというより困惑の気持ちの方が大きい。

「仕事はどうするんですか」

「これから定例会議だからちょうど良かったよ。たいして意味のない会議だからね」

「いや、なに言ってるんですか！ちゃんと仕事してください！！」

いい加減なことを言い出したサイファに、ジョシュは思わずカッとして声を荒げる。根っからの真面目人間であるジョシュには、とても許容できることではない。なにより自分の勤める魔導省の副長官なのだ。きちんと仕事してほしいと思うのは当然だろう。ちなみに、ジョシュは届けを出して早退してきたので、言い返されるような隙はない。

しかし、サイファは涼しい顔で背を向けると、カーテンに手を掛けて一気に開いた。

赤く色づいた光が射し込む。

先ほどとは比べものにならないくらい間近で広がった、その高所の景色に、ジョシュは目を逸らすのも忘れて完全に凍りついた。もうサイファに意見するところではない。頭の中がグラグラまわっているようで何も考えられなかった。

「さあ、行こうか」

サイファはそう言ってにっこり微笑むと、倒れそうになるジョシュの肩に力強く手をまわした。

それから20分ほど車を走らせ、ジョシュの実家の前についた。

車は魔導省が持っているものらしく、車を運転しているのも職員らしい。完全に公私混同である。しかし、ジョシュが何を言っても彼はニコニコしたまま取り合わない。たまにはいいだろうと受け流すだけである。結局、文句を言いながらも一緒に来てしまったのであるが――。

「そういえば、どうしてウチの実家を知ってるんですか」

「これでもユールベルの親代わりだからね」

つまり、結婚相手のことは徹底的に調べたということだろう。ジョシュは少しムツとして眉をひそめたが、冷静に考えれば仕方のないことだとも思う。ユールベルもラグランジェ家の人間なのだから、いくらラグランジェ家を出るとはいえ、問題のある相手に嫁がせるわけにはいかないはずだ。

「親に話を通して来るので、少し待っててください」

「ああ、早めに頼むよ」

サイファはニッコリ笑って、軽く右手を上げる。

ジョシュは気が重かった。この事態をいったいどう説明すればいいのだろう。軽く溜息をついて玄関に足を向けようとした、そのとき――。

「あら、やっぱり来てたの？ 声が聞こえたから、もしかしたらと思ったんだけど……」

玄関の扉が開き、中からエプロンをつけた母親が出てきた。

心の準備が出来ていなかったジョシュは、あたふたしながら母親とサイファを交互に見る。が、サイファはにこやかに会釈し、紹介してもいないのに勝手に挨拶を始めた。

「初めまして、私は――」

「ラグランジェ本家当主っ？！！」

母親は顔を見ただけですぐに誰だか認識したらしく、目を見開いて絹を裂くような声を上げると、後ずさりながらよろけて尻もちをついた。脱げたサンダルが派手に転がる。サイファは自分の足もとで止まったそれを、にこやかな笑顔で拾い上げた。

その後、サイファを玄関前に待たせ、母親は大慌てで掃除と片付けを始めた。当然のようにジョシュも駆り出される。どうして前もって言わないの？！ あんたのせいでとんだ恥をかいたじゃないの！ と責められたが、つい数十分前に決まったばかりのことなのでどうしようもない。元凶であるサイファの顔を思い浮かべながら、ジョシュは眉間に皺を寄せた。

「お待たせして申し訳ありません。それに、汚いところで……」

「こちらこそ、突然お邪魔をして申し訳ありません」

恥じ入るように肩をすくめる母親に、サイファは満面の笑みで受け答えする。それだけで彼女の頬は桜色に染まった。先ほどの怒りはどこへ行ったのだと、ジョシュは苦々しい気持ちになる。ローテーブルに置かれたティーカップに手を伸ばし、平静を取り戻すべく紅茶を口に流し込んだ。

「今日はユールベルさんのことで……？」

「はい、彼女の親代わりとして、お話ししておきたいことがあって参りました」

親代わりという言葉聞いて、母親は口もとに手を当て、不思議そうに目をぱちくりさせた。ジョシュはもちろん知っていたが、母親にはまだ伝えていなかった。親代わりがいるという話をすれば、実の両親のことにも触れざるを得ないからだ。

しかし、サイファには何の躊躇も感じられなかった。

まっすぐにジョシュの母親を見つめたまま、落ち着いた口調で、ひとつひとつわかりやすく説明を始める。ユールベルの目に負った怪我のこと、両親から虐待を受けていたこと、それゆえ両親とは会わせないようにしていること、両家の顔合わせも容赦してほしいということ——ラグランジェ家としては表に出したくない話もあるはずなのに、どれもジョシュが心配になるくらい正直に語っていく。

母親がどう反応するのも心配だったが、彼女はサイファの言うことに理解を示し、おまけにすっかりユールベルの境遇に同情したようで、目に涙を浮かべながら「これからは私が幸せにします」などとわけのわからないことまで言っている。ジョシュは頭を抱えたが、つまりはユールベルを受け入れてくれるということであり、それに関しては言葉にしようもないくらい感謝した。

「あんなことまで言って良かったんですか？」

「君の母上が言いふらさなければ問題ないよ」

すっかり夜の帷が降りた空を見上げ、サイファは軽く笑いながら答える。その言葉に、ジョシュはそこはかたないプレッシャーを感じ、あとで母親に釘を刺しておかなければと冷や汗を滲ませる。サイファを敵にまわすと恐ろしいということが、今日だけで何となくわかってきたような気がした。

車を置いた近くの空き地へ、二人は人通りの少ない細道を並んで歩く。

ジョシュの家には1時間ほど滞在していただろうか。その間、仕事でもないことで、ずっと運転手を待たせてしまったことになる。ジョシュは申し訳なさで胃が痛くなりそうだった。ジョシュのやったことではないが、ジョシュのためであることは間違いない。サイファがここにいることも——。

「あの、今日はありがとうございました」

そう言うと、サイファは少し驚いたように振り向いた。その鮮やかな青の瞳に捉えられ、ジョシュの心臓はドクリと跳ね上がる。

「あ……でも、わざわざ家にまで来てくれなくても……」

「私が直接説明した方が早いだろう？」

サイファはにっこりと魅惑的に微笑んで言う。

悔しいが彼の言うとおりである。自分にはあれほどわかりやすく説明は出来ないし、たとえ同じ説明をしたとしても、おそらく母親は簡単には納得してくれなかったに違いない。ラグランジェ本家当主という立場だからこそ、あの話に説得力を持たせられたのだ。そのことは誰よりも彼自身がいちばんわかっているはずだ。そして、その整った美しい顔が武器になるということも――。

「利用できるものは、何でも利用すればいいんだよ」

「自分には、利用できるものなんて何もありませんから」

ジョシュは前を向いたまま少しムツとして答える。サイファのことにやたらと腹が立つのは、彼の狡さが許せないだけでなく、多くのものを持つ彼に対する僻みもあるのだろう。そんな自分の卑しさにはとうに気が付いていた。

サイファはゆっくりと視線を流す。

「ジョシュ、どうして私がここまで来たかわかるか？」

「……ユールベルのため、ですよ？」

それ以外には考えられなかった。ただ、なぜそんなことを尋ねるのがわからない。答えを求めるように困惑した眼差しを送ると、サイファは目を細めてくすつと笑った。

「君の場合、無自覚の方がいいのかもしれないな」

「いったい何が言いたいんですか」

一向に真意が見えない苛立ちが声に滲んだ。しかし、サイファは思わせぶりに微笑むだけで、何も答えようとはしない。彼のそういう人をからかうようなところが嫌いだった。ラグランジェの名や立場を何かにつけ利用するところも嫌いだった。自分なら何でも許されると思ってそんなところも嫌いだった。

けれど――。

ユールベルがなぜ彼を頼りにしているのか、そのことに関しては理解できるような気がした。悔しいが、実際に自分はサイファほど彼女のことを守れていない。でも、いつかは彼に頼らなくても済むように、自分の力で彼女を守れるようにならなければ――ジョシュは口をきゅっと引き結んだ。

横目でその様子を見ていたサイファは、ふっと表情を緩め、微かな夜風を受けながら紺色の空を仰いだ。

## 陽の当たる場所（最終話）

---

「あっ……」

ベランダに足を踏み出したユールベルは、プランターに目を落として小さく声を上げた。如雨露を持ったまま、瞬きも忘れるほどに、じっとそのプランターを見つめる。白いネグリジェが風をはらんでふわりと揺れた。

「どうした？」

寝室から出てきたジョシュは、立ち尽くすユールベルに気付くと、半開きの窓に手を掛けて顔を覗かせた。それでもユールベルの視線はプランターから離れない。不思議そうに、ジョシュはその視線をたどる。

「あっ！」

その声には、驚きとともに喜びの色も混じっていた。おかげで、ユールベルにもようやく実感が湧いてくる。

プランターには、ひとつだけ赤い花が咲いていた。

それは、ジョシュに頼んで、土作りから種蒔きまでしてもらったものである。最初はユールベルとアンソニーで、数週間前からはユールベルとジョシュで世話をしてきた。本当に花を咲かせるのだろうか、と不安に思いつつも、祈るような気持ちで水をやり続けた。そして――。

「そろそろとは思ってたけど、まさか今日だなんてな」

「ただの、偶然だわ……」

可愛げのない言葉を返すユールベルを、ジョシュは背後からそっと腕の中に引き入れる。

「じゃあ、すごく幸せな偶然だ」

あたたかな声が耳を掠める。

ユールベルは少し体温が上がるのを感じた。何か言おうとするものの、上手く言葉が出てこない。代わりに、自分を閉じ込めるその腕に、おずおずと自分の手を重ね置く。彼の腕に柔らかく力がこもった。

ベランダから見えるのは、まだ静かな早朝の街。

昇り始めた太陽が二人を照らす。

生まれたての赤い花は、優しくそよぐ風に小さく揺れていた。

家具や調度品の類がほとんど置かれていない、簡素な部屋。

さほど広くなく、古びているが、隅々まで清掃はされているようだ。

ユールベルはその部屋の奥で、全身が映せるくらいの鏡と向かい合わせに座っていた。膝にのせた自分の手に、じっと目を落としている。鏡はいまだに苦手でもともに見られない。背後では、緩やかなウェーブを描いた金の髪を、ほっそりとした手がブラシで丁寧に梳かしていた。

「ごめんなさいね」

「えっ……」

戸惑いの声にも手を止めることなく、レイチェルは言葉を繋ぐ。

「あちらのお母さまは、ドレスのことはわからないそうだから……」

ユールベルがうつむいたまま少し視線を上げると、そこにはウェディングドレスを着た自身の姿が映っていた。自分にはふさわしくないと感じるほど、清楚で、繊細で、それでいて華やかさもある純白のドレス——これを着せてくれたのがレイチェルである。自分ではしたことの無い化粧も施してくれた。そして、次はこの長い髪を整えようとしているようだ。彼女の手には迷いはない。ただ、鏡越しに見た表情は、気のせいかどこか寂しそうに見えた。

「別に、今はもう……」

ユールベルはうつむき、ぽつりと言う。

あの頃——自分の欲してやまなかったものを、すべて当たり前のように手に入れ、そして、当たり前のように享受していた彼女が許せなかった。けれど、今は、それが自己中心的な感情だったことを理解している。彼女に対する苦手意識は消えないものの、あのときのような激しい敵意や不快感はない。

「私は……」

じっと考え込みながら、静かに切り出す。

「今まで、世界が怖くて仕方なかった。まわりのものすべてに怯えていた。だから、他人と関わりたくなかったし、攻撃的になったりもした。でも……、何があっても自分の味方でいてくれるって、そう信じられる人ができたおかげで、少しだけ世界が怖くなくなったの……こんな気持ち、あなたにはわかってもらえないでしょうけど……」

髪を梳く手がゆっくりと止まった。

「少しは、わかるわ」

レイチェルは控えめにそう言うと、再びブラシを持つ手を動かし始める。

「私は、一生を掛けてその恩を返していこうって決めたの」

もしかすると、それはアンジェリカが生まれた頃のことかもしれない。漆黒の瞳を持つ「呪われた子」を生み、一族から白い目を向けられていたことを、ユールベルも何となく覚えている。そして、そんな彼女を救ったのが、サイファということなのだろう。

「私も……ジョシュに返していけたらいいんだけど……」

「その気持ちを、ずっと持ち続けていれば大丈夫よ」

レイチェルは優しい声で言う。しかし、ユールベルは顔を曇らせた。

「自信がないの」

「えっ？」

「私には愛情を返せる自信がない」

鏡越しに、レイチェルは蒼い瞳をぱちくりさせ、不思議そうな顔で小首を傾げた。

ユールベルは頭の中を探りながら言葉を紡いでいく。

「いつも私のことを大切にしてくれて、とても感謝しているけれど、ジョシュを愛しているのかはわからない……愛するということがよくわからないの……彼に愛されているかどうか



さえ……」

心の隅に追いやっていた漠然とした不安。しかし、それを言葉にするにつれ、とんでもなくひどいことだと気付かされる。こんな気持ちで結婚するなど彼に失礼だろう。けれど、ここまできて今さらどうすればいいのか着地点が見つからない。考えているうちに、頭がぐらぐらして少し気持ち悪くなってきた。

「難しく考えることはないんじゃないかしら」

ユールベルの気持ちを知ってか知らずか、レイチェルはさらりと言う。僅かに眉を寄せて視線を上げると、鏡の向こうで、彼女は慈しむように微笑んでいた。

「おかえり、ただいま、ありがとう——そんなささやかな思いやりと感謝の積み重ねが、愛情になっていくんだと思うわ。これから長い時間を掛けて、あなたたちふたりが、あなたたちだけの愛情の形を作っていくの」

「そんな……こと、で……」

「そんなことだけど、とても大切なことよ」

にわかには受け入れられなかったが、彼女の言葉を聞いていると、不思議と信じてみたい気持ちになる。実際に、ささやかな感謝と思いやりが、どれほど気持ちをあたたかくしてくれるのかは、ユールベルもすでに十分すぎるくらい実感している。それが愛情と呼べるものかはわからない。けれど、もしも本当にレイチェルとサイファがそれを積み重ねてきて、その結果として今の二人があるのだとすれば——。

ふわり、と右目の包帯の上に何かが被せられた。

「えっ、なに……？」

「せっかくきれいなドレスを着ているのに、ただの包帯では素っ気ないでしょう？」

そう言われて、ユールベルは鏡に目を向ける。

包帯の上に巻かれていたのはレースだった。白い包帯の上に白いレースなので、目立ちはしないが、かえってそのことが上品さを醸し出している。ドレスのレースとも調和していた。

「言うなって口止めされたんだけど……」

レイチェルはそう前置きをして、静かに続ける。

「実は、ラウルが用意したものなの」

「……………」

ユールベルは目頭が熱くなるのを感じた。きのう彼に診察してもらったが、そんなことは何も言っていなかった。淡々と診察を終えただけである。結婚式の話も出なかったし、出さなかった。まさか、気に掛けてくれていたなんて——。

「ありがとう、って伝えて」

「ええ、必ず」

レイチェルはにこやかにそう答えると、ふんわりと軽やかなウェディングベールを手に取った。

「あの……」

すっかり支度を終えたジョシュは、パイプ椅子に座るサイファに目を向け、遠慮がちに切り出した。

「すみませんでした。何から何までお世話になって……」

「君に任せていたら二年くらいかかりそうだからな」

「そこまではかかりませんよ」

少しムツとして言い返すと、サイファはあははと軽く笑う。

当初、ジョシュたちは結婚式を挙げないつもりだった。しかし、サイファは、式を挙げないのなら結婚を許可しないと言い出し、あっというまに教会から衣装まで手配してしまったのだ。勝手なことを、とジョシュは腹立たしく思ったが、ユールベルの花嫁姿を見たい気持ちもあり、あまり文句も言えないまま流されてしまった。ユールベルも、サイファの言うことでは逆らえず、渋々ではあるが受け入れざるを得なかったようだ。

「ユールベルの保護者として、してやれる最後のことなんだよ」

サイファは優しく微笑んで言い添える。

ユールベルは結婚と同時にラグランジェ家を出ることになる。これからはラグランジェとは無関係の人間となり、サイファも表立って彼女を守ることはできなくなるのだ。そして、一度ラグランジェ家を出た人間が、再び戻ることは決してできない。その責任の重さに、ジョシュはあらためて身の引き締まる思いだった。

「小さいけれど、いい教会だろう？」

「はい」

確かに、普通に結婚式を挙げるには小さすぎるが、伝統のある教会だと聞いている。そう聞いたせいかもしれないが、他の教会よりも厳粛な雰囲気があるように感じられた。建物も長椅子も古びてはいるものの、上質のものを丁寧に使っているためか、かえって風格と格式が増しているようだ。

「私とレイチェルも、ここで結婚式を挙げたんだよ」

「えっ？」

聞き返した声に、怪訝な色が滲んだ。ラグランジェ本家の人間といえば、お披露目も兼ねて大々的にやるものだと思っていた。なのに、こんなに小さな教会で挙式なんて、いったいどうして――。

「ちょっと、事情があってね」

サイファはごまかすように言葉を濁したが、微妙な面持ちをしているジョシュを見て付言する。

「いつか、気が向いたら教えてあげるよ」

別に、何がなんでも聞き出したいわけではなかった。誰にだって、言えないことや言いたくないことくらいあるだろう。ただ、すべてが順風満帆だと思っていたサイファにも、何らかの問題があったらしいことに、少なからぬ驚きを感じただけである。

「ジョシュ」

サイファは真面目な顔になり、少しあらたまって語りかける。

ジョシュは緊張してごくりと唾を呑んだ。

「わかっているとは思いますが、これはゴールではなく通過点に過ぎないからな。昨日があって今日がある。今日があって明日がある——過去を作るのも、未来を導くのも、現在の自分ということだ」

その言葉をしっかりと噛みしめ、真剣に頷く。

これから長く続いていくであろうこの道を、自分自身のためにも、ユールベルのためにも、幸せなものにしなければならない。そのためには、現在という一瞬一瞬を、大切に積み重ねていくことが必要なのだ。

「おに一さんっ」

弾んだ声とともに扉が開き、スーツ姿のアンソニーがにこやかに顔を覗かせた。

「姉さんの支度が終わったって」

待ちかねたその言葉に、ジョシュはパッと顔を輝かせる。サイズ調整のために、ユールベルは一度試着したことがあるのだが、ジョシュはそれを見ていなかった。新郎は結婚式の日まで新婦の花嫁姿を見てはならない、というしきたりがあるからだ。ようやく見られると思うと、自然と顔の筋肉が緩んでくる。

「式の最中はあまり締まりのない顔をするなよ」

「わ、わかってますよっ！」

サイファにからかい半分で忠告され、ジョシュはあたふたと言い返す。しかし、確かに気をつけていなければ緩みっぱなしになりそうで、自分自身でも冗談抜きで少し心配になってきた。

重厚な両開きの扉が大きく開け放たれていた。

そこから射し込む白い陽光は、中央の赤い絨毯を鮮やかに照らしている。

ジョシュとユールベルは、その突き当たりにある祭壇の前に並んで立っていた。二人とも神聖な雰囲気呑まれ、やや緊張ぎみの表情を見せている。足下にはステンドグラスの光が落ち、純白のドレスの裾を、幻想的な彩りで染め上げていた。

赤絨毯の両側に並んだ木製の長椅子には、ジョシュの関係者である彼の両親と、ユールベルの関係者であるサイファ、レイチェル、アンソニーが、それぞれ左右に分かれて座っていた。サイファたちはにこやかに見守っているが、ジョシュの両親はどちらも緊張しているようで、必要以上に姿勢を正し、ガチガチにこわばった表情で正面を見つめている。

神父は誓いの言葉を読み上げ始めた。

「ジョシュ＝パーカー、あなたはいまこの女性と結婚し、神の定めに従って夫婦となろうとしています。あなたはその健やかなときも、病めるときも、豊かなるときも、貧しきときも、この女性を愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、そのいのちの限りともに生きることを誓いますか」

「……誓います」

ジョシュは少し掠れた声で答えた。

神父はユールベルに視線を移し、読み上げる。

「ユールベル＝アンネ＝ラグランジェ、あなたはいま——」

その言葉を聞きながら、ユールベルは、これまでのことを走馬燈のように脳裏によみがえらせていた。自暴自棄になっていた自分が、ここまで辿り着くことができたのは、ジョシュはもちろんのこと、サイファやラウル、ターニャ、レオナルド、ジーク、アンジェリカ、サイラス、アンソニー、その他たくさんの人たちが見捨てずにいてくれたからだろう。思い返すのも怖いくらい迷惑も掛けた。だからといって、ここで身を引いたところで何にもならない。感謝と謝罪の気持ちを胸に、怖がらず……いや、怖がりつつも、前を向いて進んでいこうと決めたのだから。

「——ことを誓いますか？」

「誓います」

神父の言葉が終わると、ユールベルは凜とした声で答えた。

「結婚の誓約の印に、指輪の交換をいたします」

神父が二人の結婚指輪を取り出した。シンプルなプラチナ製の指輪である。教会も衣装もサイファに決められてしまったが、これだけはジョシュとユールベルの二人で選んだものだ。指輪のことなどよくわからなかったが、飽きのこないものにしたいという思いは一致していたので、それほど迷うことなく選ぶことができた。

神父の導きに従い、指輪の交換を始める。

だが、二人とも指輪など初めてで、手つきはぎこちなく、なかなか上手くいかなかった。サイファとレイチェルは顔を見合わせてくすっと笑い合い、アンソニーはからかうようにニヤニヤとしているが、ジョシュの両親は心配のためか顔から血の気が引いている。ようやく嵌め終わると、彼らは本人たち以上に大きく安堵の息をついた。

神父も少しほっとした様子で、次の段取りに移る。

「それでは、誓いの口づけを——」

ユールベルは少し顔を上げ、ジョシュを見つめてから目を閉じた。

身を屈めた彼から、触れるだけの優しい口づけが落とされる。

唇に残る、あたたかい感触——。

ユールベルは、ゆっくりと睫毛を震わせながら目を開く。

そして、再び視線を合わせると、互いに幸せそうに微笑み合った。

「おめでとう、ユールベルっ！」

「どうして……？」

ユールベルたちが教会の外に出ると、ターニャとレオナルドがひょっこり姿を現した。ターニャに結婚するという報告はしたが、家族のみの式だからと、場所や時間までは教えなかったはずだ。もしかして、と背後のアンソニーを振り返ると、彼は悪戯っぽくニッと白い歯を見せた。ユールベルは呆れたように溜息をつく。

「来ないでって言ったのに……」

「あら、たまたま通りがかっただけよ、ね？」

「ま、そんなところだ」

ターニャとレオナルドは、ニコニコしながら、示し合わせたようにとぼけた言い訳をする。その悪びれない態度と、どこか幸せそうな雰囲気、ユールベルはすっかり毒気を抜かれた。

「式も見てたの？」

「ええ、こっそりと」

ターニャはそう言うと、夢見がちに目を輝かせて両手を組み合わせる。

「ユールベルすっごくきれいだし、雰囲気も神聖で厳粛で、それでいてあたたかくて……ひいき目なしに素敵な式だったわ！ こういう小さな教会での結婚式って憧れちゃうっ」

「残念だが、そうはいかないぜ」

レオナルドはニヤリと口の端を上げた。

「ラグランジェ家がこんな貧相な結婚式なんて挙げられるか。思いっきり威厳を見せつけるために、これでもかってくらい豪華で盛大な式にするんだからな」

言いたい放題な彼に、ターニャはじとりと冷ややかな視線を流す。

「私、あなたと結婚するとは言ってないわよ」

「え？ ちょっ、誰だ？ 他に誰かいるのかっ？！」

わたわたするレオナルドに、彼女はツンと背を向ける。しかし、ユールベルには密かにペロツと舌を出して見せた。この二人が付き合うようになってから、一緒にいるところを見たのは初めてだが、思いのほか波長が合うように感じられた。それは、二人をよく知るユールベルにとっても嬉しいことだ。少し考えた後、持っていたブーケをそっとターニャに差し出す。

「えっ？」

「もらって」

それでもターニャは戸惑っていた。口元に僅かな喜びを覗かせつつ、瞳は困惑したように揺らいでいる。

「……いいの？」

「もらってほしいの、あなたに」

ユールベルは少しも目をそらすことなく言う。ターニャは恥ずかしそうにはにかんで頷くと、差し出されたブーケをそろりと受け取った。ありがとう、と小さな声で感謝を述べながら、無垢な白い花に目を落とし、頬をほんのりと赤く染める。

「よし！ さっそく結婚式場を決めに行くぜ！」

「ちょっ、なにバカなことやって……きゃっ！！」

余韻に浸る間もなく、ターニャはレオナルドに無理やり手を引かれ、よろけてこけそうになりながら走り出す。それでもブーケはしっかりと手に持ったまま、それを高々と掲げ、満面の笑みを浮かべて「じゃあ、またね！！」と声を張り上げた。

その様子を、ジョシュはポカンと眺めていた。

「慌ただしい奴らだな」

「ええ」

ユールベルは、ターニャたちの消えていった方を見つめながら目を細める。

「二人には幸せになってほしい」

「二人にも、だろ？」

ジョシュはユールベルの肩にポンと手を置いて言う。

一瞬、ユールベルはその意味がわからず、きょとんとしてジョシュに振り向いたが、彼の表情を見て言いたいことを理解した。胸にあたたかいものを感じながら、こくりと頷いてみせる。

やにわに、少し強めの風が吹いた。

長い髪とウェディングベールが軽やかに舞い上げられる。

ユールベルは、その風の行き先を追って顔を上げた。

優しい陽だまりの上には、優しい空色が広がっていた。

今日まで私を生かしてくれてありがとう。

これからは、私自身の意志で生きていく——。

ユールベルは空を仰ぎ見たまま、隣のジョシュの手を握った。

彼は少しばかり驚いていたが、すぐに優しく握り返した。

そして、ゆっくりと顔を見合わせ、柔らかく穏やかに微笑み合った。

まるで、二人を包み込むこの陽だまりのように。